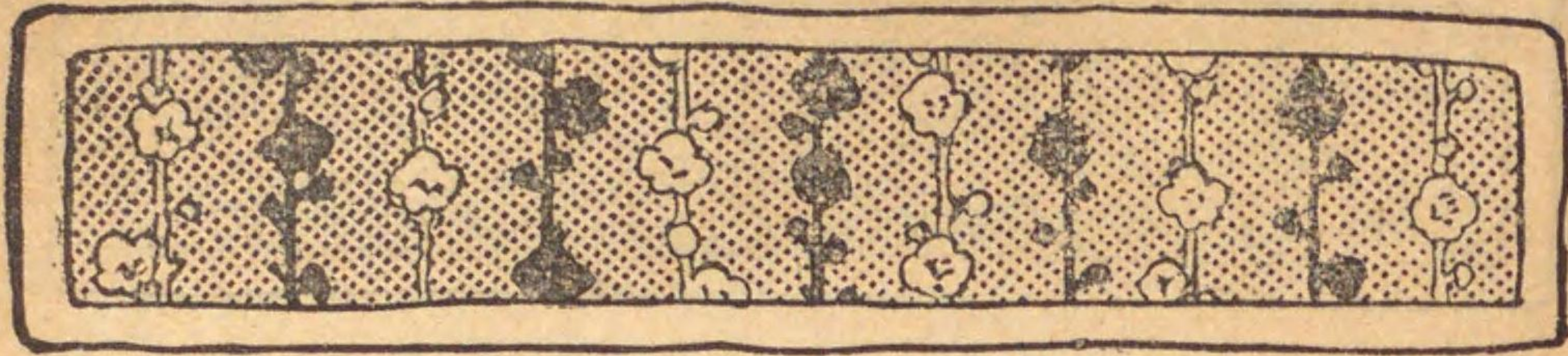


と馬うまわ頼たのみます。で、とう／＼轡くつひを外はずして遣やり
ました。すると馬うまわ忽たちまち燕つばめに化なつて飛とんで行ゆ
きました。

丁度ちやうど其そのの時ときお爺おぢいさんわ鍛冶屋かじやと一緒いっしょに店みせえ
出でて來きましたが、此このの有様ありさまを見みるが早はやいか直様すさま
鷹たかになつて追おつ蒐かけました。けれども相あ手てわ
一いち時間じかん千里せんりを飛とぶと云いう燕つばめの事ことですから、中々なかなか
追おつ附つけませぬ。

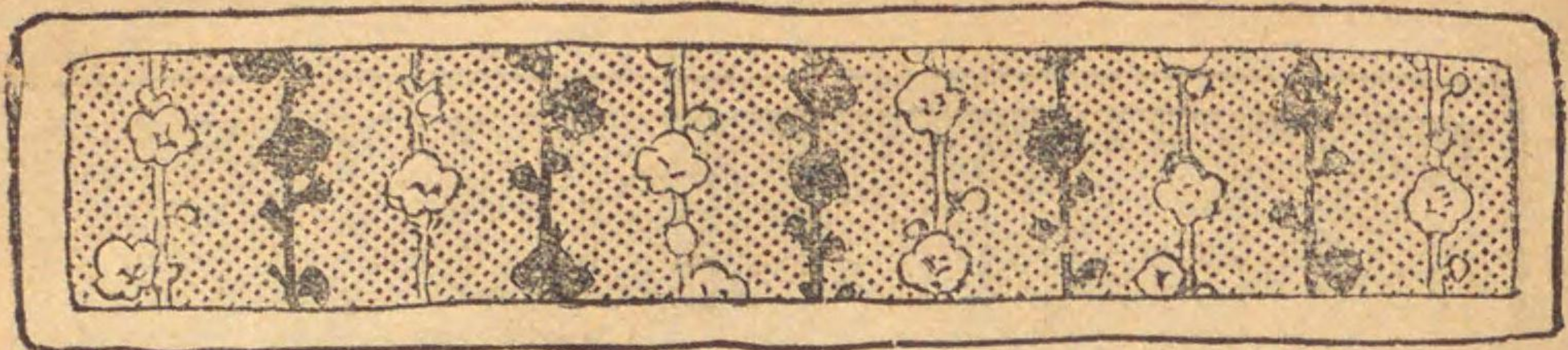
鷹たかわ大おほきな湖水こすいになりました。
燕つばめわ魚うまになつて其そのの中なかを泳およぎました。



湖みづうみの水みづわ一いち時じに引ひいたかと思おもうと、今度こんどわ鷄とり
になつて、魚さかなをつつき殺ころそうとしました。

魚さかなわ何い時つの間まにか狐きつねになつて居いました。そ
うして鷄にわとりの化ばけ損そこつてうる／＼して居いるとこ
ろをかみ殺ころして了しましました。

これこれでハンスわ全まくお爺おぢいさんの仕返しかえしを免のが
れることことが出來でたのです。あ私わたくしわ唯ただ今いまハンス
と申もうしましたが、皆みなさんわ件くだんの犬いぬも、牡牛めうしも馬うまも、
燕つばめも又また狐きつねも皆みなハンスが魔法まほうの本ほんで秘術ひじゆつを知しつ
て身みを變かえたものだと云いう事ことにお氣きが附ついて



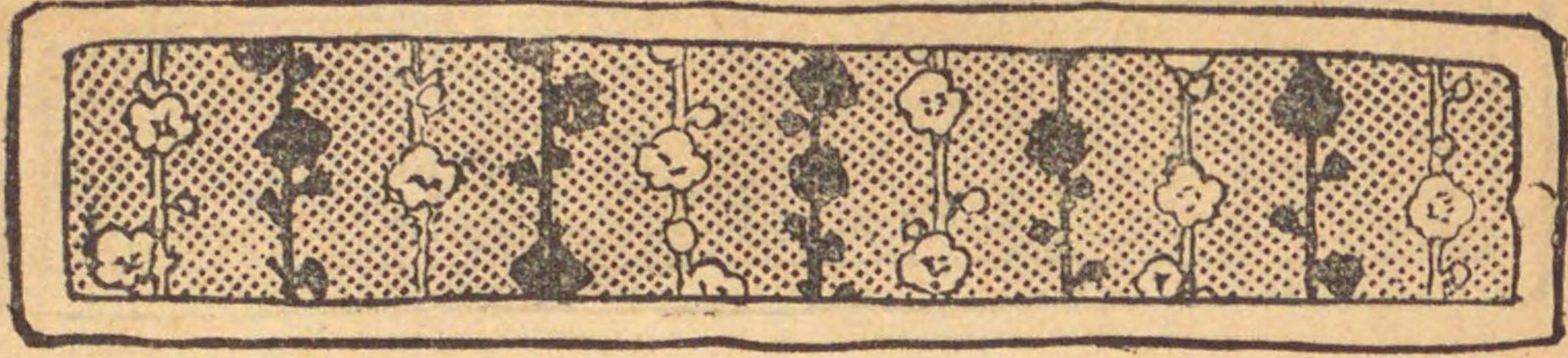
四



四〇



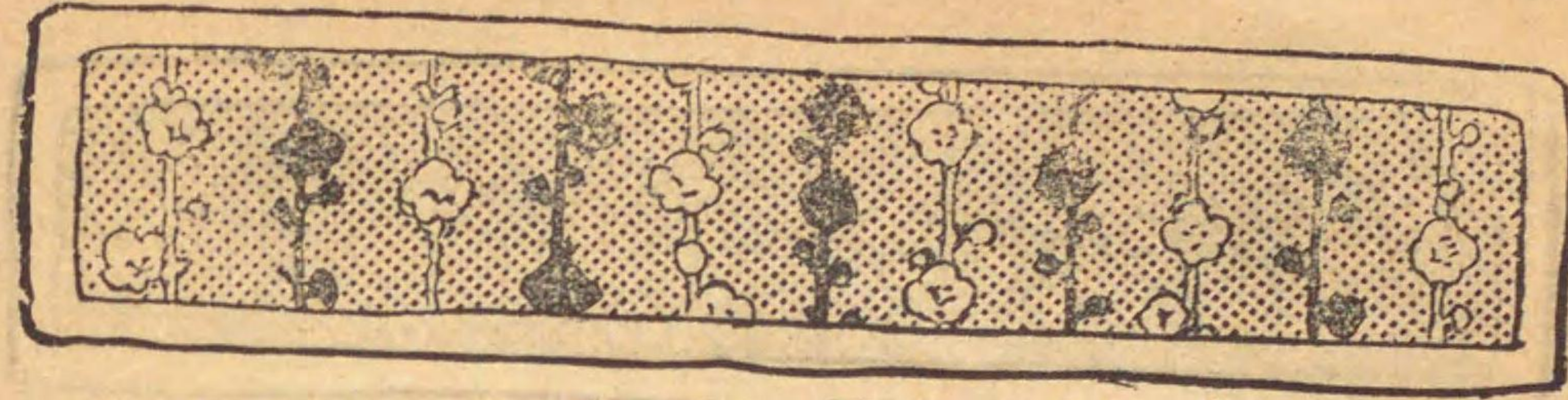
居たでしよう。狐のハンスわ又もとの人間に
 なって自分の家に歸りました。
 親爺わ今も尙後難を恐れて、ハンスを寄せ附
 けようともいたしませんでしたが、日が経ち月
 が経つても別に變つたことも起きて來ないの
 に安心し、又有福の身になつたのも全くハンス
 のお蔭だと云う事を深く思つて、ついに親子三
 人一緒に住むことになりました。
 ハンスわ其の後わ一度も魔法を使わなかつ
 たといひます。



曾呂利咄

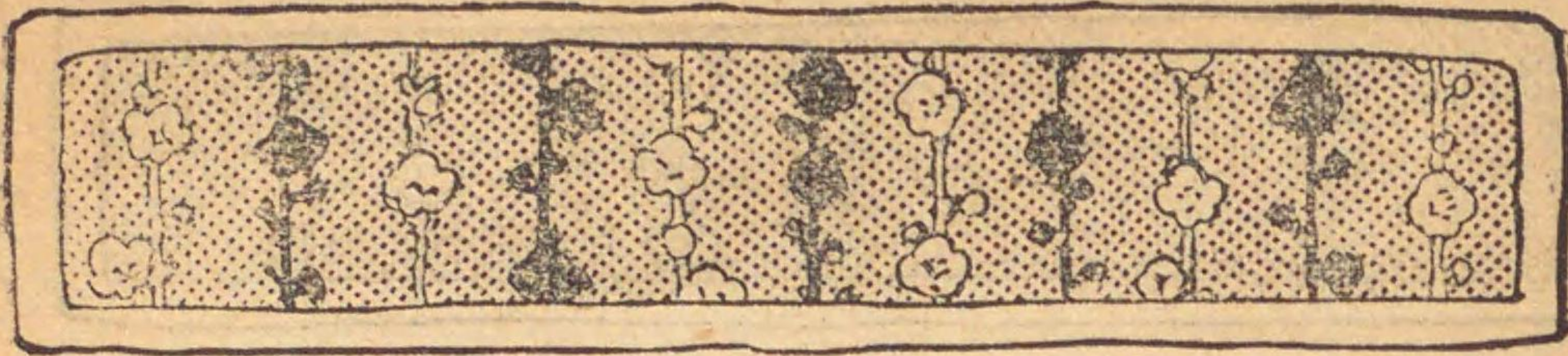
昔和泉の國堺の港に刀の鞘を作る名人がありました。本名わ新左衛門でございましたが、此の人のこしらえた鞘わ小口から刀を入れて見るのに如何にもそろりとよく合うというので、人々わ曾呂利曾呂利と呼び、遂にわ自分でも曾呂利新左衛門と名告りました。

曾呂利天性至極の才物頓智があつて辯がよい、寄合席などで口論が始まり、額に拇指程の青



筋を出して、今にも掴みかかろうという様な場合でも、曾呂利が出ると、何か二言三言云ううちに雙方を笑わせてしまつて、無事に其の場を治めます。此の事が何時か太閤秀吉の耳に入り、『それわ面白い奴呼び出せ。』ということになつて、秀吉の側近く仕える者となりましたが、如何に太閤が機嫌の悪い時でも、曾呂利わ見事笑わせました。

或時の事、秀吉が自慢の松が枯れたので、機嫌を悪くしてお側の者を散々に叱り散しました。



すると曾呂利わ早速秀吉の前に出で、承りますれば、御祕藏の松が枯れましたとの事、千萬御目出度うござりまする。』

秀吉わ之を聞いて、『何目出度いと申すか。』

曾『仰にござりまする。御祝儀に一首仕りましたよう、御小姓衆、硯硯。』

懐から紙を出し、筆取り上げて、さらくと書いて、秀吉の前に出しました。取り上げて見れば、御祕藏の常世の松わ枯れにけり、



己が齡を君に譲りて。

と一首の歌が記しつけてあります。秀吉の顔の色は見るく和ぎ、

『おう、千年の齡を此方に譲つたというか。能く祝つた曾呂利。』

と一方ならず喜んだということでもあります。

又或時茶の湯の會があつて、茶受に黒胡麻の餡を入れた餅が出ました。秀吉が

『曾呂利、此の餅を題に一首致せ。』

と命じますと、曾呂利は餅を呑み込むや否や、



黒ごまのかけて出でたる餅なれば、

喰う人ごとにあらうまという。

『あら甘い』を荒馬にかけたのですが、歌もあらうまくと居合せた者一同わたいそう感心いたしました。

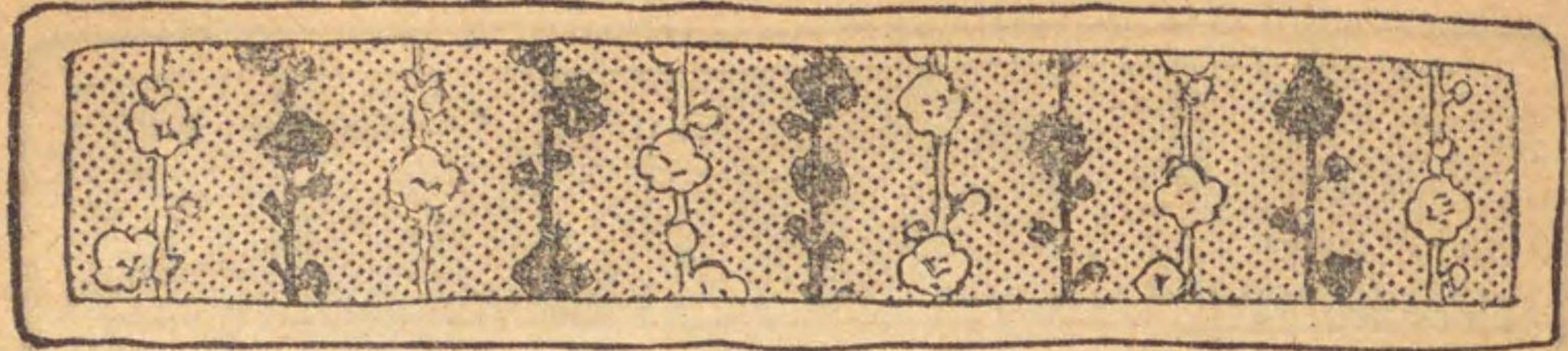
何でも秀吉が伏見の桃山に花の如き御殿を

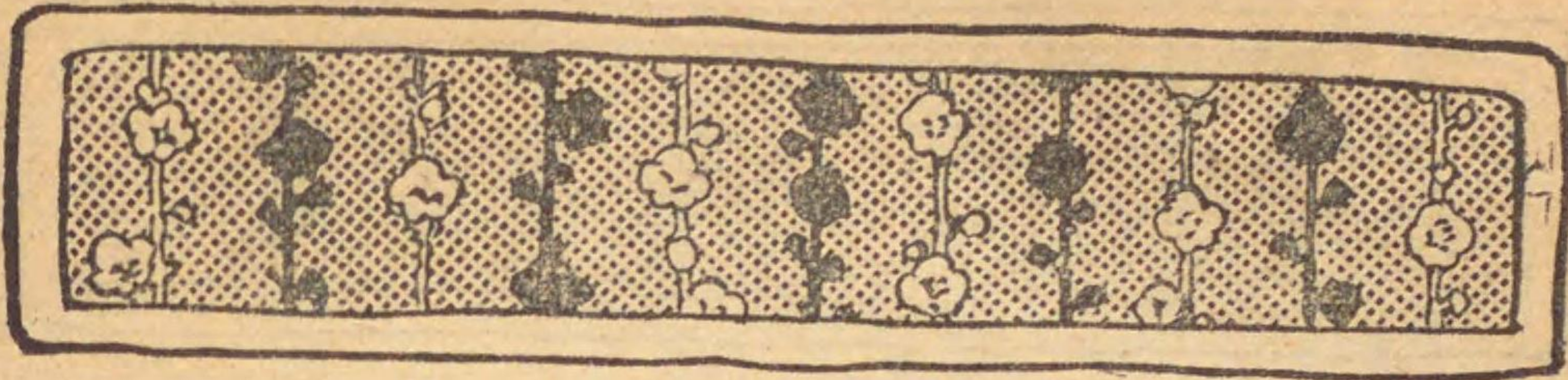
建てた時の事と傳えます、いよく出來上つて

四五日の後にわ移轉という時、『移轉の日には

決して火という言葉を遣つてわならぬぞ。若

し誤つてなりいう時にわ夫々重い罰を加える

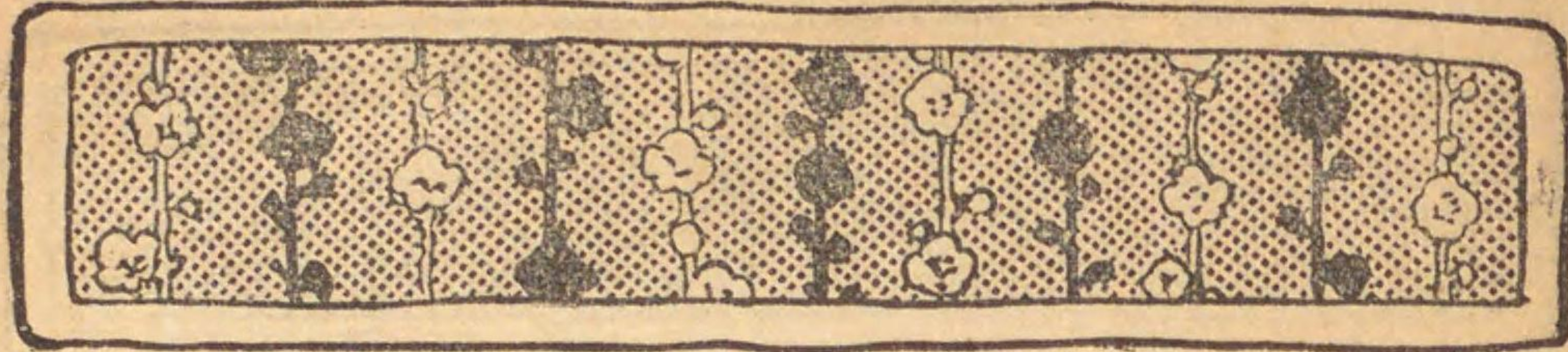




と觸れよ。』と秀吉が命じました。前田利家が
 之を聞いて秀吉の前に出て、

『移轉の事でござりますれば、火という言葉をお止めになるわ御尤千萬でござりまするが、折角のお目出度い日に重い罰に逢わせられまして、何やら目出度くないなどと申す者が出るかも知れませぬ。就きまして、重い罰でわなしに何か火といった者が困りぬく様な儀に御變改遊ばされます様。』

秀吉からくと笑つて、



秀成程それも尤々。さらば火と申した者にわ
 知行百石について金三兩宛の罰金を出させ
 ることに致そう。』

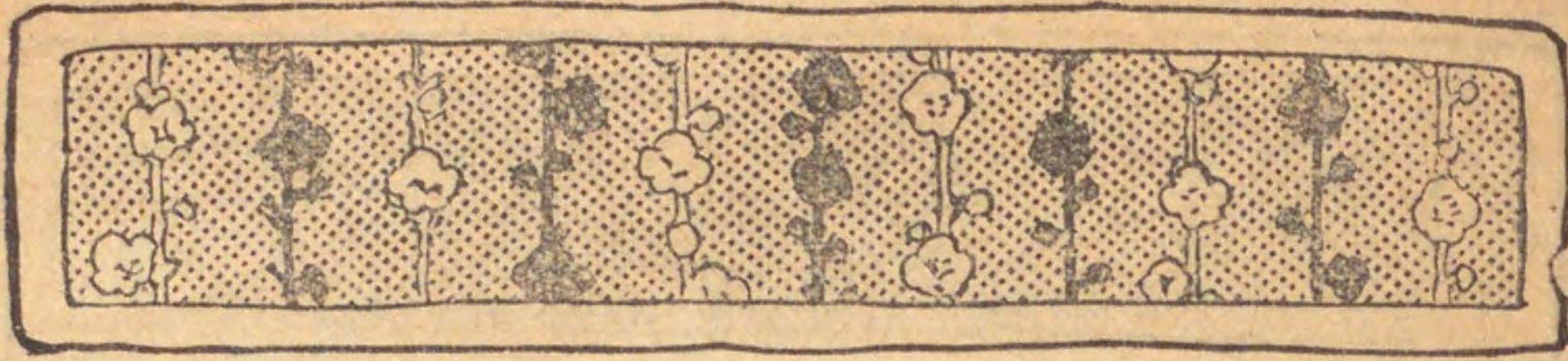
利『これわ一段とよい御思いつきでござりまする。』

早速此の御觸が諸大名に出ました。人々わ驚いて、これわ大變百石に三兩とすれば、千石で三十兩、一萬石でわ三百兩、十萬石でわ三千兩、中々以て少しの金でわないぞ、まかり違つて火といわば身代限を引起す、油斷わならぬぞ、慎めと顔



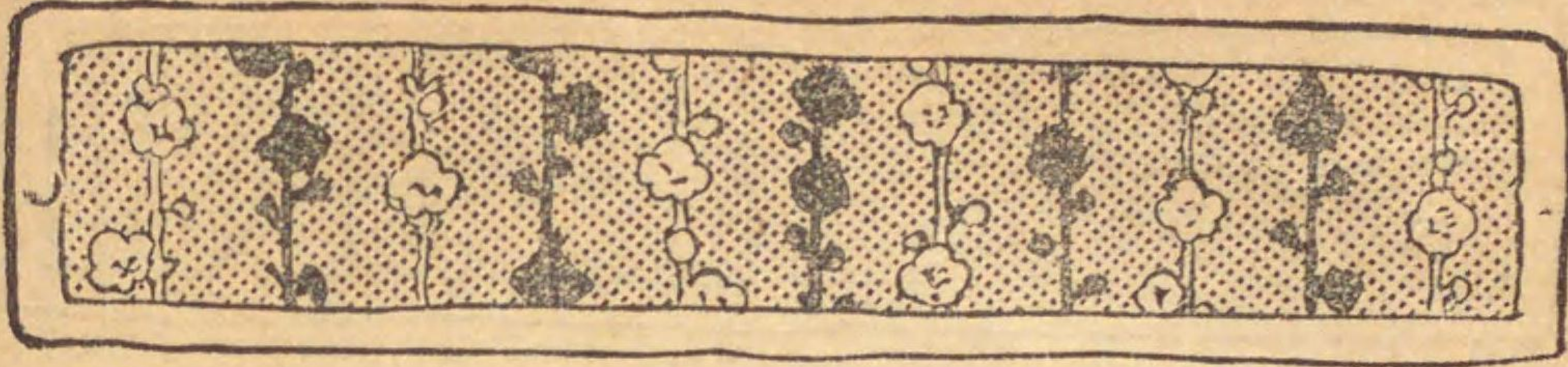
見合せて面白半分面白半分に笑う者もありました五二が氣
の小さい大名大名わいわぬ先先からびくくもので
ございました。

いよく當日当日になりました。秀吉秀吉わ目付役目付役
の者に『假假にも火火といた者者わ容赦容赦致致すな聞
き漏漏らしてわならぬぞ。』と嚴重嚴重に申渡申渡しまし
た。目付役目付役の者者わ、『今日今日こそわ目目より耳耳が大
事事目付目付でわなくて耳付耳付だ。』と十方十方に心心を配配つ
て耳耳をすまして居居りましたが、扱扱て罰金罰金わ怖怖い
と見見えて、上上わ百萬石百萬石の大名大名より下下わ百石取百石取の



小身者小身者迄誰迄誰一人火一人火という者者わありません。こ
こに移轉移轉の御祝御祝も無事無事に濟濟んで夜夜になつてわ
大閤大閤の御前御前に於於て又々又々酒宴酒宴がありました。此
の時時曾呂利曾呂利わふと思思い出出したが如く、
曾曾此此の頃頃茶茶の湯湯の席席に參參りまして眞眞に天下天下の
一品一品とも申申すべきものを見見ましてござりま
する。』

秀秀ほうう、それわ何處何處の誰誰の所所で見見たか。一體一體
物物わ何か。』
曾曾釜釜でござりまする。』

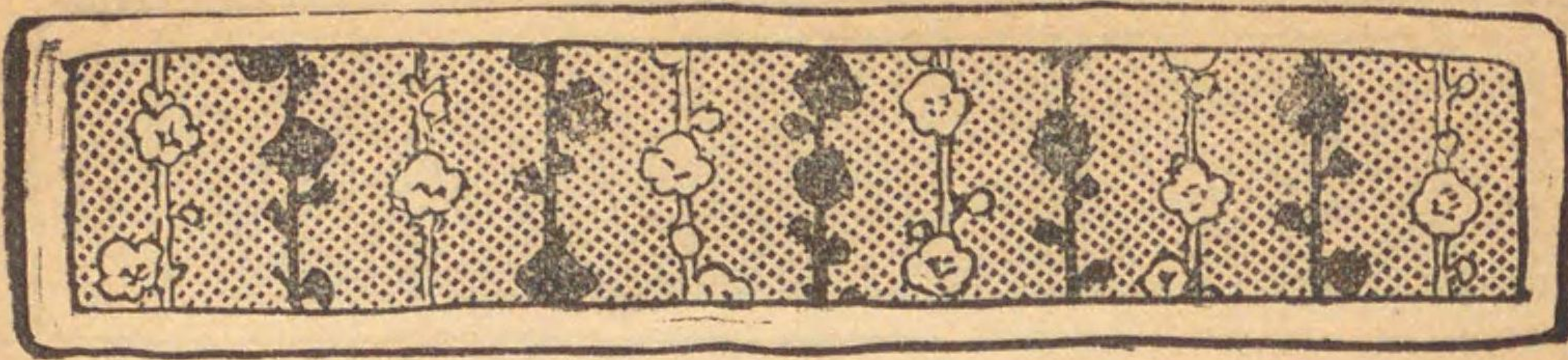


秀「それわ釜である」と申すか。惣じて茶の湯の
 道具とあれば此の秀吉の所に天下の珍品逸
 物わ悉く集つて居る。また集つて居らぬに
 もせよ珍しと世にもてはやす程の物わ皆余
 が見た筈であるが。」

曾「左様にもござりましたようが此の曾呂利めが
 見ました釜わ古渡か何か存じませぬが木で
 作つた物でござりまする。」

秀吉わからくと笑つて、

「又曾呂利奴何時もの冗談を申すか木で作つ



た釜ならば火にわかけられまいが。」

曾呂利太閤の此の言葉の終るを待たず、

「さあ罰金く、百石に三兩との御定めてござ

いますれば我が君様にわ一千萬石の御知行

と見積りまして一萬石の三百兩十萬石の三

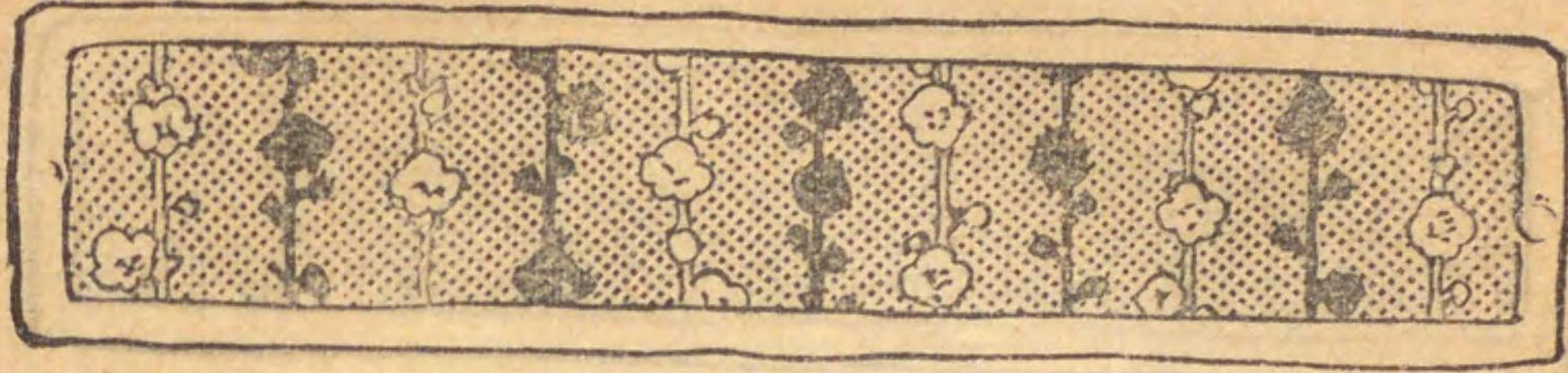
千兩百萬石にわ三萬兩と相成りますれば一

千萬石にわ三十萬兩と相成りまするささ一

刻も早く罰金御遣し遊ばし置かれませ。」

秀吉わ三十萬兩の罰金と聞いて、

「秀ええ甘くだまされた此の法度わ觸直しく。」



曾「これわ我が君様の仰とも思われませぬ。御自分の御都合の悪い時にわ觸直して、人の困る時にわ知らぬ顔を遊ばすのでござりまするか。近頃それわちと御無體かと存じまする。」

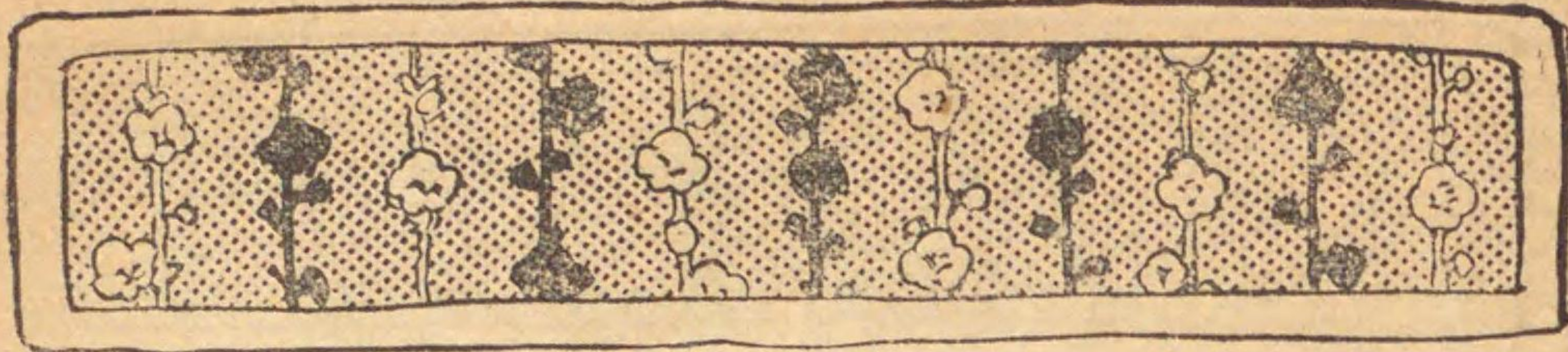
秀「何無體と申すか。」

曾「左様でござりまする。」

秀吉わさつと顔色を變えましたので、人々わ手に汗を握りました。折柄太閤の御前え出ました歌の名人細川幽齋が之を聞きまして、



細「これわ以て近頃面白お話でござりまする。しかし我が君様より御觸出の御法度でござりますれば、其の分でお濟ましになることも出来ますまいかと存じます。去り乍ら曾呂利も謀を以て君の御言葉失を取るとわ失禮至極、其方わ知行なければ、別に罰金の取られ様もなしと、只管君の越度ばかりを狙つたのであろう。して見れば我が君様におきましてわ罰金などわ御心のままに至されまして、よいかに存じます。とわ云え曾呂利、唯今





某が上の句を出すによつて下の句をつけよ。
 其の出来柄によつてわ、罰金の代りに御褒美
 の金が出るであらうぞ。

君の非(火)と決(消)して人にわ云われまじ、
 曾呂利早速下の句をつけて、

お袂金を曾呂利頂戴。

居合せた者わ悉く手を拍つて笑い立てました
 ので太閤もたいそう御機嫌がよくて、

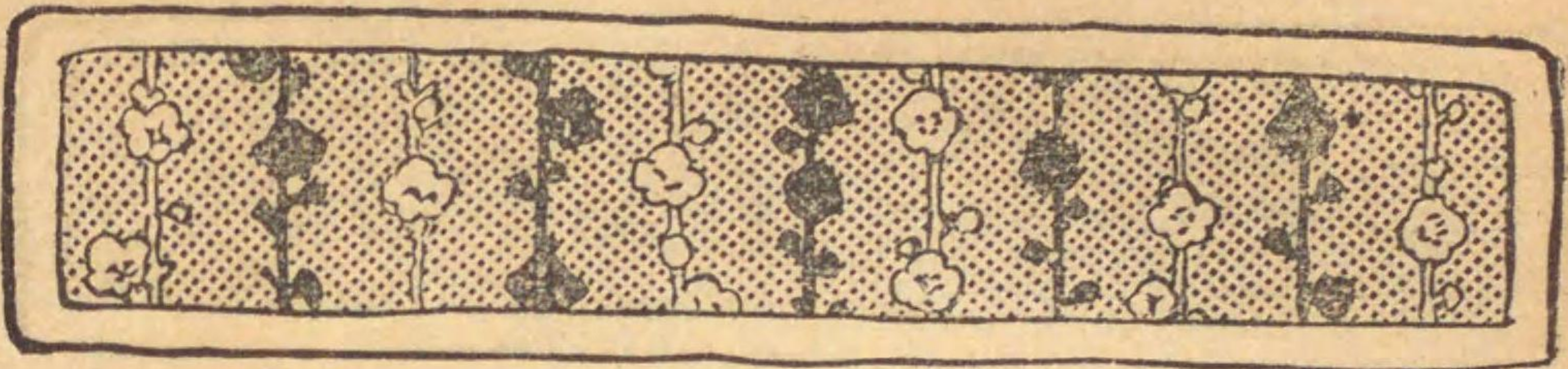
『ええ、曾呂利奴に一杯くわされた。』

と御手許金をどつさり新左衛門に下さいました

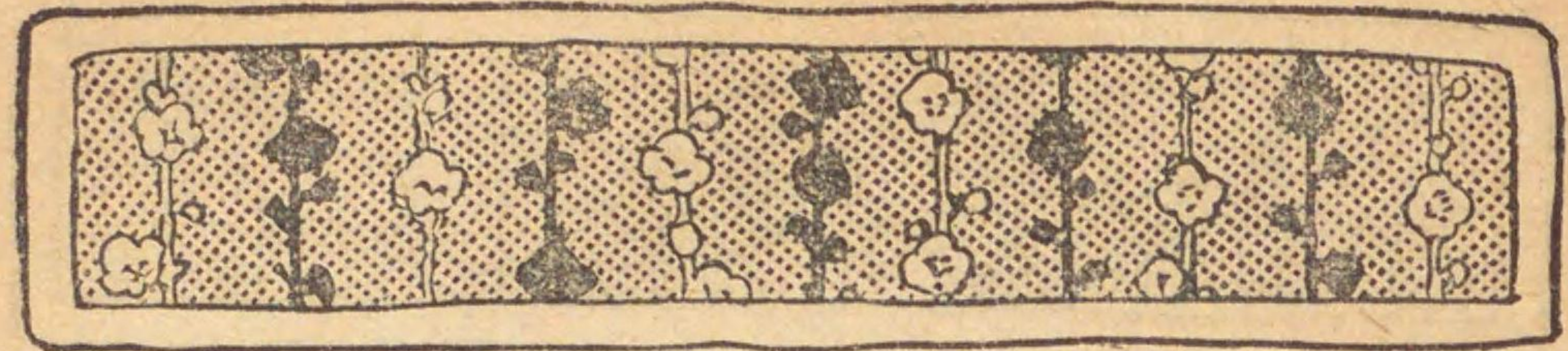


た。

これわ曾呂利が秀吉の命令に随分無理のあ
 ることを體よく諫めたのでありますが、今一つ
 巧に諫めたことがあります。或時秀吉わいよ
 いよ天下も一統したにつき、七八人の伴を連れ
 て日本國を巡廻して見ようと思ひ立ち、至急其
 の用意を致せと命じました。諸大名わ若し御
 留守につけ込んで戦を起すものがある時にわ
 天下の一大事ともなります程に、是非御思ひ
 止まり下さる様にと、代るく諫めますが、太閤



六二
 『何々案じるにわ及ばぬ。』とばかりで、少しも採り上げませぬ。諸大名の間違がないとも限らぬと心配して相集つて色々とお止め申す工夫を相談しました。此の時一人が『度々の諫言わ却つて御機嫌を損じる許りてござりましたよう。これわ一つ例の曾呂利に命じまして、冗談交りに御止め申す様にしてわ如何でござらう。』
 と云えば、一同わ『成程御名案、曾呂利とわ氣づきませんでした。』



御氣に入りの彼ならば、何とか申し直すてござらう。』
 と異口同音に申しますので、曾呂利を呼んで相談しますと、
 『何事かと存じましたれば、左様の事でござりましたか。御安神遊ばされませ、必ず御巡見をお止め申して御覽に入れます。』
 と堅く請合いました。扱て曾呂利が其の儘秀吉の前に出ますと、
 『これ曾呂利、此方近日より日本國中巡見の途』



に上るが其の方をも連れて行つて遣わすであらうぞ。』

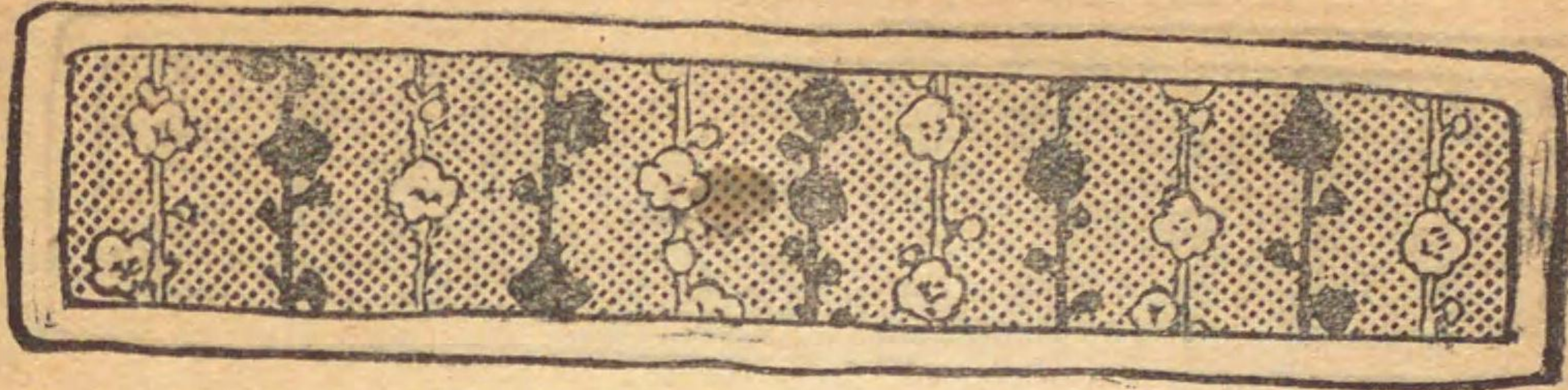
曾「これわ有り難き仕合でござりまする。けれども此の曾呂利奴よりも一段と勝れた若者がござりまする。此の者を御召連れに相成りましたならば如何なる深山幽谷なりとも更に御氣遣御無用かと存じまする。』
秀「それわ又何者であるぞ。』
曾「其の者と申しまするわ武士にわござりませず、小商人でござりまする。此の間比叡山に



於て天狗を殺しましたので、大評判になつて居る男でござりまする。』

秀「天狗を殺したとわ珍しい話、委しく申せ次第によつてわ召連れるであらう。』

曾「然らば委しく申し上げるでござりませう。つい一昨日の事でござりまする。某の隣家に呉服店がござりまするが、此所の若者が比叡山の坊様方え荷物を脊負つて商に参りますると、横川の向うから大きな天狗がぬつと現れ、我わ此の山の天狗なるぞ。汝日頃不



届にも尺をごまかしてわ不當の金儲を致した。今日も亦我が山の人々をだまそうとするのであろう。憎き奴め引き裂いて捨てるであらう。」と目を瞋らし爪を起して掴みかかろうとしました。』

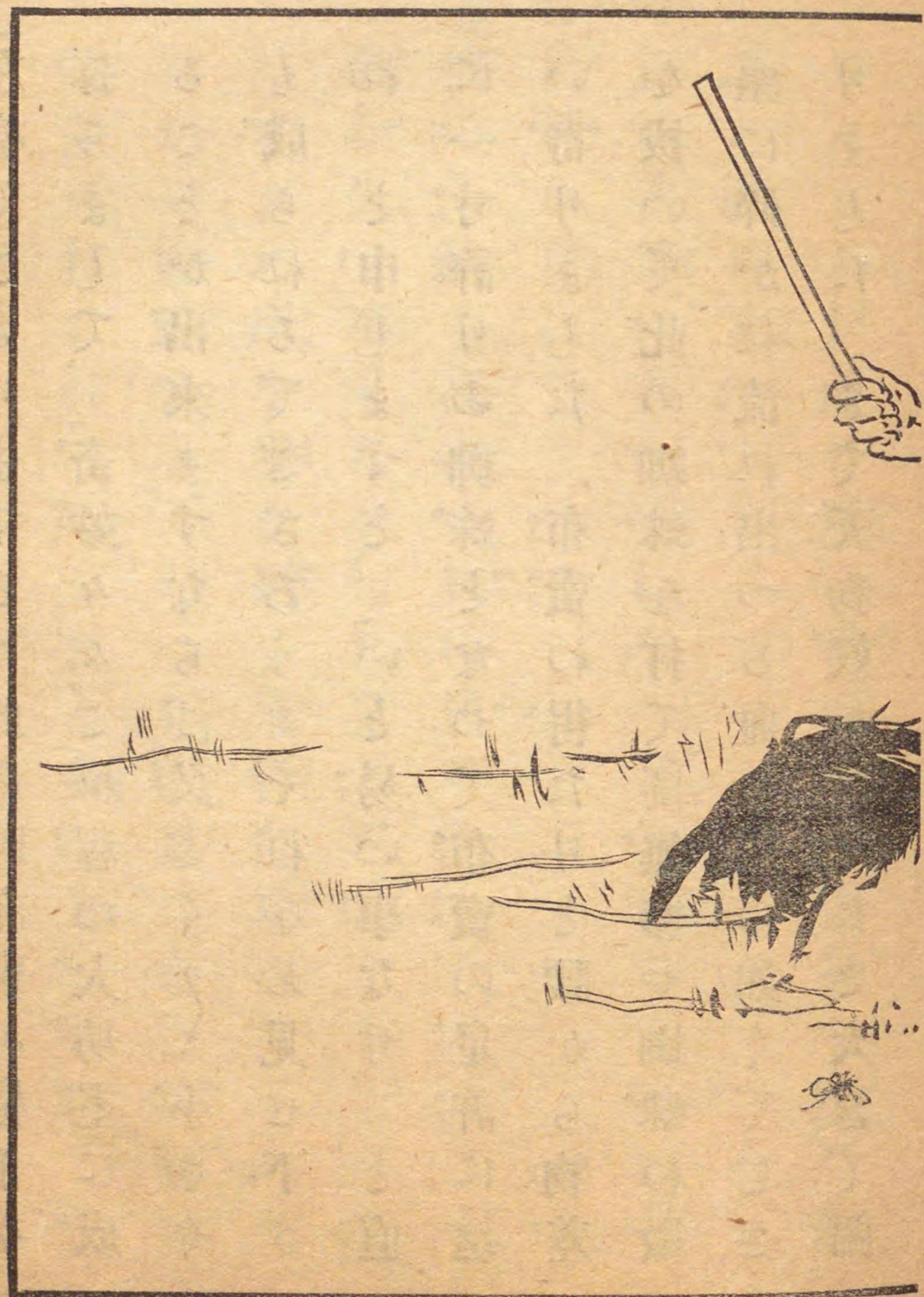
秀『成程』

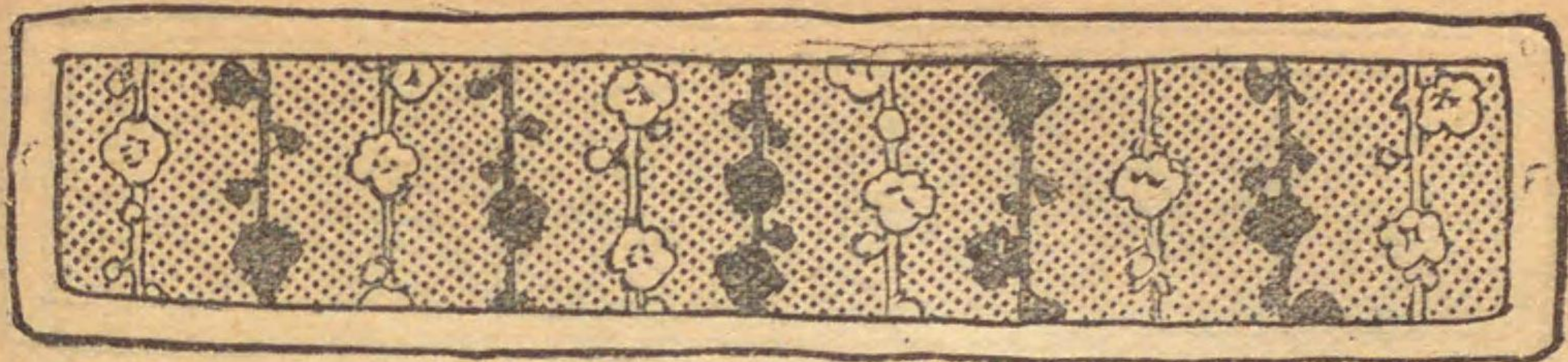
曾『布賣わびつくり致しまして、今より後わきつと心を入れ替えまして、うそ偽わしませぬ程に、今度ばかりわ偏に御見遁に預りたいと詞を盡して詫びますが、天狗わどうしても聞き



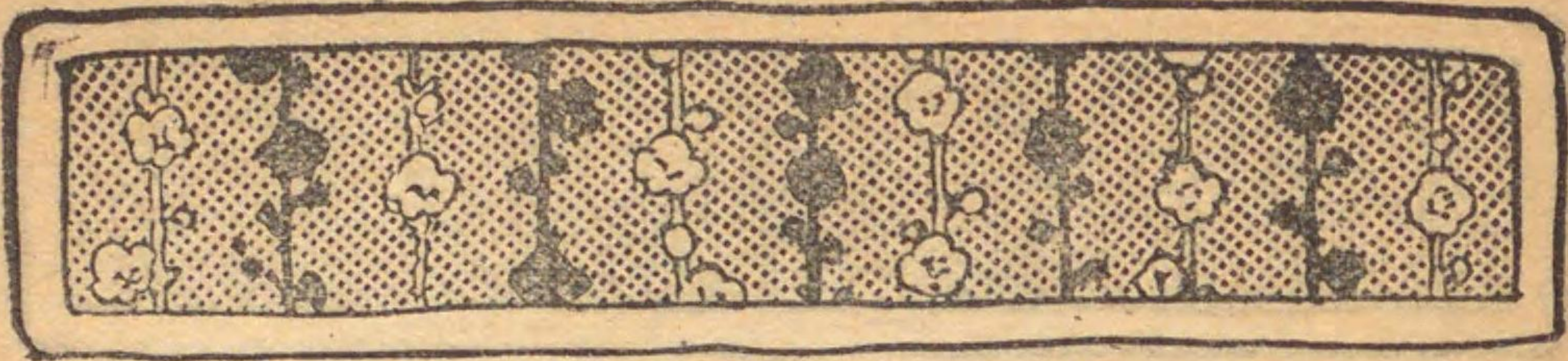
入れませぬ。そこで布賣も覺悟を極めまして、最早仕方がござりませぬ。一命わ今日此の場に於て、奇麗さつぱりと差上げます。しかし爰に一つの望がござる。聞けば天狗殿わ神通自在とやらで、様々に形をお變えなさるとの話、今生の思出に二つ三つ變えてお見せなさりませ。」という、「よし、それなら。」と忽ち二丈ばかりの大坊主となつて、鏡の如き眼をしてはつたと睨んで見せました。』

秀『天狗めがな。』

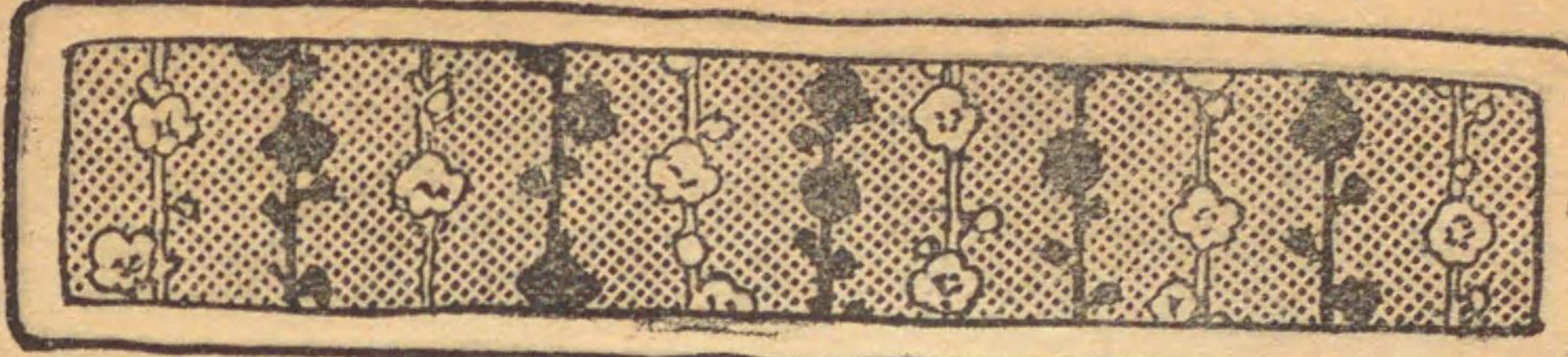




曾「左様でござりまする。此の時布賣わ横手を打ちまして、奇妙々々、これ程の大坊主に成ることが出来ますならば又ごくく小さくも成られるでござろう。それをお見せ下され。」と申しますと、「いと易い事なり。」と直に一寸許りの蜘蛛となつて布賣の足許に這い寄りました。布賣わ得たりと腰から物差を抜いて此の蜘蛛を打てば無惨や蜘蛛を微塵に碎かれ流れ出づる血わ川の如くてござりました。さて天狗奴を殺したと大喜で歸



りましたが此の廣い世間でも天狗を殺した者わ此の男一人でござりませう。』
秀吉わ次第に首を垂れて一言も申しませぬ。
曾呂利わ重ねて、
曾「彼の天狗も高木の枝に居りましたならば、一命を失う事もなかつたでござりませうに、詰まらぬ所を歩き廻り飛行自在の身でありながら、蜘蛛にまでなつたが爲に、布賣風情の物差に打たれてあつたら命を失つたのでござりまする。なんと愚かな天狗でわござり



ませぬか。

秀曾呂利其方の話跡方もないことであるうが中々深い意味がこもつて居る。日本巡回わ思い止まるぞ。

諸大名わ之を聞いて初めて安心したというにとてあります。

此の他曾呂利何ぞ面白い話わないかとの太閤のお尋ねに別段ござりませぬが唯今途中できうりが胡瓜を食べて居るのを見ましたといふ、これ冗談も休みく申せ。いや真に以て食



べて居つたのでござる。しかと左様か。如何にも眞實でござりまする。というので、太閤が人をやつて御覽になると成程木賣が胡瓜を食べて居たというお話もあります。

なお一つ、太閤が朝鮮征伐の爲に、自ら肥前の名護屋へ出陣致しまして、明日わ海を渡る、明後日わ船に乗るとのお觸出しばかりで、更に御渡海の様子もなかつたので、

太閤が一石米を買いかねて、今日もごとかい明日もごとかい。

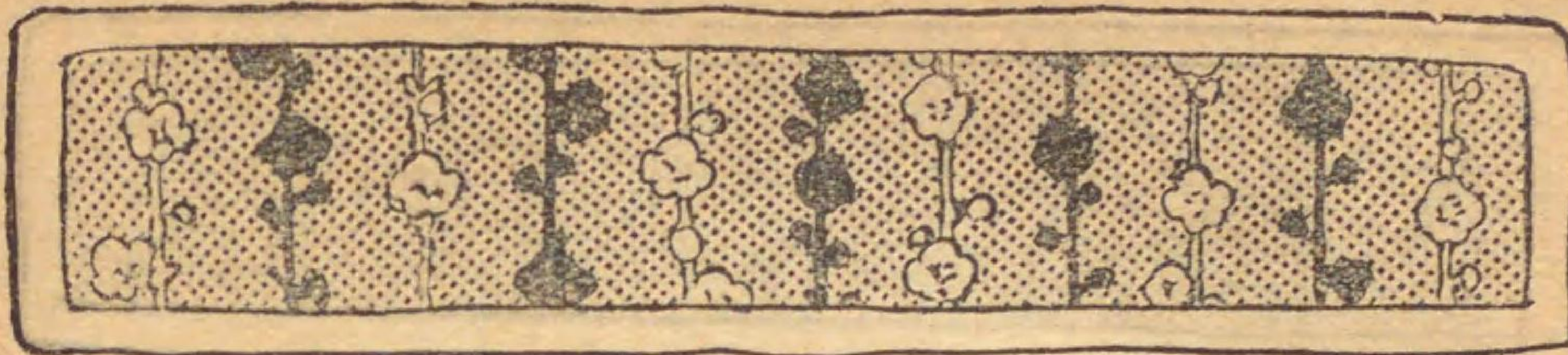


御渡海を五斗買にかけたので、如何にも面白い
歌でございしました。すると太閤が曾呂利をお
呼び出しになつて、

『これ曾呂利歌わ真に面白く出来たが、太閤が
と呼びずてにするのわ失禮であるうがな。』
曾『恐れ乍ら我が君様と、一天萬乗の天皇様とわ
何れが尊く渡らせ給うてござりませう。』
秀『いう迄もなく天皇が尊くおわたり遊ばすぞ。』
曾『その天皇の御事にも君が世わ千代に八千代
にと申しまして、君様が世わとわ申しませぬ。』



秀『ええ、曾呂利奴のへらぬ奴だ。』
これにわ秀吉が一言もなかつと申します。
曾呂利が大病に罹つていよく命もあぶな
いというので秀吉が見舞の人をやり、何ぞいい
置くことわないかと云わせますと、
『別段のこともござりませぬ。若し我が君様
から冥土の御一門の方え御傳言でもござり
まするならば仰せつけられませ、片便りてわ
ござりませるが、きつとお傳え申しまする。』
と平氣な顔で申して居ます。秀吉も日頃お側





去らずの新左衛門でございましてから、特別に見舞に行きまして、何か死んでの後に願がないかと尋ねますと、

御威光で三千世界手に入らば、

極樂浄土我にたまわれ。

と申して息を引取りました。曾呂利の如きわ一生を頓智滑稽の間に送つた者と申すべきでございましょう。

櫻 森

の

川 家

(西洋)

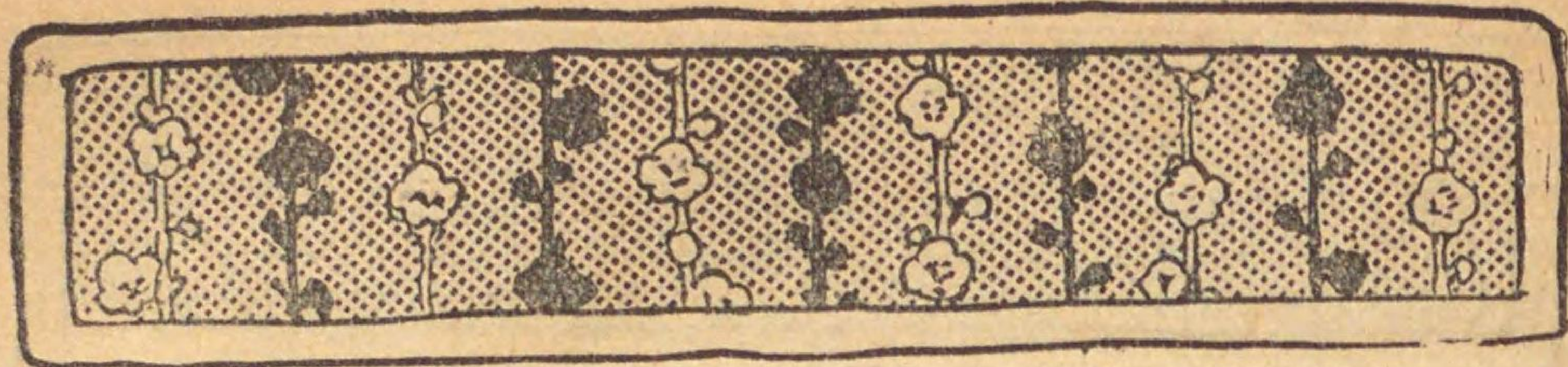
(日本)





英朋





櫻川

常陸國筑波山の北五六里の所に鏡が池とい
う大きな池がある。此の池から流れ出して霞
が浦に流れ込むのが櫻川此の櫻川の上流磯邊
という所のあたりにわ川の兩岸に櫻の樹が何
百本となく植えてある。雨よ嵐よ霜よ雪よ幾
百年の間折れず焼まず花を着けて来て最早半
ば朽ちた苔むす老木もあれば朽ちるものわ朽
ちよ、枯れるものわ枯れよ、其の後にわ我等が控





えて居ると云いそうな若木も數限りなく立並
んで居る。

此の朽木がまだ若木と呼ばれた大昔のこと
生温く吹く風に誘われて、川の兩岸の櫻わ二日
三日の間に咲きも残らず散りも始めずという
満開になつた。なある程三日見ぬ間の櫻かな、
咲いたりな櫻吹けよ春風散らさぬ程に降れよ
春雨人なき折にと、近郷近在の老若男女わあり
たけのよい衣裳よい帯今日を晴と着飾つて花
見に出かけた。其の花見も今日で四日目明日

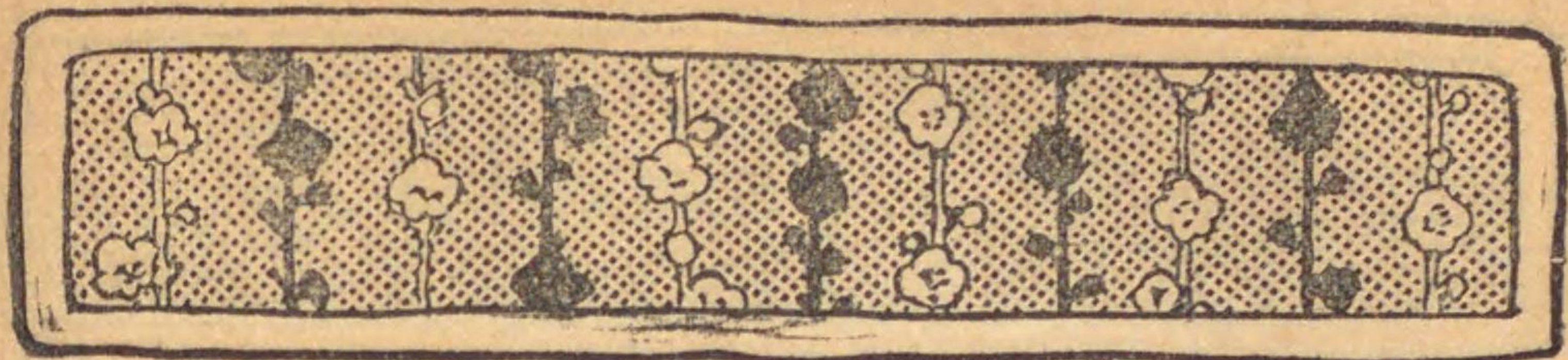


は散らう散らぬ間にと云い合せた様に人出が
多かつた日あやにくに風が荒くて散る花びら
わ雪の如くである。木の下道わ固より白い踏
めば惜し踏まれれば行かん方もなし扱て困つた
道よのうと行惱む人もあれば川の面に散り浮
く花を見てわ、

何時よりも春べになれば櫻川、

波の花こそ間なく寄すらめ。

という古い歌の下句を少し變えて『波の花
こそ間なく寄すなれ』と口ずさむ人もあつた。



一 叢杉の茂る此方川の流も穩かに南を受けて
 風も肌はだに寒さむからずというあたりわ花はなも盛さかりて、
 人も取りわけ集あつまつて居る。此の時川下の方か
 ら、どやどと來る一群ひとぐらが、

甲『そら、また來ましたぞ、昨日の氣違きちがが。』

乙『どれどこえ。』

甲『それ、あの橋はしの此方え、髮振亂かみなりみだし、片手かたてにすくい
 網あみを持つて、水みづに浮ういて居る花はなをすくい。』

丙『おう、あれでござるか。何なにとて梢こすえの花はなに目めを
 つけず、散ちる花はなをすくい取るのでござろう。』

と中なかでの年寄としよりがいえば、

甲『何でも子供こどもが戀こいしいとか云いう様ようでござるが、

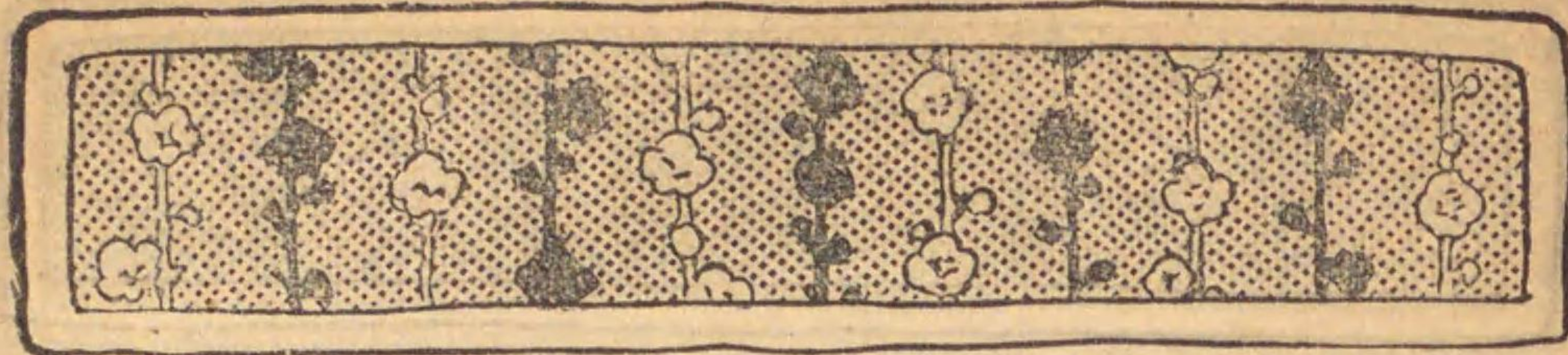
あの女おんなの謠うたう都みやこの歌うたが面白おもしろうござる。』

乙『其そのの歌うたが聞ききたいものでござるな。』

丙『どんな文句もんくでござりますぞ。勸すすめて謠うたわせ

て下くだされ。』

と話し合あう折柄せがら眼めにわ人ひと並ならぬ光ひかりわあるも
 の顔形かたもの氣け高たかい、三十四五さんじゅうごとも思おもわれる女おんなが、
 すくい網あみで川かわに浮うく花はな瓣びらを右手みぎてにすくつてわ
 左手ひだりてに握にぎり、握にぎりしめてわ途みちに棄すて、





我が子戀しや、櫻子戀しや、波の花より我が子戀しや。』

八

と謠い乍ら川上の方からやつて来た。

甲『これ櫻子戀しやと謠う女昨日謠つた都の歌を今一度聞かせて下され。』

女『我が子戀しや。』

甲『いや、其の歌でわござらぬ。それ地主の何とかいう歌でござる。』

女わ暫く男の顔を見詰めて、イヒヒと笑つたが、やがて高笑をして、

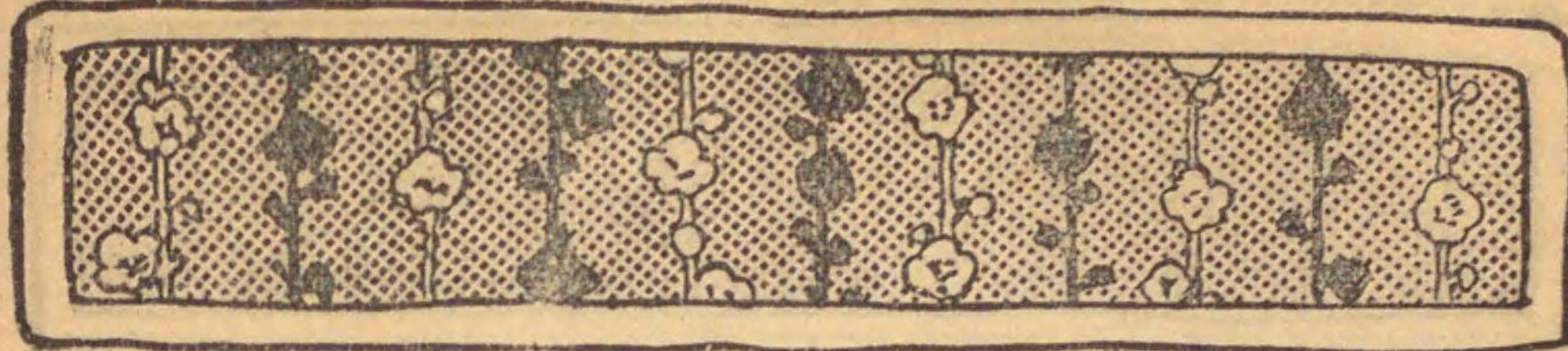


『地主の櫻わ散るか散らぬか見たか水汲散るやら散らぬやら嵐こそ知れ。ざざんざ濱松の音わざざんざ。堅田の綱わ夜こそ引きよけれ、晝わ人目のしげければ。』

と謠う。
甲『それく、其の次のもまるるく、の歌わ。』
女わ又暫く人々の顔を見詰めたが、からくと笑つて、

『川柳わ水にもまるる。しだれ柳わ風にもまるる。ふくら雀わ竹にもまるる。都の牛わ』

九



車にもまるる。茶臼わ挽木にもまるる。げにまこと忘れたりとよ、こきりこわ放下にもまるる。』

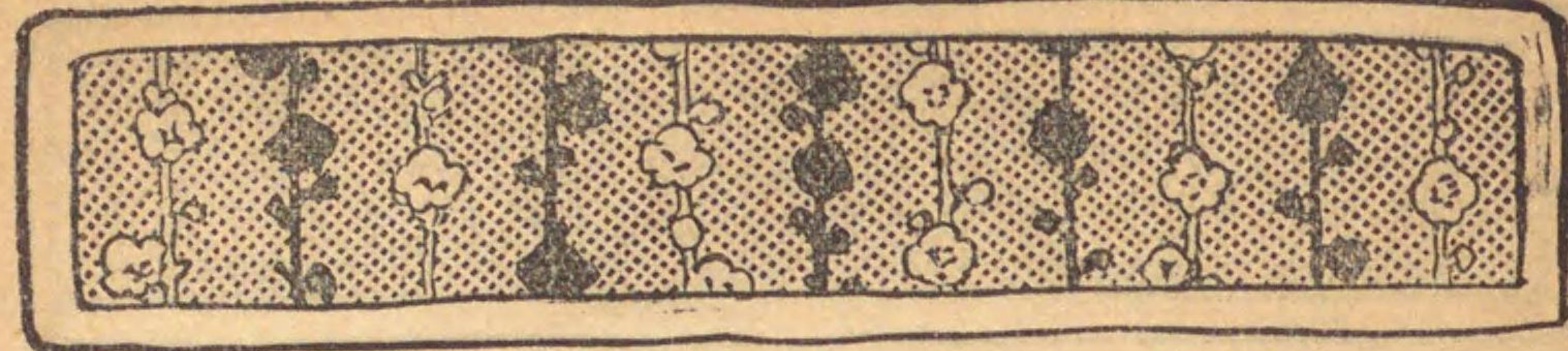
と節面白く謠つて、身振おかしく狂いつづけた。

乙『成程、都方の女わ氣が違つてもいうことわやさしい。』

丙『とりわけ、もまるるの歌が面白うござるな。』

丁『いや、地主の櫻も面白い。』

甲『何かまだ面白い歌があらばきかせて下され。櫻も今日が限りでござる。』



女『何、櫻も今日が限り。嗚呼我が子戀しや櫻子戀しや。』

と謠つて地に仆れて泣き續けたのである。人

人わきつと我が子故に氣が狂つたのであるう。

何れ都近くの者であるうが、こんな東の果ての

此の國迄に来るにわ迷い迷つての事であるう

と貫泣きするものも、五人や六人でわなかつた。

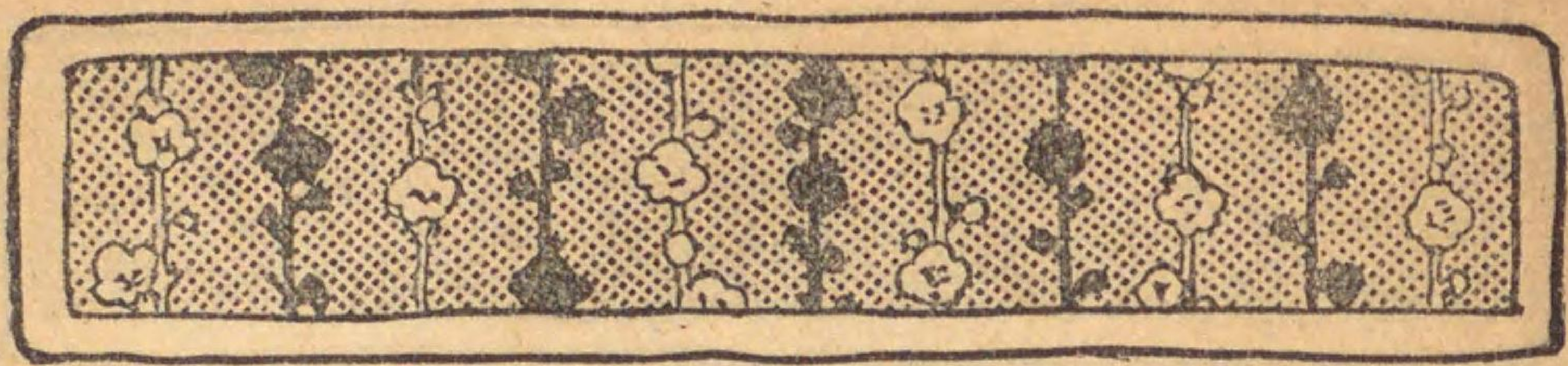
此の女の身の上にな一條の哀れな物語があ

るのである。日向國延岡の城の近くに櫻の馬

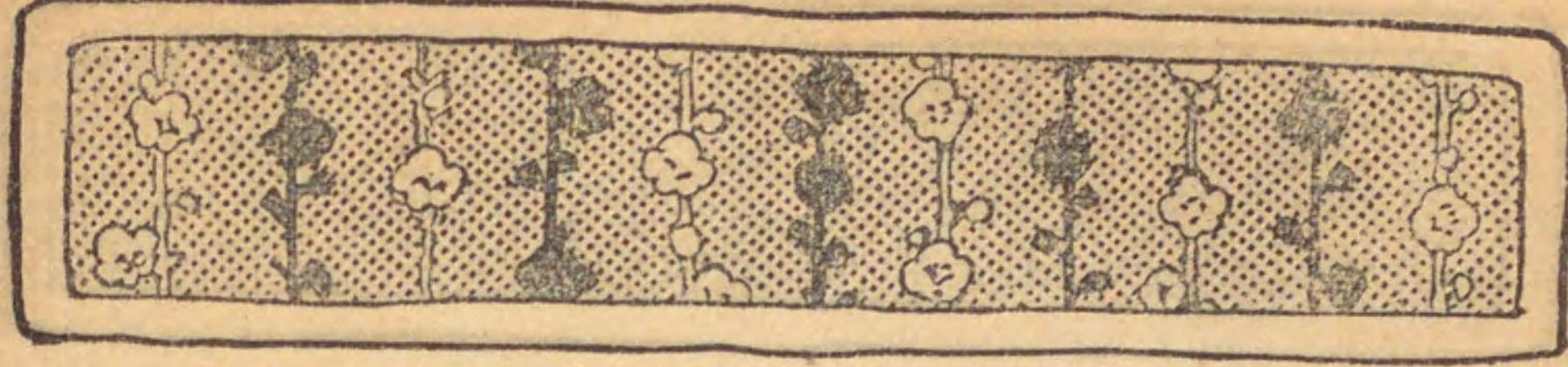
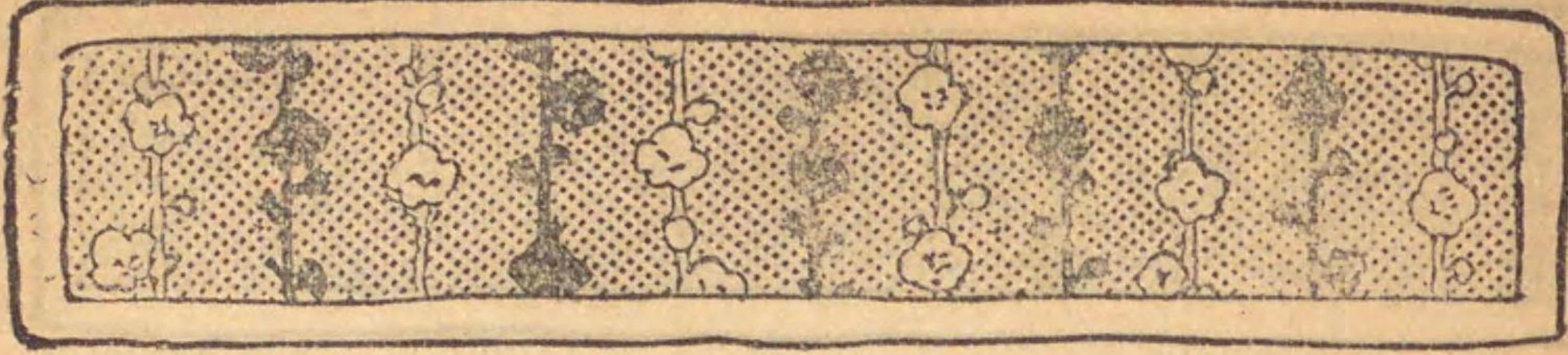
場と呼ばれた櫻の花の名所があつた。此の馬



場の西に、長の病氣に瘠せ衰えて、たつた一人の
 男の子と共に淋しくくらす女があつた。元を
 ただせば二萬八千町歩の領主の妻、男の子、其
 の長男、世が世なら何一つ不足なく榮耀榮華に
 暮らすことの出来る身の上であるが、此の子の
 十の年に父、急病で死んでしまつた。父の弟
 が、其の頃、京都に居て、朝廷にお仕え申して居た
 が、兄にわ妻もありませぬ、跡を取る子もありま
 せぬと申し立てて、まんまと兄の家を奪い取つ
 て、自分が其の二萬八千町歩の領主となつたの

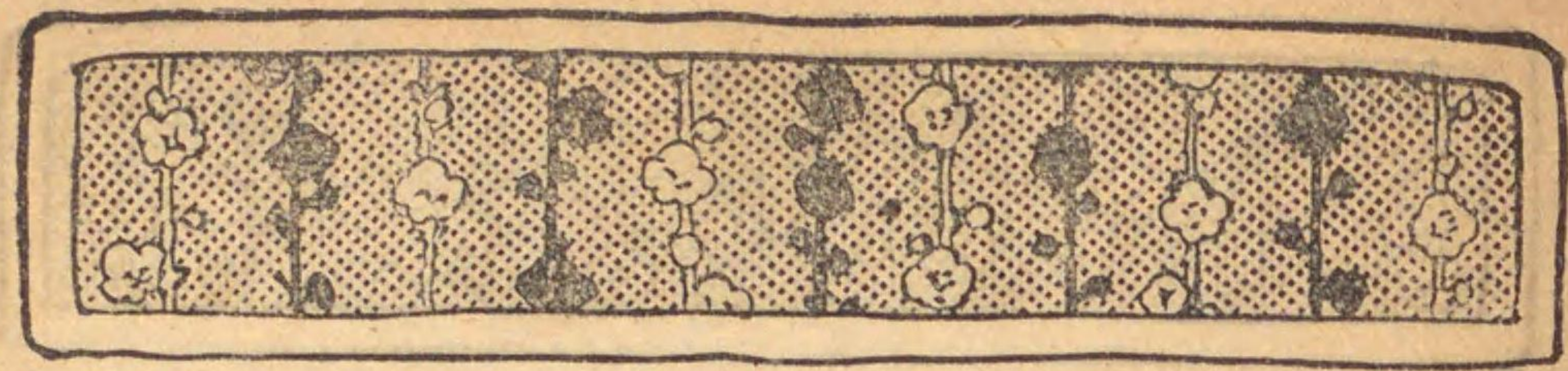


である。早速日向え歸つて、
 『命ばかりわ助ける程に、さつさと家を明け渡
 せ。お上の書附ある上、わ今日からおれがお
 領主様だ。』
 と目を三角にして威張り散した。相談したく
 ても、時世に従うが世の習で、相手に成るものわ
 一人もない。兄の妻もなく、家を明渡して
 一子、櫻子を伴れて、櫻の馬場の西の荒屋に移つ
 たのである。昨日まで、わ數多の腰元や下男を
 使つた身が、今日わ雨漏りのする家に、下女、下男





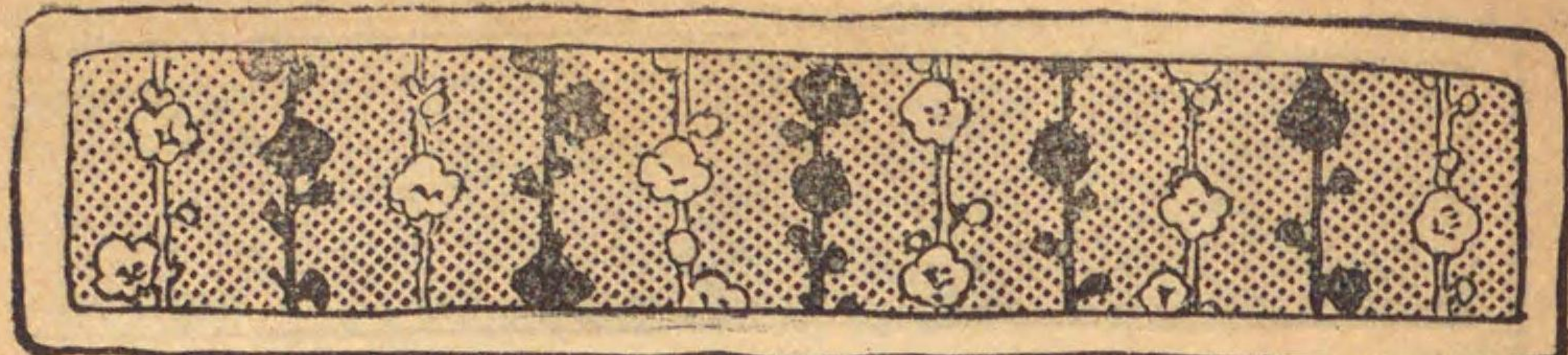
もなくて淋しく過す身の上となつたのである。それでも目をかけて使つてやつた男女わ、こつそり尋ねて来てわ何かに目を足したり食物の世話をしたりしてくれたのであるが、それも一年と立たぬうちに來ない様になつてしまつたのである。「神わないか佛わないか、兄の家を奪う弟の頭に日が照つて、奪われた兄の子兄の妻にわなげ日が照らぬ。」と怨んだり泣いたりするが、人盛んなる時わ天に勝つとやらで弟わますます榮えた。榮えれば榮える程兄の妻わ泣



いて恨んだ。それが積り積つて病氣になつた。醫者よ薬よと騒いだのわ昔のこと。今わ頼んだ所で、醫者も來てわくれず薬を買いたくても其のおあしさえないのである。取つて十二歳の櫻子わ毎日く近くの社に參つてわ母の病氣の平癒を祈り參詣の人の袂にすがつてわ一文二文の施を願ひ、それを米に替えて母にお粥をすゝらせたのである。二萬八千町歩の領主の跡取が忽ちにして乞食袖乞の身になろうとわ夢にも思わなかつた事である。榮枯盛衰



一八
 わ世にある者の免れ難い事とわいい乍ら、これ
 わまた餘りに甚しい事であつたのである。
 或日のこと、櫻子が社の鳥居の側に情ある人
 の參詣を待つて居ると、其所え來たのわ、人もあ
 ろう、商賣もあろうに情も法も辨えぬ奥州生れ
 の人買であつた。人買とわ人の子供を買取つ
 てわ一生奉公をさせる約束で餘所え賣るのを
 商賣にする者のこと、今てわ人身賣買わ法律
 で止めてあるが、昔わ隨分行われたことである。
 其の男わ今しも



『どうぞ恵んで下さりませ、母が長の煩で難澁
 致して居りまする。』
 と、袖に縋る子供の顔を見れば、目鼻立ちといい、
 口許といい、身分ある人の若様といつても耻し
 からぬ姿と見て取り、福德の三年目、此の子を買
 つて賣つて儲けてそれでと心の中に先の先ま
 て考えて、そんな様子わそぶりにも見せず、側え
 寄つて猫なで聲で櫻子の身の上を尋ね、それわ
 氣の毒なと十文ばかりもおあしを與え、空涙を
 流していうにわ



男『何と櫻子殿とやら、叔父様を恨んだ所で、今更
 仕様模様もあるまい程に、さしあたってわ母
 様の病氣をなおすが、肝心かなめ。それにわ
 先以て薬薬を買うにわおあし、其のおあしを
 どつさりと手に入れて母止に渡すのが第一
 の孝行でござろうぞ。』
 櫻『そのおあしが欲しいのでござりますが、貴方
 の様に澤山下さる方わなく、やつと戴くのが
 一文二文、一日かかつて十文を越すことがご
 ざりませぬ。』



男『これさ櫻子どの、十文二十文が何の薬を買う
 たしになりましたようぞ。せめて五百文か千
 文もなくてわ、醫者にも見せることが出来ま
 すまいに。』
 櫻『千文どころか、百文も得られることとてわござ
 りませぬ。』
 男『いや、こゝに五千文でも一萬文でも得られる
 工夫がござる。』
 櫻『それわ本當でござりますか。』
 男『本當ともく、何で嘘など申しませぬ。此





の私と東の方え半歳程も道伴れになつて行
 くなら私が其の五千文を出しましょう。』
 櫻『其の五千文があれば母様の病氣わなおりま
 しょうか。』

男『なおりますとも其のおあしでお醫者を頼ん
 で薬を飲んで。』

櫻『それでわお伴れになつて東の方え参りまし
 ょうか。』

男『そうなされ。それが何よりの親孝行でござ
 りましょう。』



櫻『いや、私が東へ行つたなら母様わさぞお
 淋しいことであろう。おあしわ欲しいが行
 くことわ止めに致しましょう。』

男『いやなら無理に勧めわしないが、どうせ親子
 とも餓死をするのであろう。親に薬を飲ま
 せるが孝行か。薬を飲ませないのが孝行か
 薬を飲めば早くなおるし、飲まなければ何時
 迄もなおらない迄の事さ。』

櫻『それわ早く飲ませたいが。』
 男『それなら私と一しよに東の方え。』

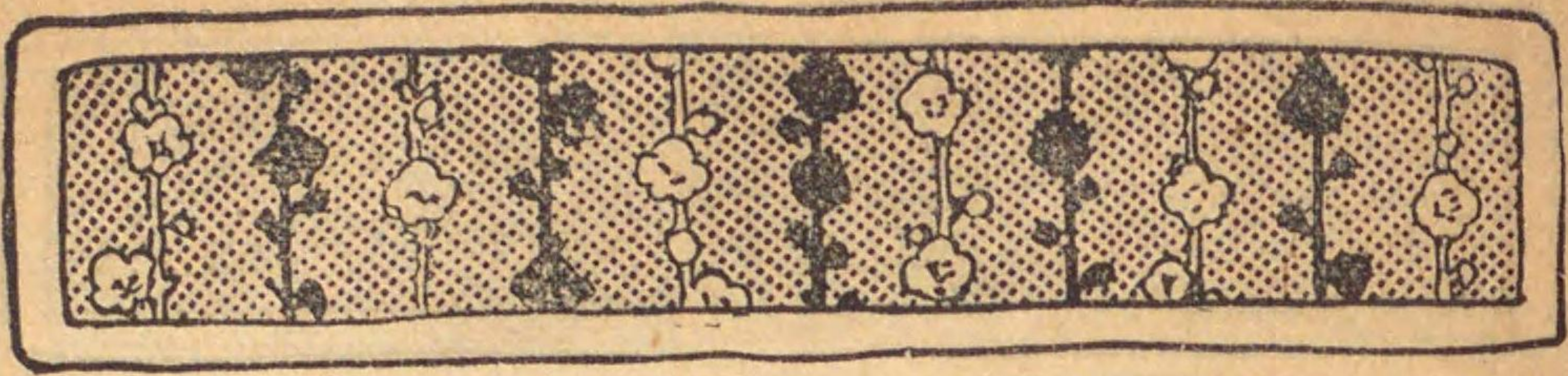


櫻子わ暫く考えたが、

櫻『思いきつて一しよに行きましたよう。おあしを下され、これからすぐにお薬を買いに参ります。』

男『おあしさえあれば、お薬何時でも買われます。さあおあしを上げます。これを母様に届けて少しも早く東の方え立ちましたよう。』
人『買わ五千文のおあしを肩にかけて居た荷物の中から出して積み重ねた。』

柳『それでわ此のおあしを母様に渡して参りま



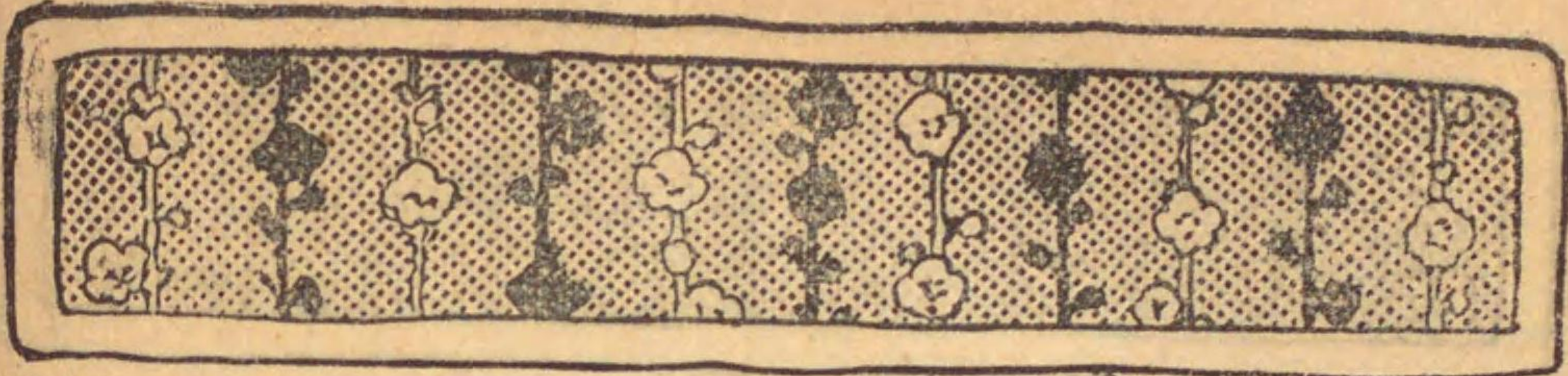
す。』

男『いや、其の儘遁げられてわ困ります。』

櫻『そんな事わ致しませぬ。少しも早く母様に渡してお喜びなされるお顔が見たいのでござります。』

男『でもあるうが、私が母様にお渡し申すでござります。貴方わ此所に待つてござれ。』

櫻『いや、私もお暇乞に参りましたよう。』
男『それわよくない事逢えば別れるのがきつと厭になるものでござる。』



櫻『それでも一目お目にかかつて。』

男『それなら、こうなされ。細々と手紙に書いて

おやりなされ、其のお手紙わおあしと一しよ

に私がお届け申すでござりましょう。』

櫻『手紙わ書きたくても筆紙の用意がない。』

男『それわ此方にござります。』

と人買わ矢立の筒より筆を出し、懐から紙を出

して櫻子に渡した。どうしても母に逢わせな

いで伴れ出そうというのである。それと悟ら

ぬ櫻子わ母に送る別れの手紙を書いて人買に



渡した。人買わ直に櫻子の家を尋ねて五千文

のおあしと手紙を櫻子の母に渡し、直様社え引

返して櫻子を伴れて東をさして出立した。人

目にかからない様にと海邊をさして急ぎ舟に

乗つて遙かの沖合を東の方え漕がせたのであ

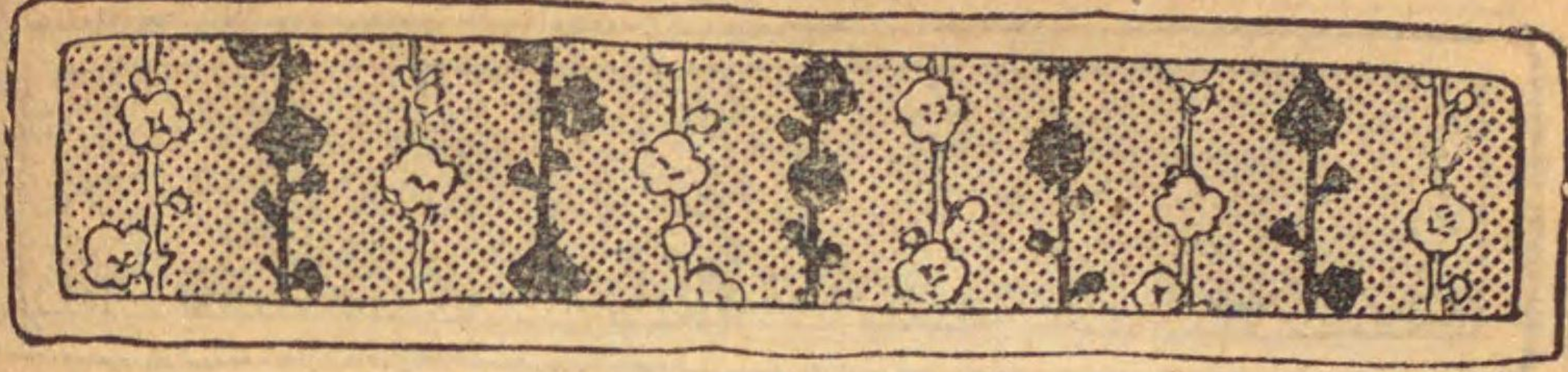
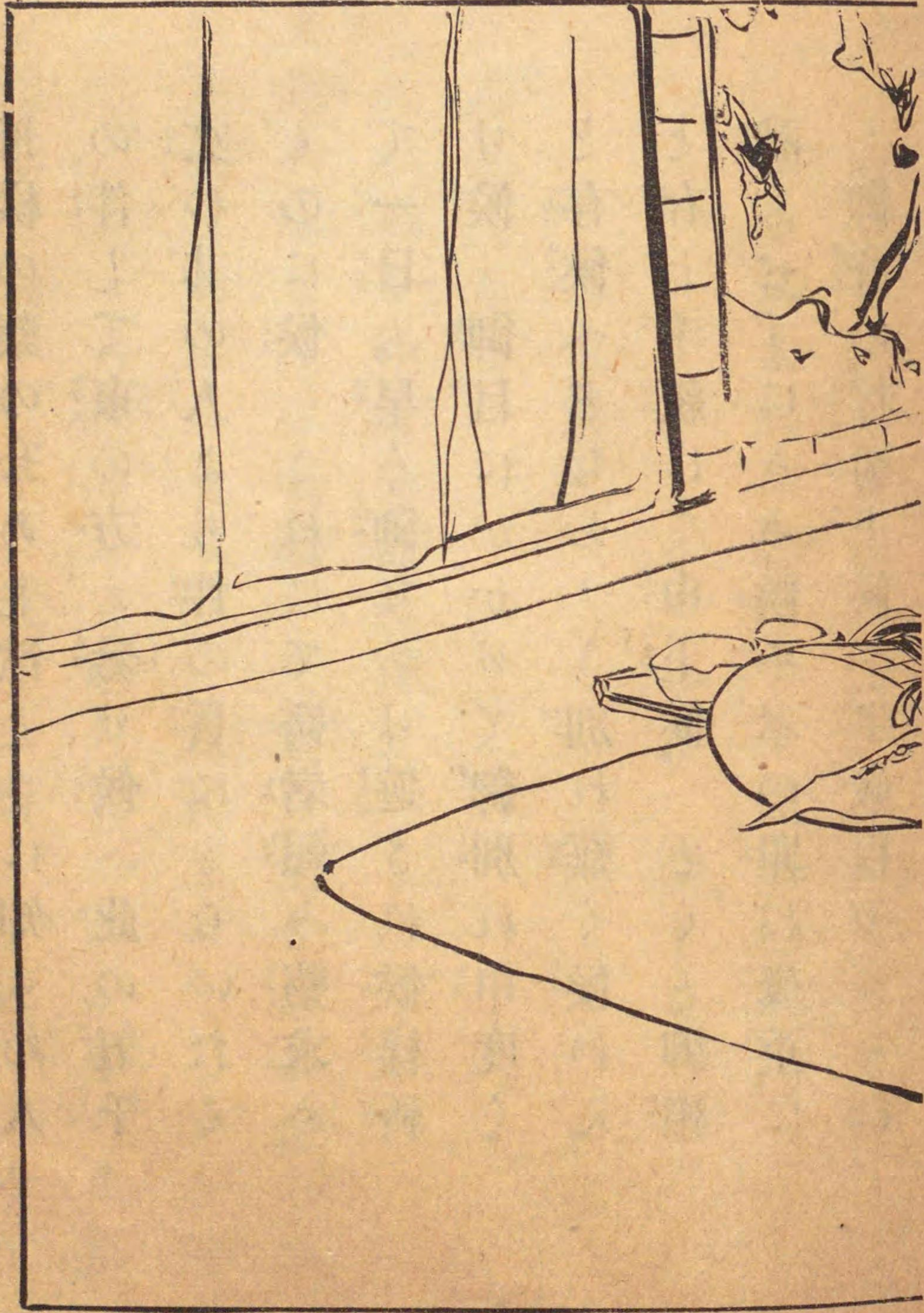
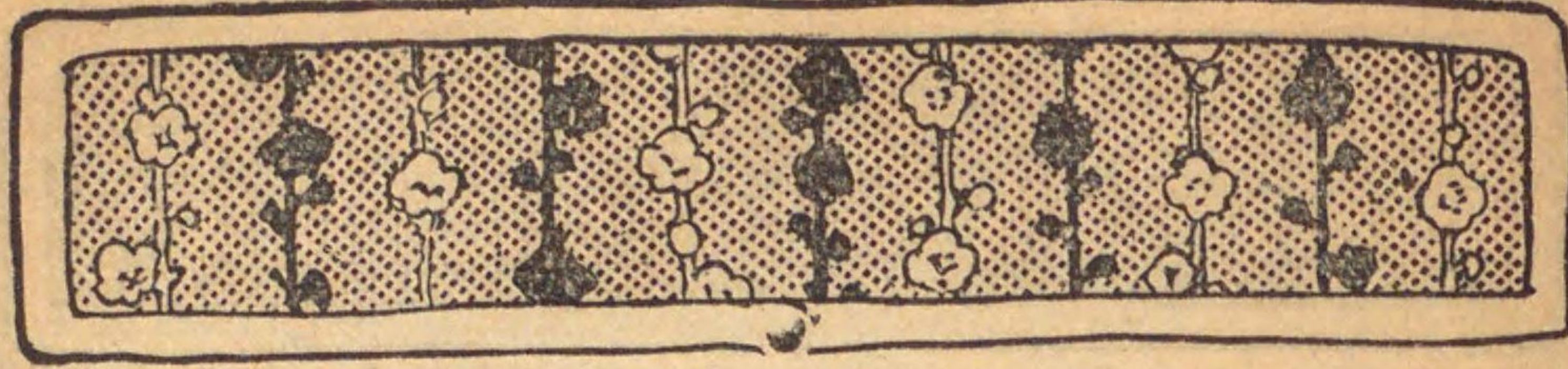
る。

病んで臥て居た櫻子の母わ、我が子よりの手

紙と聞いて、つい近くの社に詣つた筈、立ち歸つ

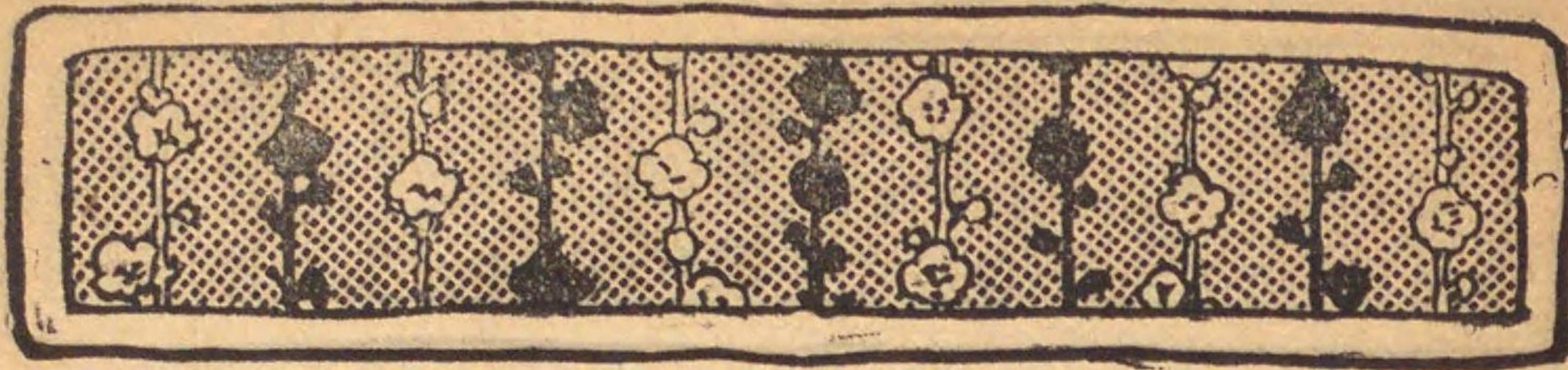
て話してもよいのに、手紙とわ腑に落ちぬと思

いながら披いて見れば、紛いもない櫻子の筆で





母様の薬のおあし欲しさに知らぬ人の伴して東の方え参り候。此の五千文わ其の人より伴の賃にもらいたるものに候。これにて醫者頼み薬求めて一日も早く御なおり遊され候様祈り候。御目にかかりて御別れ申度くと存候へど、なおく別れ難く候わんと存じ手紙にて申上候。とくと御相談もせず、にきめ候不孝の罪わ幾重にも御許の程祈上候。半歳程のうちに



わ立ち歸り御目にかかり申すべく候。御身御大切に遊ばされ候様祈上候。

櫻子より

母上様

と認めてある。

『やや櫻子わ身を賣つたか。』

と母わ床よりはね起きて立ち上つたが、長の煩に足腰も自由にならぬ。大聲をあげて泣き叫んだ。人々わ何事かと駈け寄つたが、事の次第を聞くや否や、『まだ遠くわ行くまい。追つか



けて取戻せ。』と親切にも四方八方え手分をし
て向つたが最早此の時わ人買に伴れられて櫻
子わ遙沖の舟の上に居たのであつた。
行方が知れぬと聞いた母わ泣き入つて、病わ
ますく重つたが里人わそれぐ世話して醫
者よ薬よと心配してくれたので、やがてすつか
り全快したが、間もなく氣が狂い出して、途方も
ない事をしやべり散らし、
『我が子戀しや櫻子戀しや。』
と叫び乍ら夜となく晝となく搜ね廻つたが、果

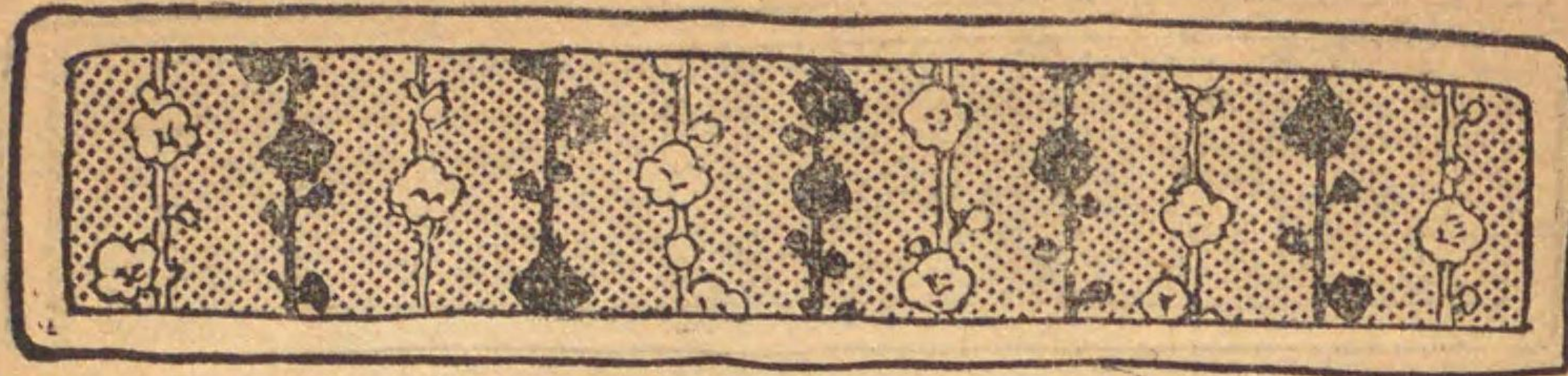


てわ人にも告げず、着のみ着の儘で、東の方をさ
して立つた。櫻子の行方を尋ねて逢おうとい
うのである。
野に臥し、山に寝た事も幾度であらう。氣違
よ狂女よ乞食よと罵られて石を投げられたこ
と、犬に吠えられたこと、渡舟を斷られたことも
幾度かであつた。東とばかり聞いたので、何處
とも更に分らないのである。けれども母わ氣
わ狂いながらも、東えくと上つて何時か花咲
く都にも着き、ついて伊勢路から東海道えかか



つて、遂に三百里餘を隔てた常陸國まで來たのであつた。折しも春の櫻時、櫻川に櫻の花の散りかかるを見て、『我が子戀しや、櫻子戀しや。』の念わますく、募り、何處で手に入れたか、すくい網で波に散り浮く花をすくい乍ら、『波の花より我が子戀しや。』と謠い乍ら、櫻川邊の花見の人の群を分けて歩いたのであつた。

今しも、もまるるくの歌が終つて、『我が子戀しや、櫻子戀しや。』と謠つて地上に仆れ、起き



上つて又櫻子戀しやと謠う折柄、此の國の相馬の館の若様が花見にお出でなされた。『下に下に脇え寄れ。』の先觸れの言葉に人々わ道を開いたが、狂女わ何とも思はず、『我が子戀しや、櫻子戀しや』と聲高に節をつけて謠う。此の歌を聞くや否や、若殿様わ馬からひらりと飛び下りて狂女の前に寄り、しげくと其の顔を見詰めた。

讀者諸君、わ最早若殿様の誰であるかわ分つたであらう。いう迄もなくこれわ櫻子である。



三六
 櫻子を日向から伴れ出したのわ今の羽前羽後
 あたりの人買であつた。これが櫻子を伴れて
 通つたのを櫻川の近くの磯邊の神宮寺の坊様
 が遙々日向からとの話を聞いて涙を流して價
 高く買取り寺に置いて後々わ出家させて自分
 の後に据えようと思つて居たのであつた。そ
 れを相馬の領主が唯者でわないと見て取り様
 子を聞いて氏も素姓も賤からぬ者である幸に
 子もないからといふので貰受けて後嗣にした
 のであつた。



親子の情わ通うものである。櫻子が見詰
 めれば狂女も櫻子の顔を見詰めたが、あやし
 光る狂女の目わ次第くに曇つて果てわ涙の
 雫がはらくとこぼれた。

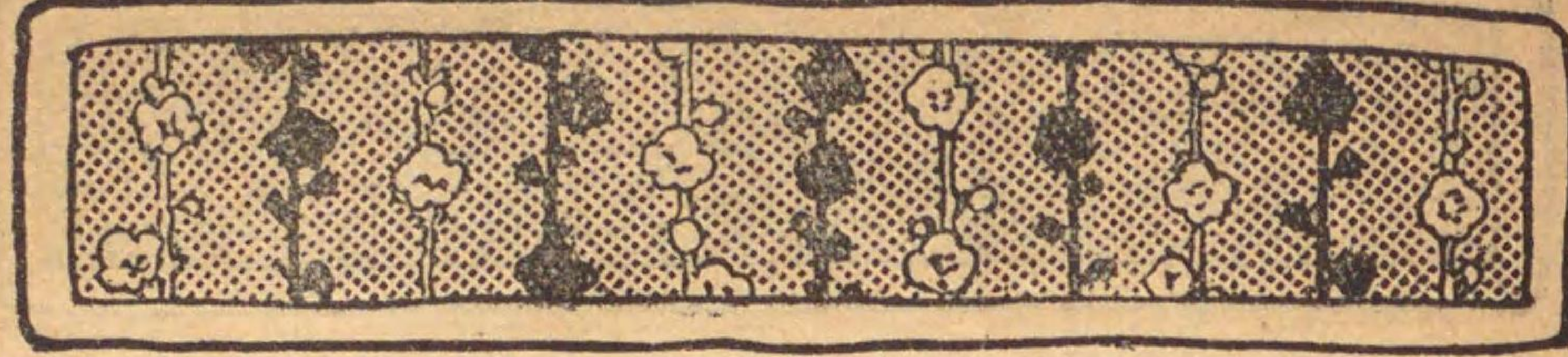
『母様』

『櫻子』

『母様』

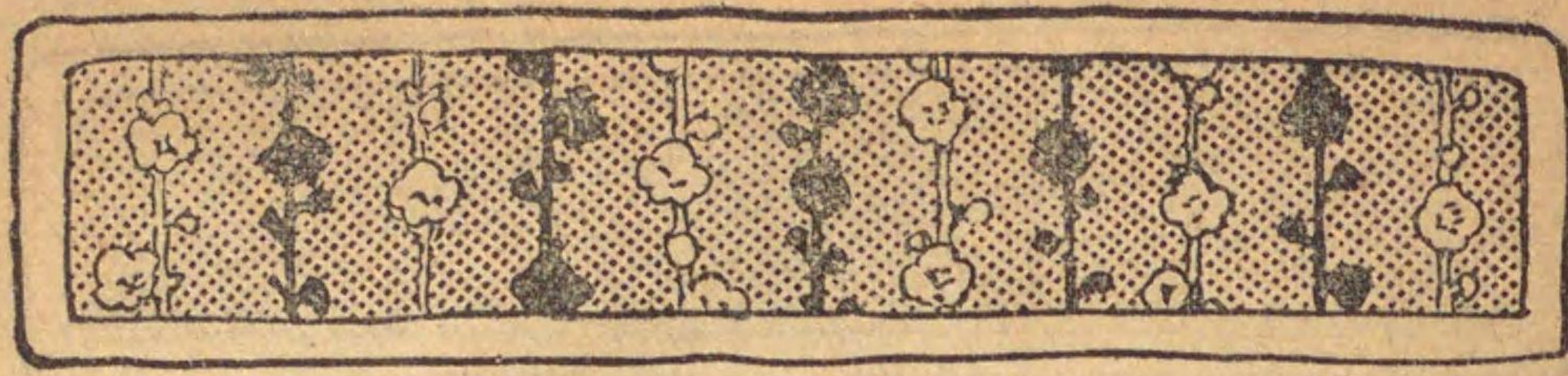
『櫻子』

櫻子わ母に別れて四年目の今日櫻川の櫻の
 下で目出度母に再會した。櫻子が相馬殿の養





子となるや否や母を呼び迎えようと日向に使
 を立てたのであつたが、此の時母既すでに東あづまをさ
 して狂くるつて出た後のちであつた。其そのの後のち朝廷ていていえ申もう
 し上げて父の本領ほんりやうわ叔父おじの手てから取とり戻もどした
 が、母ははの行方ゆくえがわからないので、夜書よるひる心配しんぱいして居
 たのであつた。それが今花いまはなの下したで思おもいがけも
 なく、めぐり會あつたのである。どんなに嬉うれしか
 つたことであるう。さきに狂女きやうじよと侮あなごつて笑わらい
 罵ののつたものも、相馬そうまの若様わかさまの母様ははさまと聞きいて、大地だいち
 に手てを突ついてわびた。女をんなや老人おとしわ其そのの場ばの様よう



子こを見て、深ふかい譯わけわ知らぬながらも一人ひとり残のこらず
 貫もろ泣なきをした。母ははの氣きの狂くるわ此この時ときからすつ
 かりなおつつて、親おや子こわ相あ共ともに相馬そうまの館やかたえ歸かえつて
 改あらためて喜よろこの盃さかずきをめぐらした。
 十五じうご六年ろくねん以前いぜんまで、常陸ひたち國くに西茨城さいしき郡ごうり東那珂ひがしな村むら
 大字おほ磯いそ邊べに姥塚うばづかといいう塚つかがあつて、其そのの上うへに姥うば
 櫻ざくらといいう老樹おおいの櫻ざくらが一本いっほん立たつて居いた。これわ
 櫻子ざくらしの母ははが櫻子ざくらしと共ともに磯邊いそべの木この花はな咲さく耶や姫ひめを祀まつ
 つた宮みやに參詣さんぎした時とき紀き念ねんの爲ために植うえたものだ
 と言い傳つたえて居いたのである。



七重八重花は咲けども山吹の

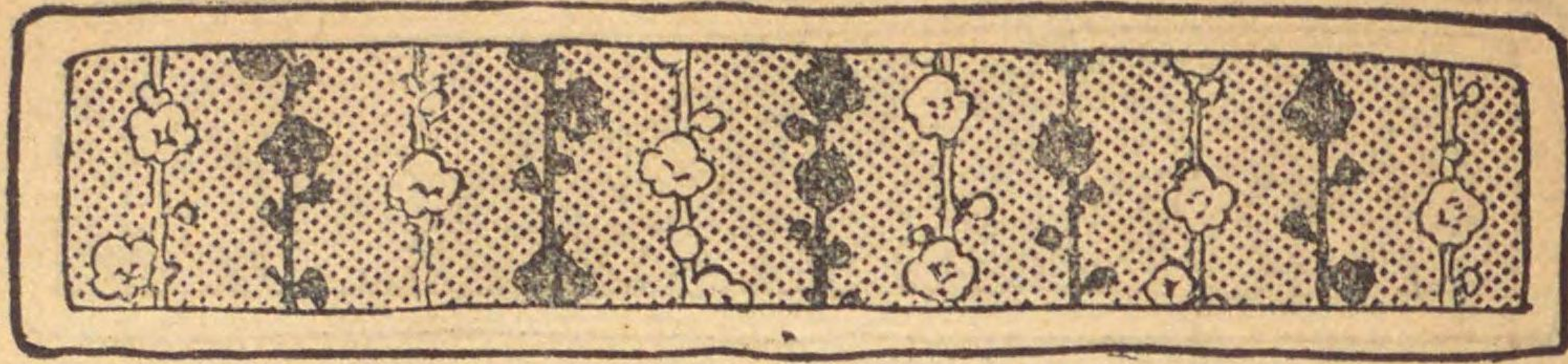
みの一つだになきぞ悲しき

兼明親王

駒とめてなほ水かはん山吹の

花のつゆそふ井出の玉河

藤原俊成

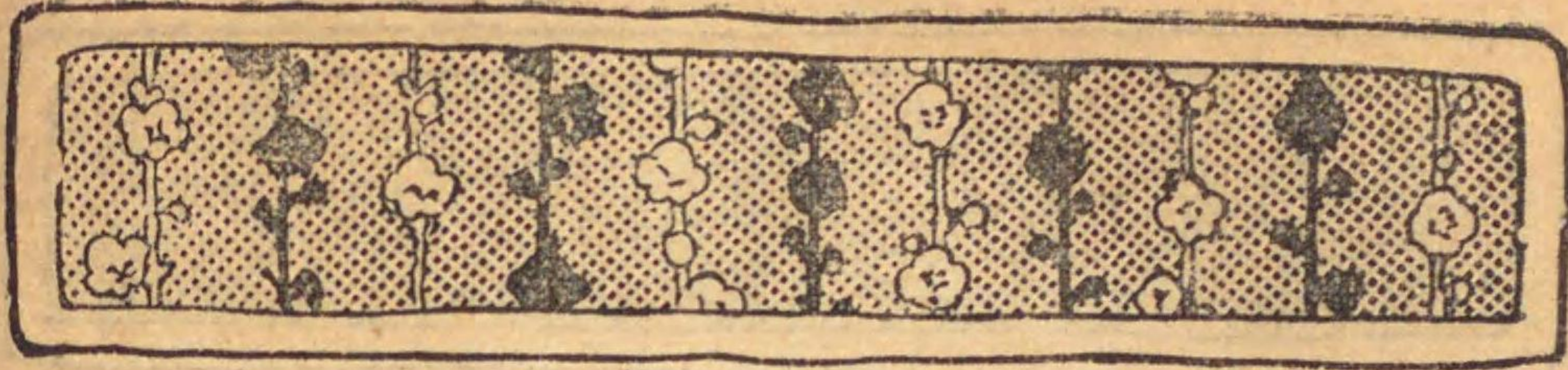


森の家

むかし一人の樵夫がありまして、女房と三人の娘とで、大きな森の蔭に住つて居ました。

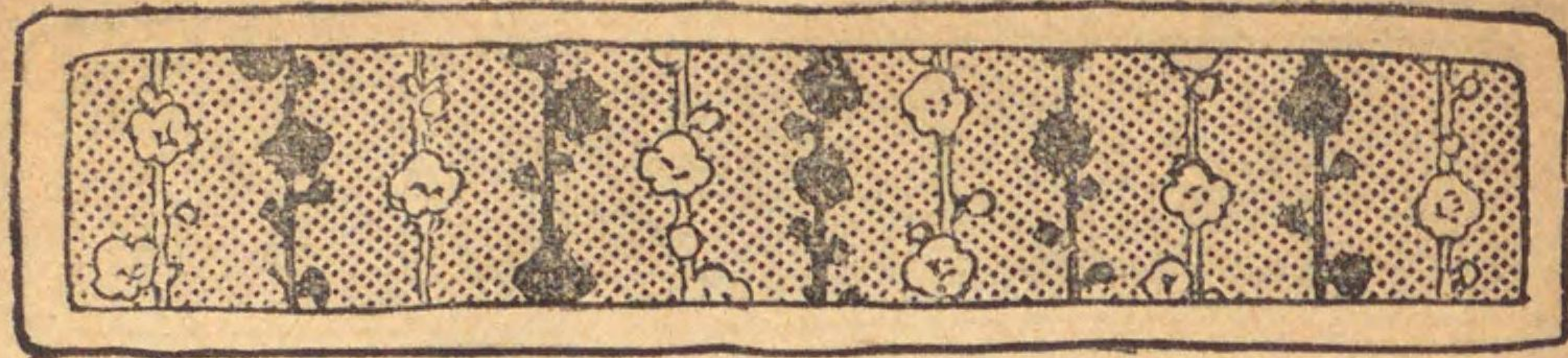
或朝樵夫わ仕事に出掛けようとして、女房に申しますにわ、

『晝前になつたら、長姉に辨當を持たしてよこせ。道々にわ私が小麦を撒いて置くから、夫れを辿つて來さすが善い。』
日が森の上に昇つた頃、姉娘わ父の辨當を持



つて出掛けました。處が父の撒いておいた小
 麥わ雀や雲雀や山雀などが拾つて食べて了つ
 て、今わ一粒も残つて居ませんから、何うしても
 仕事場え行く道が分りませぬ。彼方が知ら、此
 方か知らと踏み迷つて居ます内に、日わとつぶ
 りと暮れて了いまして、さらくと木の葉わ鳴
 る、ほうくと梟わ鳴く。娘わ恐ろしさに身を
 震わして居ました。

ふと見ますとずっと向うの木の間、燈火が
 一點ちらりと瞬いて居ます。「あ、彼所に人家が



ある。行つて一晩泊めて貰おう。」と光を目當
 に歩いて参りました。

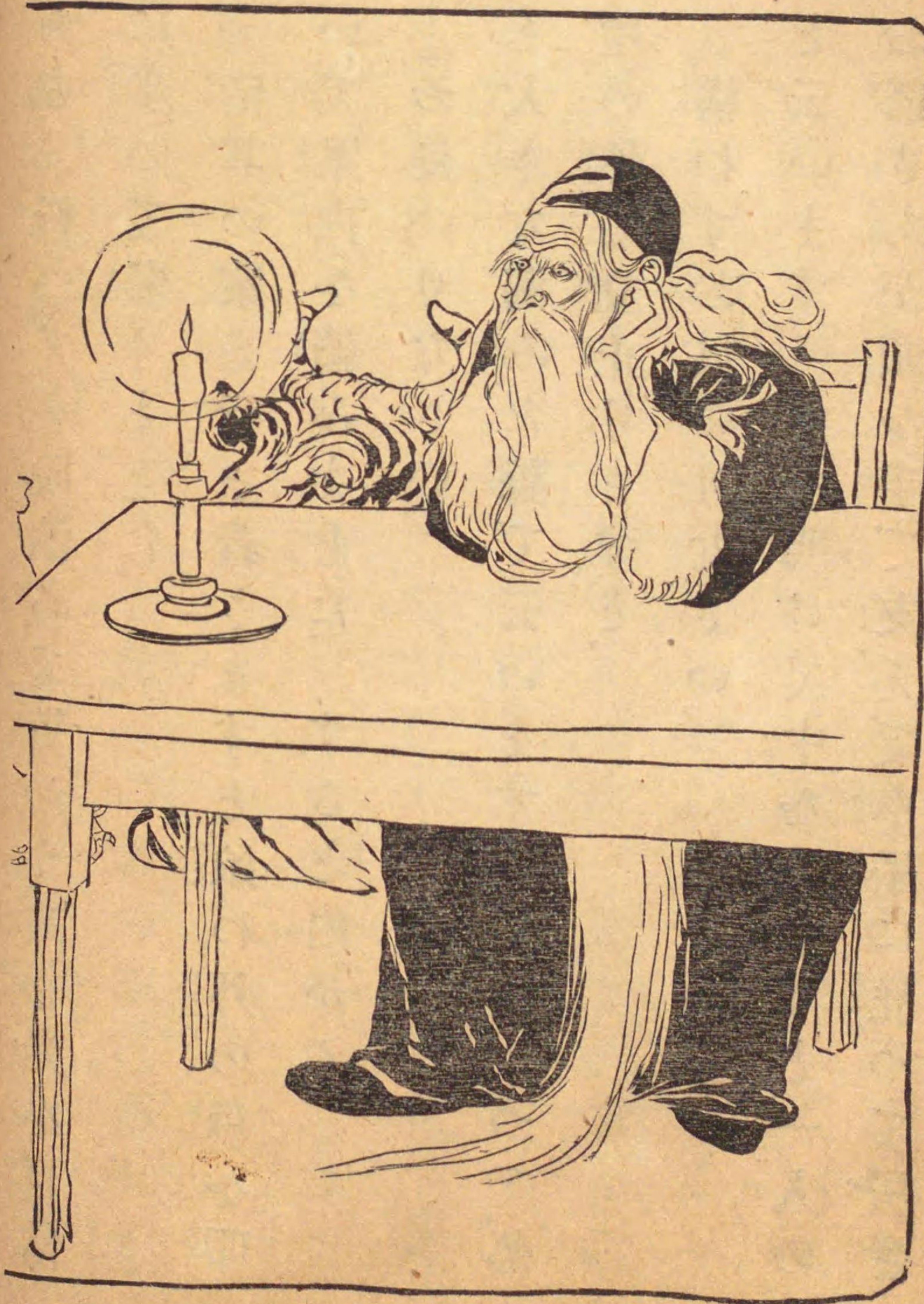
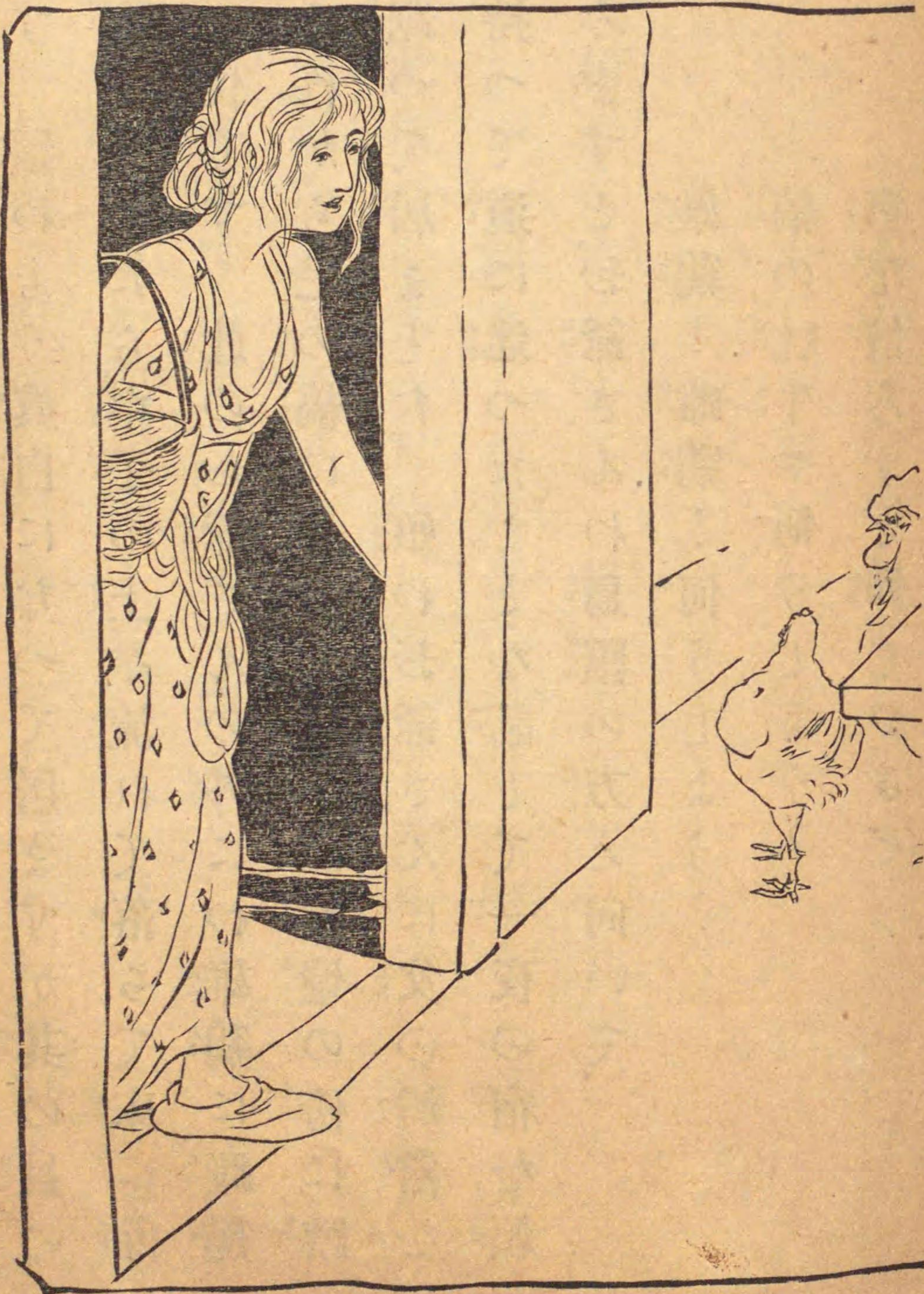
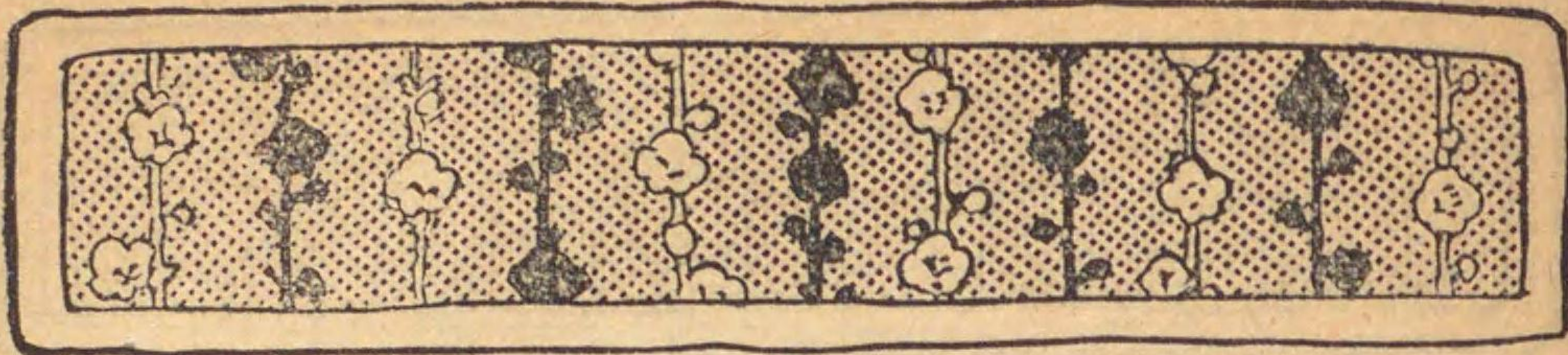
偕其の家え行き着きますと、娘わ外の戸を叩
 いて案内を頼みました。すると内から、

『おはいりなさい。』

と大きな濁みだした聲で云います。ではいつて、部
 屋の外え立止りますと、

『構わずおはいりなさい。』

と云います。戸を明けて中を見ますと、一人の
 お爺さんが頭を手で支えて卓子に凭つて居ま



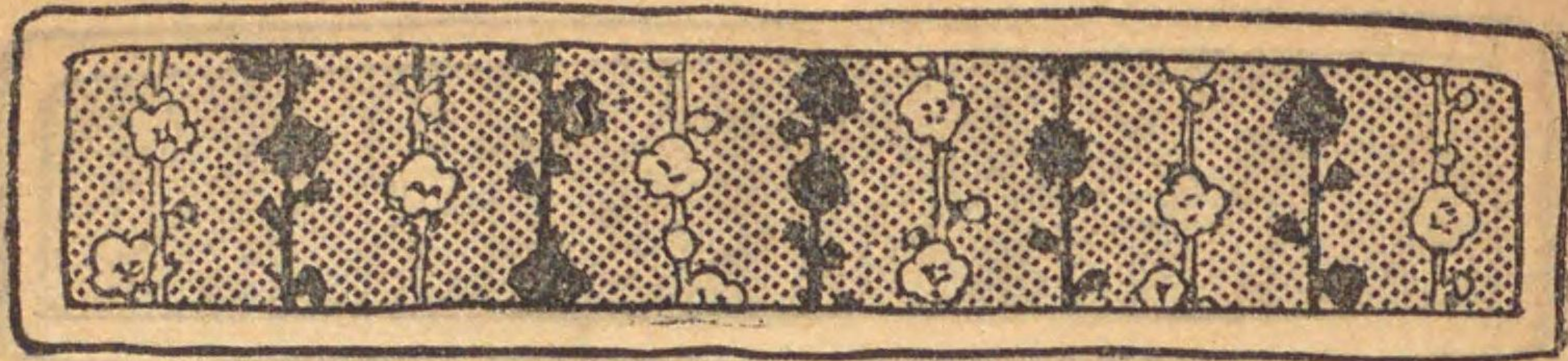


す。鬚ひげわもう眞白まっしろになつて居いますが其その長ながい事ことと云いつたら卓子テーパーの上うへを流ながれて落おちて床ゆかに餘あまる位くらいです。此このお爺ぢいさんの外ほかにわ雄鷄おんどりに雌鷄めんどり、それから毛けの縞しまになつた牝牛めうしが暖爐だんろの傍そばに蹲うず踞くまつて居いました。娘むすめわお爺ぢいさんに父ちちの辨當べんとうを持もつて道みちに迷まよつたことを話はなして一夜いちやの宿やどを頼たのみますと、お爺ぢいさんわ鳥獸とりけものの方ほうえ向むいて、

雄鷄おんどり！雌鷄めんどり！何どうしよう？

縞しまの牝牛めうしや何どうしよう？

宿やどを借からうと仰おつしやるぞ。



其方達そなたち返事へんじをしたがいい。

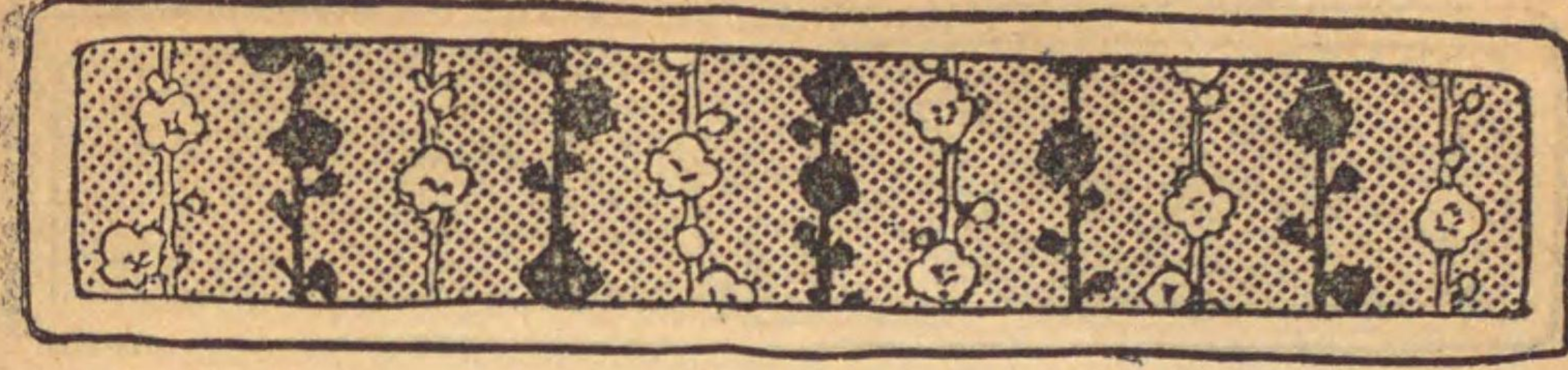
と申もうします。すると鳥とりや獸けものわ

『コケツコ、ケツココ、モウくくく。』

と續つづ様に申もうします。何なんの事ことだか分わかりませんでしたが、お爺ぢいさんが眞黒まっくろに煤すすけた勝手かつてえ導みちびいて、『此所こゝにいろんな物ものが整ととのえてあるから、晚飯ばんめしの支度しだをして下ください。』

と申もうしますので、「泊とめて遣やらう。」と云いつたのだと云いう事ことが知しれました。

娘むすめわ肉にくや野菜やさいを料りょう理りして御馳走ごちそうを澤山たくさん拵こしらえ、



卓子テの上に並べてお爺さんと一緒に飲んだり
 食べたりました。けれども鶏や牝牛めうしにわ何
 にも宛行あてわなかつたのです。

娘むすめわ腹一杯食べて了いますと、

『私わたくしわ大層草臥たいそうくたびれました。もう休みとう御座
 います。寝臺ねだいわ何處どこに御座ございますよう。』

と訊ききます。すると鶏とりに牝牛めうしわ

主人あるじと旨うまそに食たべおつた、

主人あるじと旨うまそに飲のみおつた、

饑ひもしい私等わしにや構かまわずに。



眠ねむけりや勝手かつてに寝ねるがよい。

と聲こゑを揃そろえて云いいます。お爺さんわ娘むすめに向むかつ

て、

『寝臺ねだいわ二階にかいにあるから、行いつてお休やすみなさい。

寢床ねどこわ善よく拂はらつて、綺麗きれいな敷布しきふをお敷しきなさい。

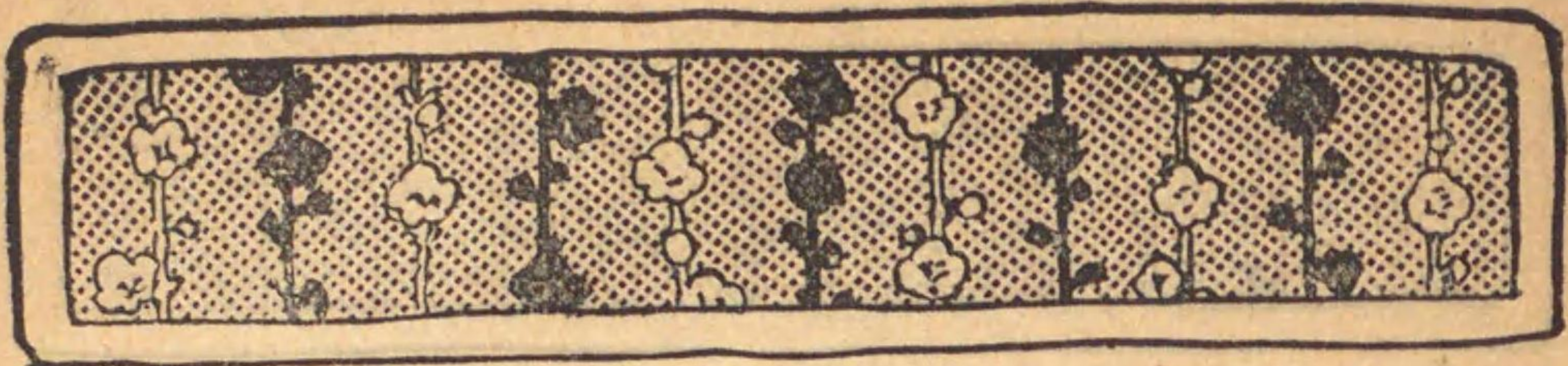
い。』

と云いいます。娘むすめわ二階にかいえ上あつてお爺おやさんの云い

つた通とおりにして休やすみました。

暫しばしくするとお爺おやさんも二階にかいえ上あつて行いきま

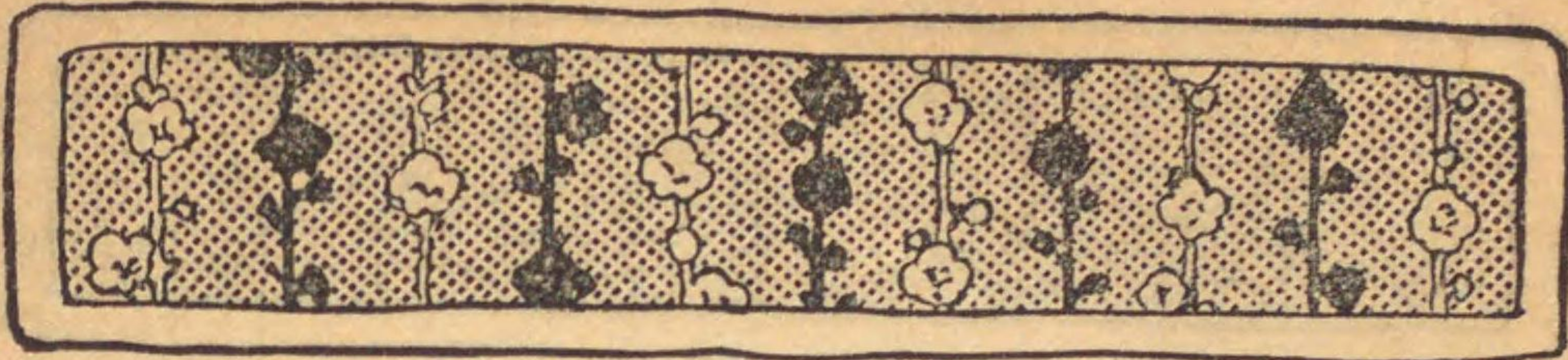
して、持もつた蠟燭ろうそくを翳かげして娘むすめの寢顔ねがほを熟つく々づ見みて



五五



五四



居ましたが、駄目だ。と云わんばかりに其の頭を振りました。そうしていきなり毘板を引いて穴倉の中えおつこととして了いました。其の夕方樵夫わ家え歸りまして、何うして辨當を持たせなかつた？一日食わずに仕事が出来ると思つか。』と、散々女房を叱りました。『辨當わ確に持たせましたが。てわ仕事場えも参りませんか。家えも今に歸つて來ませぬ。道に迷つたんじやありますまいか。』



女房わ氣遣わし氣に申しますが、明日にもなつたら歸つて來るだらう。』と夫わ氣にも止めませんので遂に其の儘にして置きました。翌朝樵夫わ又仕事場え出掛けようとして、晝前になつたら中の娘に辨當を持たしてよこせ。今日わ扁豆を撒いて置く。小麥よりわ大きいから目に付かんことわあるまい。』お晝頃中の娘わ父の辨當を持って出掛けました。處が扁豆わ既に森の鳥が食べて了つて、一粒もありません。迷い迷つて又夜になりま



した。途方に暮れて居ます處え、例のお爺さんの家の燈火が目につきましたから、辿り着いて、一夜の宿を頼みました。お爺さんわ鶏や牝牛に向つて、

雄鶏！雌鶏！何うしよう？

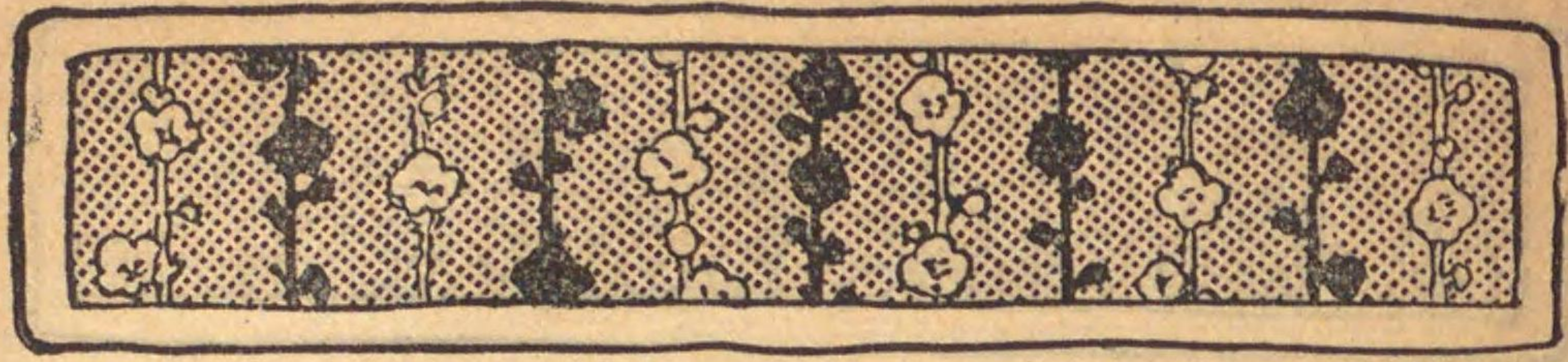
縞の牝牛や何うしよう？

宿を借ろうと仰しやるぞ。

其方達返事をしたがいい。

と申します。すると鶏や牝牛わ

『コケツコ、ケツココ、モウくくく。』



と申します。お爺さんわ勝手え連れて行つて、晩飯の支度をする様に頼みました。

娘わ澤山に御馳走を拵えて、お爺さんと飲ん

だり食べたりしました。けれども鶏や牝牛に

わ何にも宛行つて遣りませんでした。それで

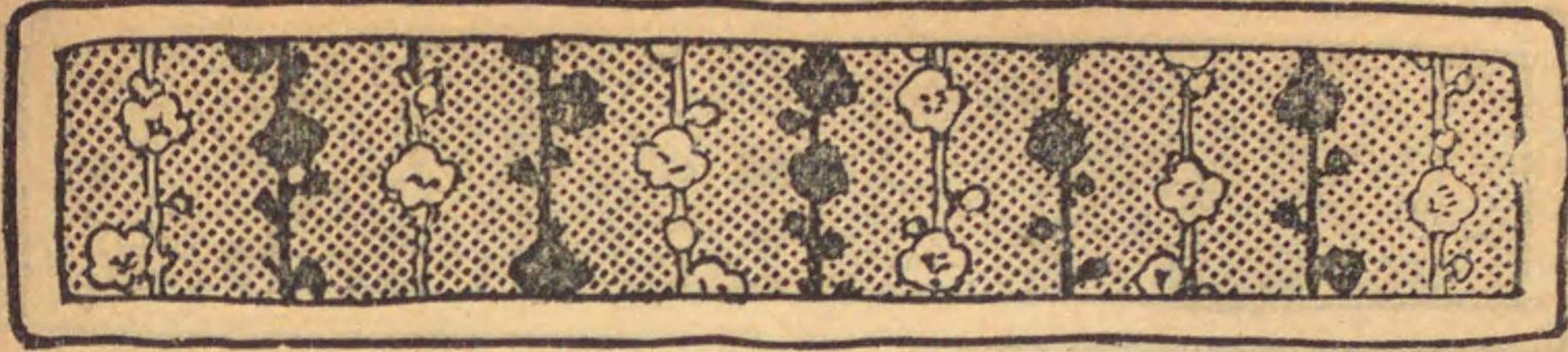
寢臺の在所を尋ねますと鶏に牝牛わ聲を拵え

て、

主人と甘そに食べおつた、

主人と甘そに飲みおつた、

饑しい私等にや構わずに。



眠むけりや勝手に寝るがいい。

と申しました。お爺さんわ二階の寝臺で休む
様に申しましたが、寝込むのを待つて、上つて行
つて、これを穴倉へおつことして了いました。

翌朝樵夫又仕事場へ出掛けようとして、

『今日わ末の娘に辨當を持たせてよこせ。彼
女わ孝行な子だから、二人の姉の様にうろつ
く様なことわあるまい。』

と申しました。妻わ心配して、

『若し彼女までが歸らなくなつたら何う致し

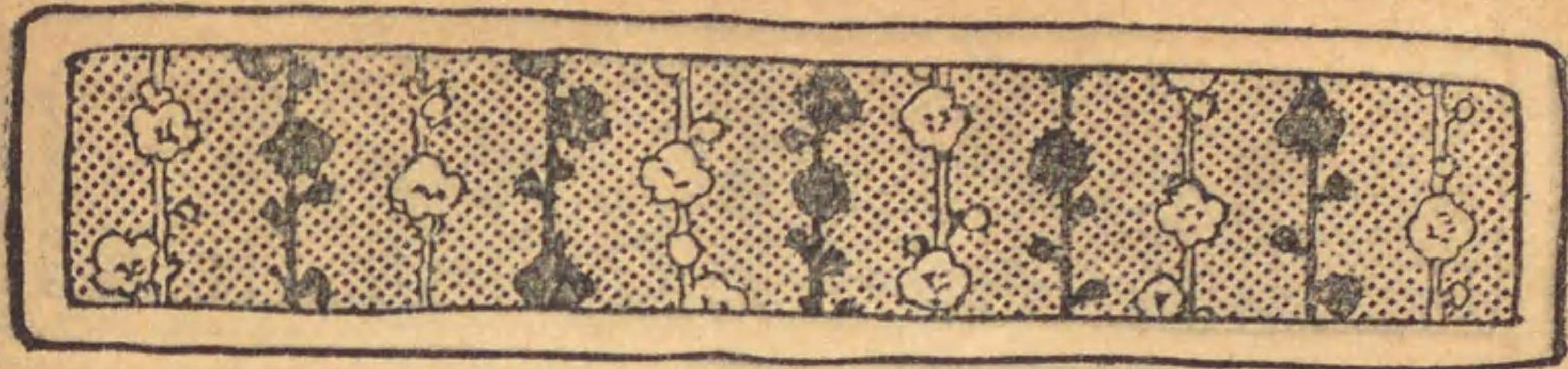
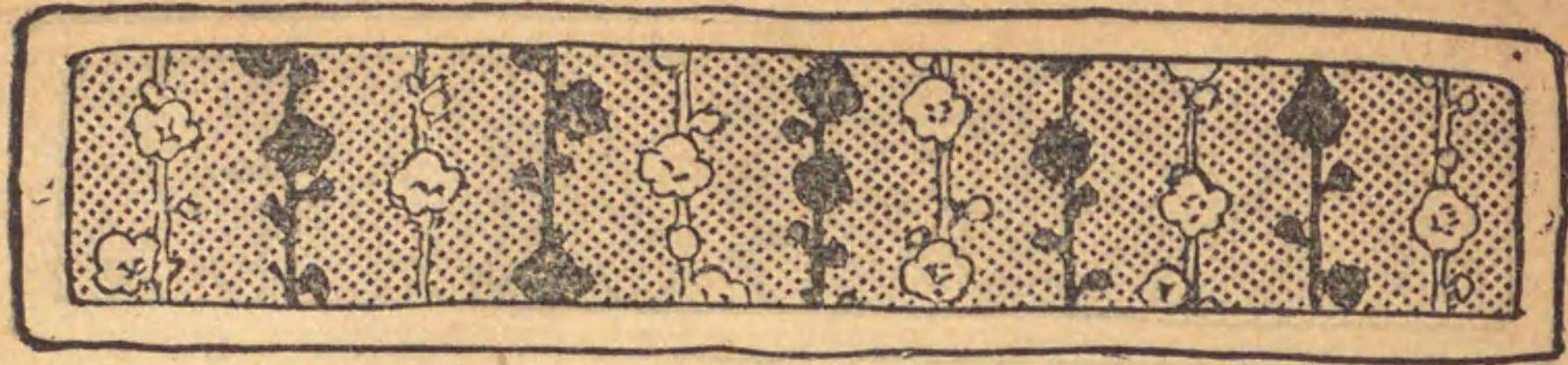


ます?』

と申しますが、

『何大丈夫、伶俐な娘だもの、道になんぞ迷うも
のか。夫に今日わ豌豆を撒いて善ツく分る
様にして置く。』

併し末の娘が辨當を持つて出掛けて見ます
と、豌豆わ山鳩がすっかり食べて居まして、何方
の途を行つて善いか分りませぬ。遂にこれも
あらぬ方え迷い込んで了いました。娘も父の
餓さを思い、母の待遠しさを考えて、氣が氣でわ





御座いませんが、四邊わもう暗くなつて來ました。仕方が御座いませんから、亦お爺さんの家え辿り着いて、一夜の宿を頼みました。お爺さんわ例の通鶏や牝牛に申しました、

雄鶏！雌鶏！何うしよう？

縞の牝牛や 何うしよう？

宿を借ろうと仰しやるぞ。

其方達返事をしたがいい。

すると鶏に牝牛が

『コケツコ、ケツココ、モウくくく。』



と云います。娘わ暖爐の傍へ行つて、鶏の羽を擦つて遣つたり、牝牛の毛を梳いて遣つたりしました。そうしてお爺さんが晩飯の支度をする様に申しますと、種々と御馳走を拵えてこれに薦め、又外え出て、鶏にわ大麥を持つて來て遣つたり、牝牛にわ枯草を抱えて來て遣つたりしました。

『さあ、さ、澤山お食べ。今に水も飲ませて上げ

ます。』

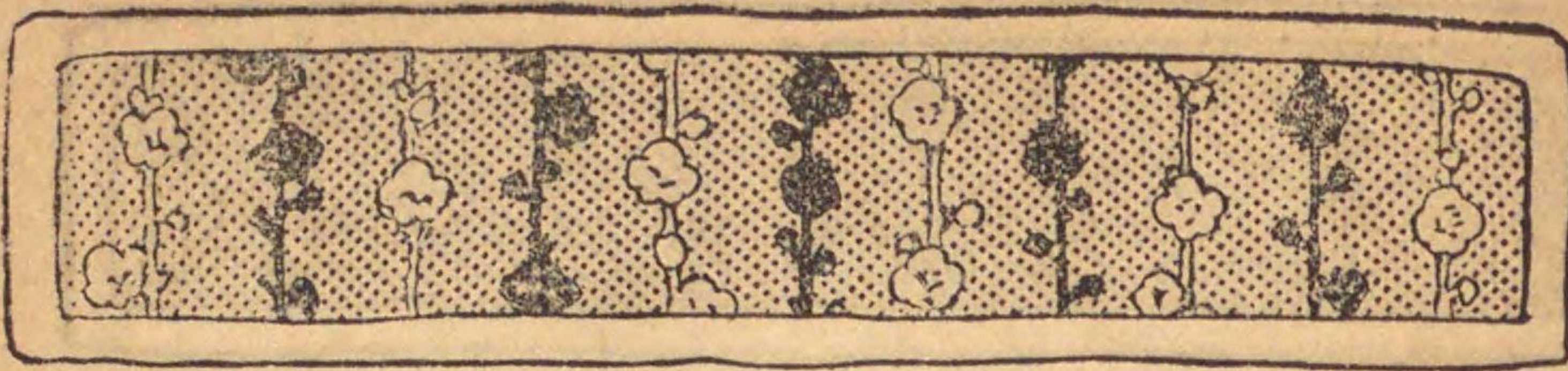
斯う云つて、更に手桶に水を汲んで來て遣りま



した。鶏わ桶の縁に上つて喙をちよいとつけて
てわ飲み、ちよいとつけてわ飲みしました。牝
牛わ口を入れて、ずるど、音を立てて飲みまし
た。

娘わ鶏や牝牛の十分足りた様子を見て、始め
て卓子に着いて、お爺さんの残ものを食べまし
た。

此の時鶏わ翼の下に首を入れ、牝牛わ眼をし
ぼしぼさせて居ましたが、娘が食事を済ませた
のを見ると、



私等に食わして下さつた、
私等に飲まして下さつた、
主人にや固より親切に。
さあ、さお休み、お二階で。

と云います。娘わ二階に上つて休みました。
眞夜中頃、突然凄じい物音が起ると一所に、家
がゆらく揺れ出して、今にも顛覆しそうな有
様です。娘わむつくと起きて寢臺の上に坐り
ました。下からわ鶏や牝牛の急遽しい叫聲が
聞えて來ます。何うしたら善からうと途方に



くれて居ますと、やがて、動搖も止み、叫聲も聞えなくなりました。漸く落着いて又横になつて休みました。

處で翌朝目を覺して見ますと、部屋の様子わすつかり變つて、宮殿の客間かと思われるばかりになつて居るのです。寢臺にわ象牙の飾がしてありますし、窓掛わ天鷲絨で出來て居ます。又腰掛の側にわ眞珠の飾釦の附いた上靴が並んで居ます。娘わ夢でわないかと思つて居ますと、下から綺麗な着物を着た三人の從者が上



つて來まして、

『何か御用わ御座いませんか。』

と訊くでわありませんか。

『否、何も御座いませぬ。今直に下りて朝飯の支度を致しませう。』

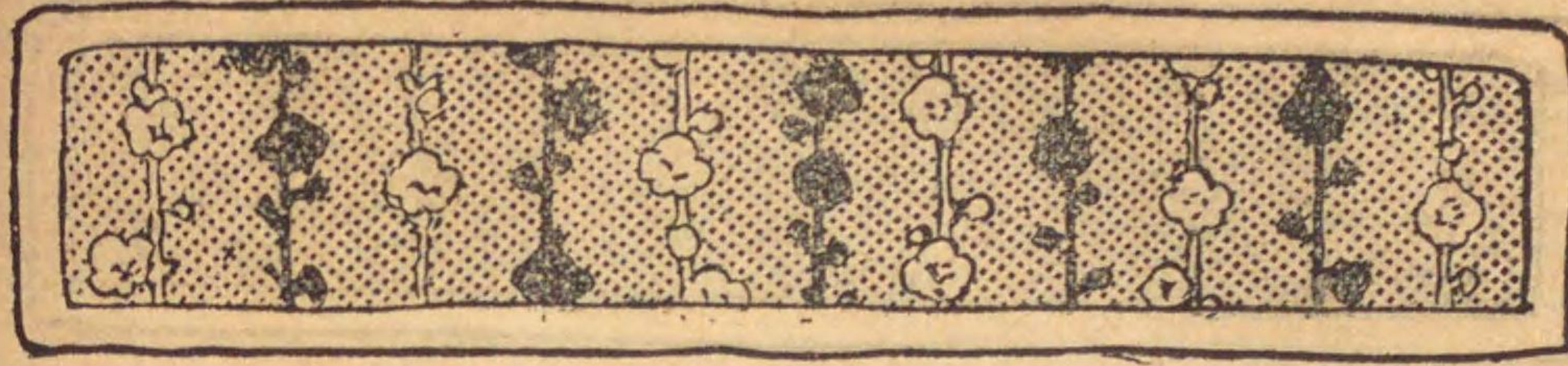
鶏にも餌を遣りまし

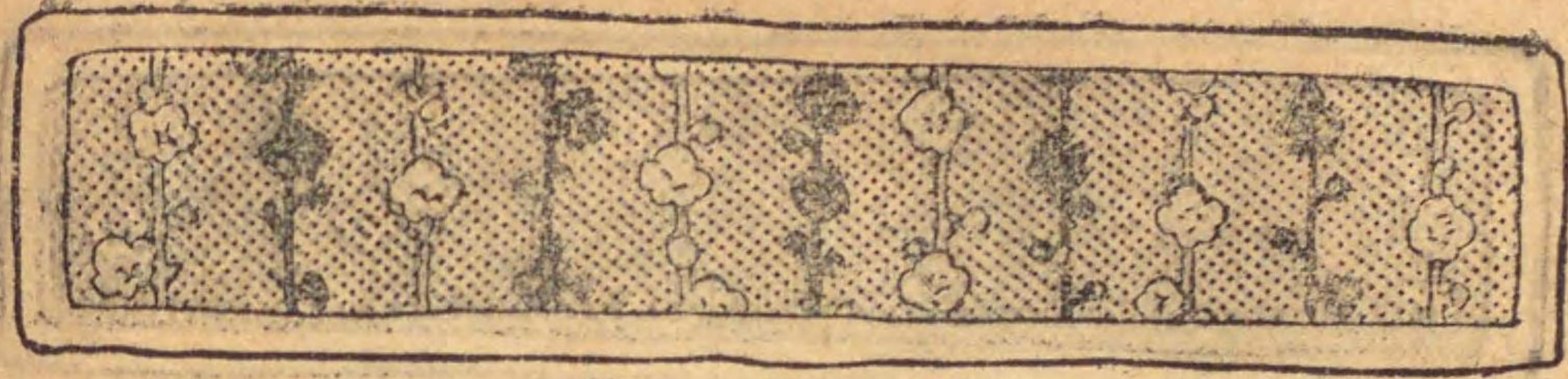
ようし、牛にも秣を遣りましう。』

と答えて、着物を着直したりして居ますと、そこ

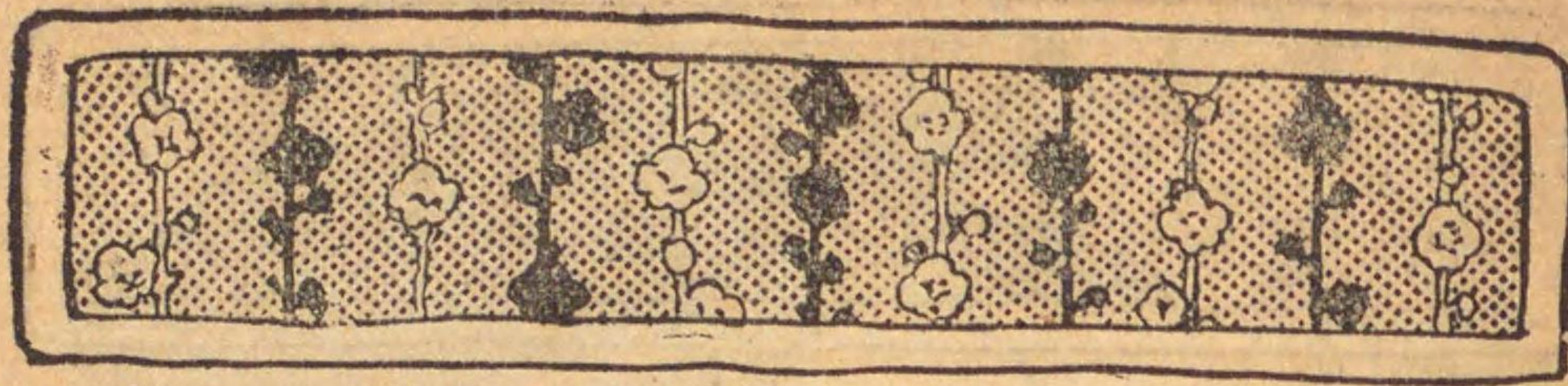
え又一人の立派な若者がはいつて來まして、

『私わ此の國の王子ですが、或悪い魔法使に咒われて、むさいお爺さんにされて了つたので





す。そうして三人の下部と一緒に此の森の中に住わなければならぬ事になつたんです。が、其の下部も雌雄の鶏と縞の牝牛にされて了つたんです。けれども若し一人の少女が来て、お爺さんの私ばかりでなく、鶏や牝牛の下部にまで親切にして呉れたら、此の魔法わ容易く解けると云うのでした。が、昨日貴女がお出でなすつて、いろくくと親切にして下さつたので、私共が元の姿になれたばかりか、家も斯んな壯麗なものになつたのです。』

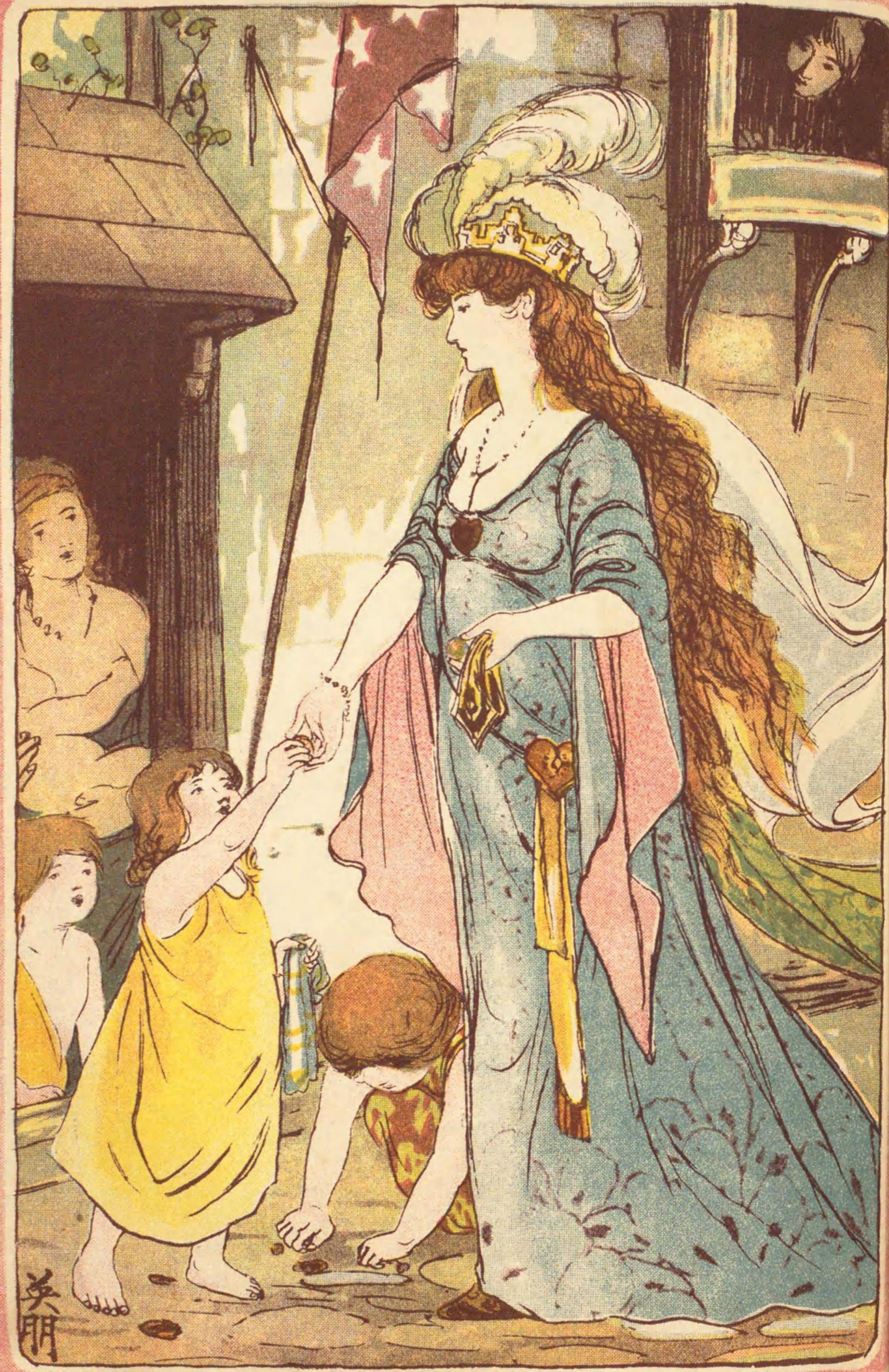


と物語ります。娘わ始めて合點が参りました。王子わ更に言葉を改めて、
 『甚だ不躰でございますが、貴女わ私の妃になつて、わ下さりますまいか。』
 と申出しました。娘が早速承諾の旨を答えますと、直ちに従者を娘の家へ遣つて、其の兩親を婚禮の儀式に迎えさせました。又曩に穴倉に落した二人の娘も、此の娘の姉だと言ふ事が知れましたので、手厚く待遇したと云う事でありませぬ。

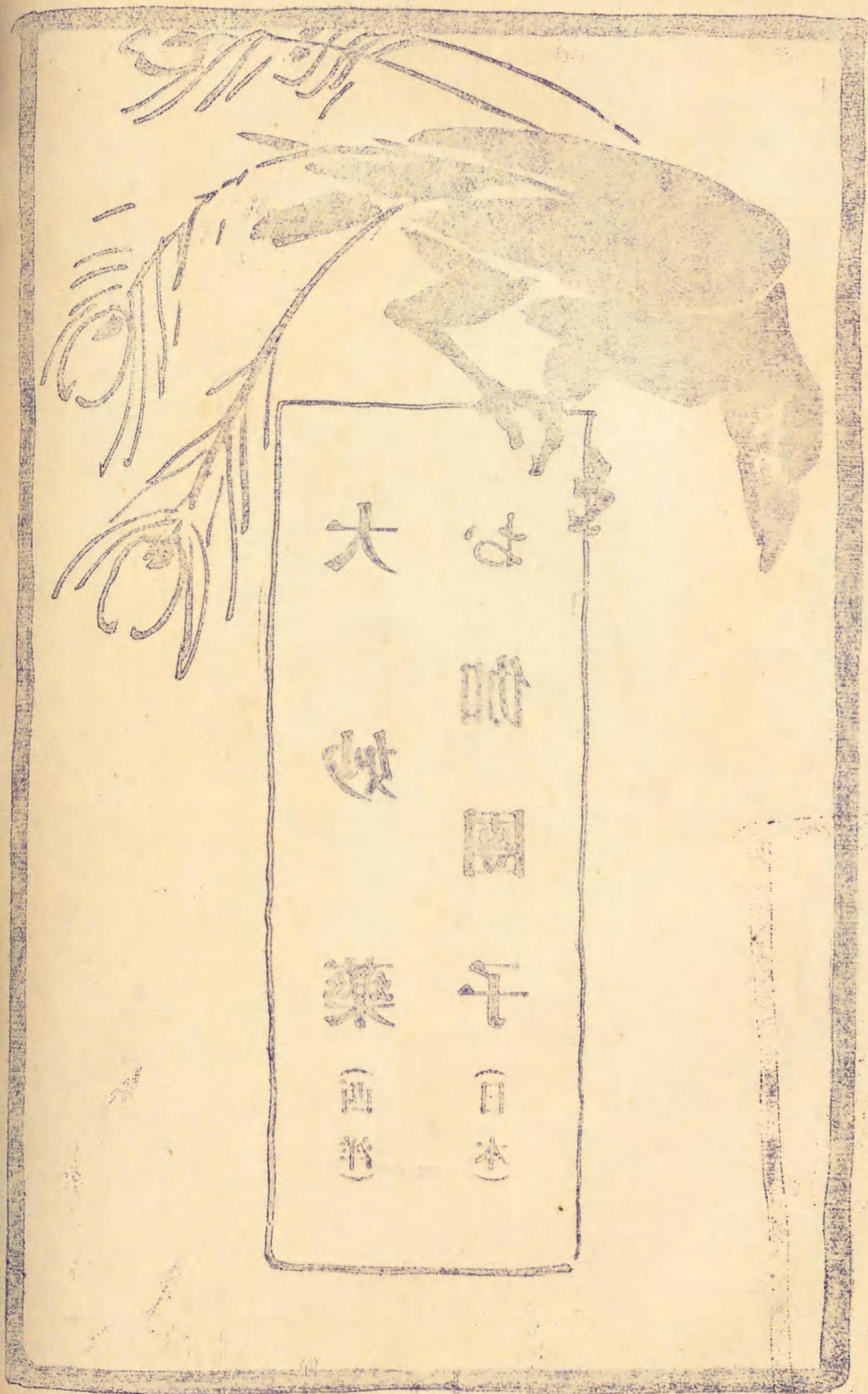
めでたしく。



山里や桃にかけたる鹽肴	喰うて寝て牛にならばや桃の花	海棠のうつぶくや齒のいたむ時	海棠や白粉に紅をあやまてる
蓼	燕	越	燕
太	村	人	村



英朋



大 正 十 年 西 曆
 藥 (西 曆)

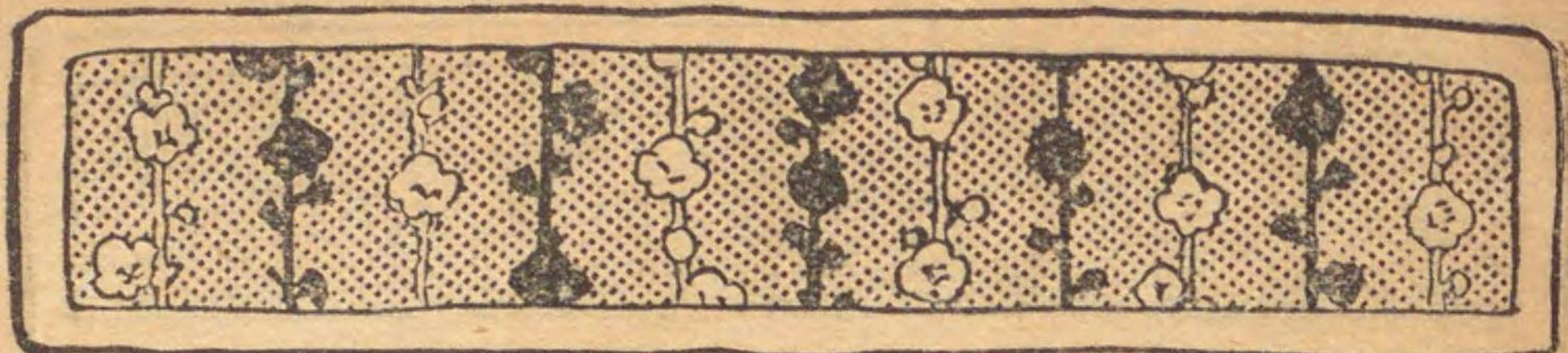


大 妙 藥

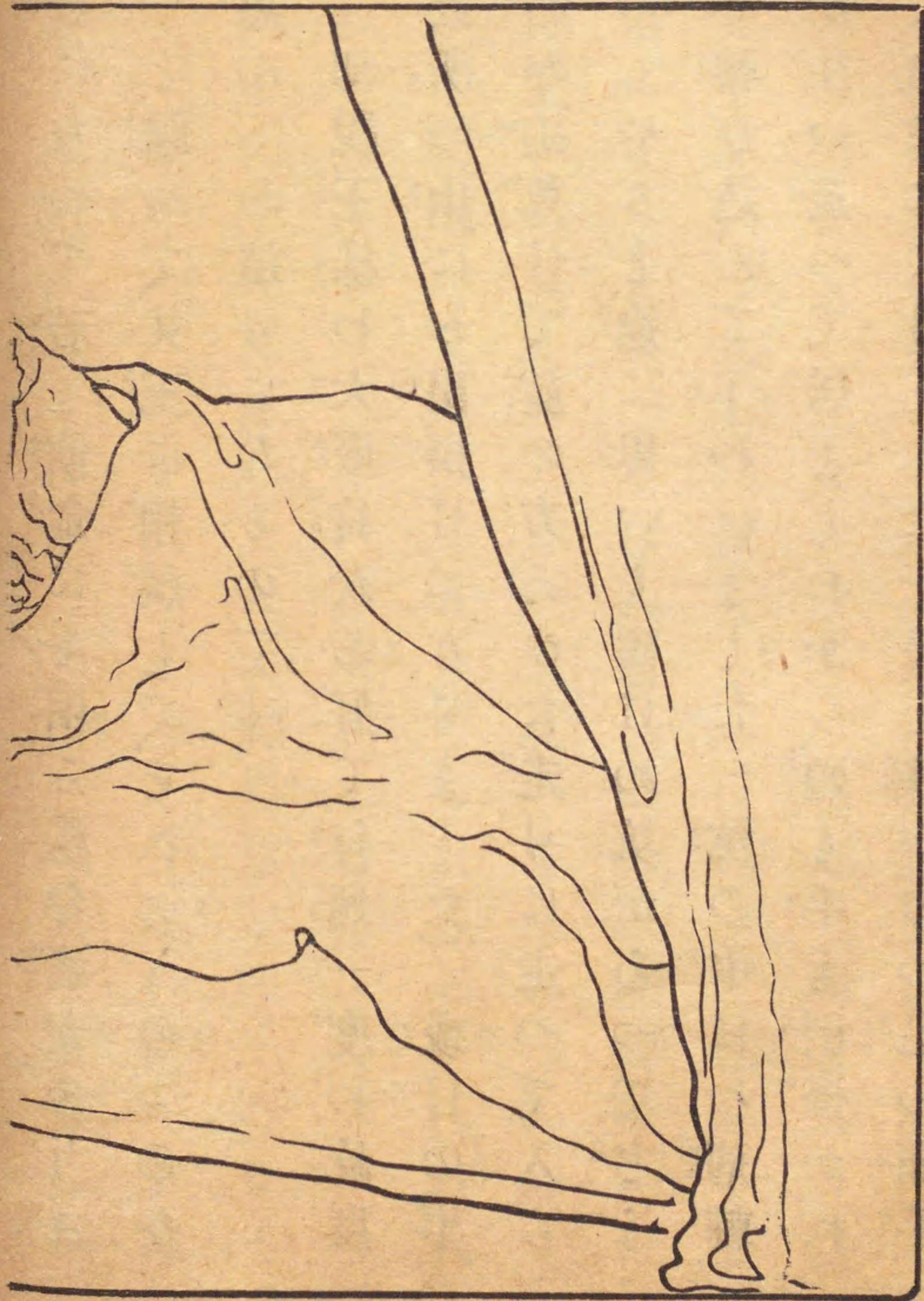
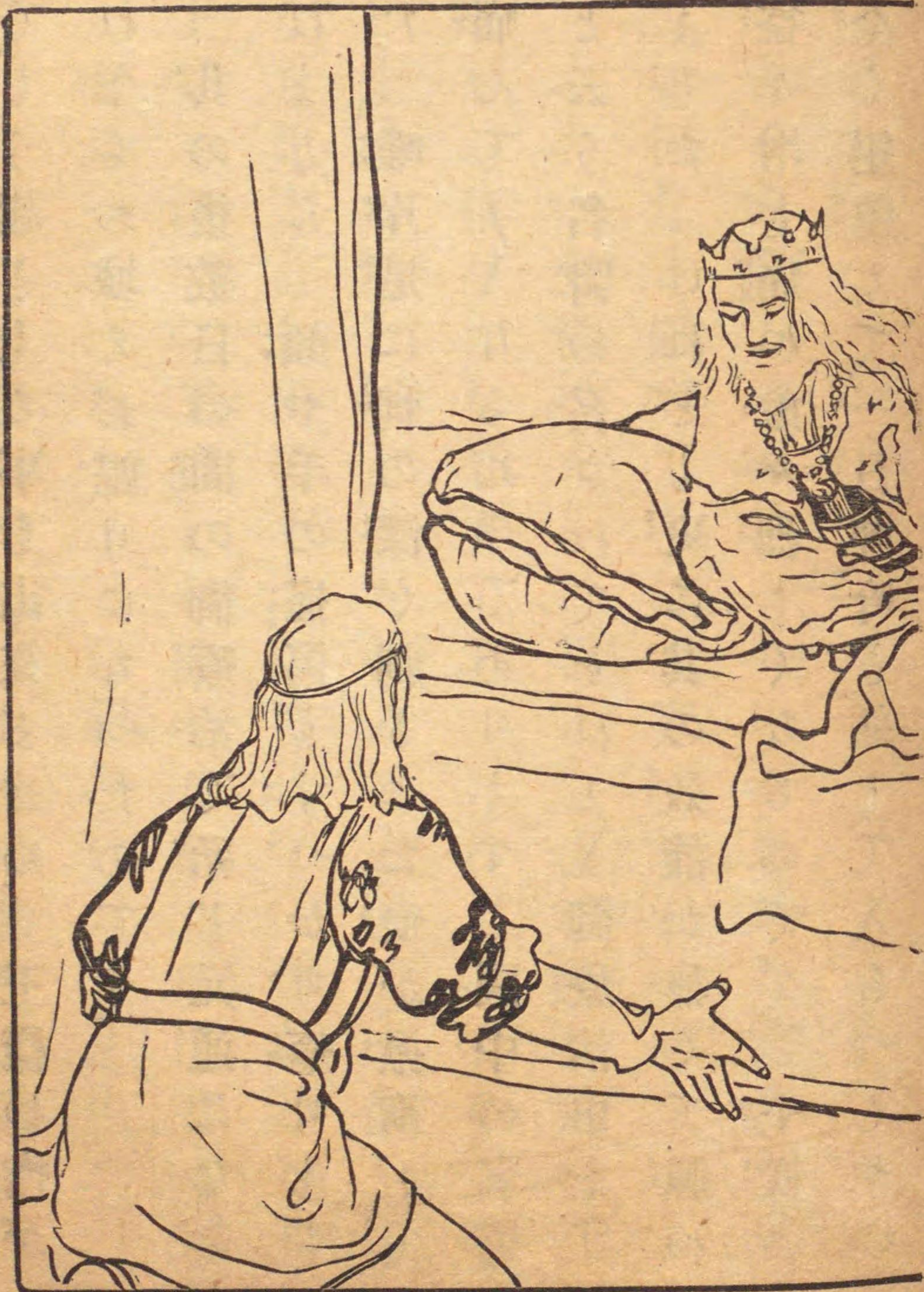
むかしく或所に王様がありました。其の
王様に一人の王女がございましたが、大層綺麗
な優雅しい方で、仇敵でも見てわ笑まずに居
られない程でした。王様わ固より非常な御寵
愛で、王后がおなくなりなすつてからわ、更に愍
然しささえ加わつて、世に并びのない者に思さ
れて居るのであります。
お城の後にわ広い庭があります。末わ遠く

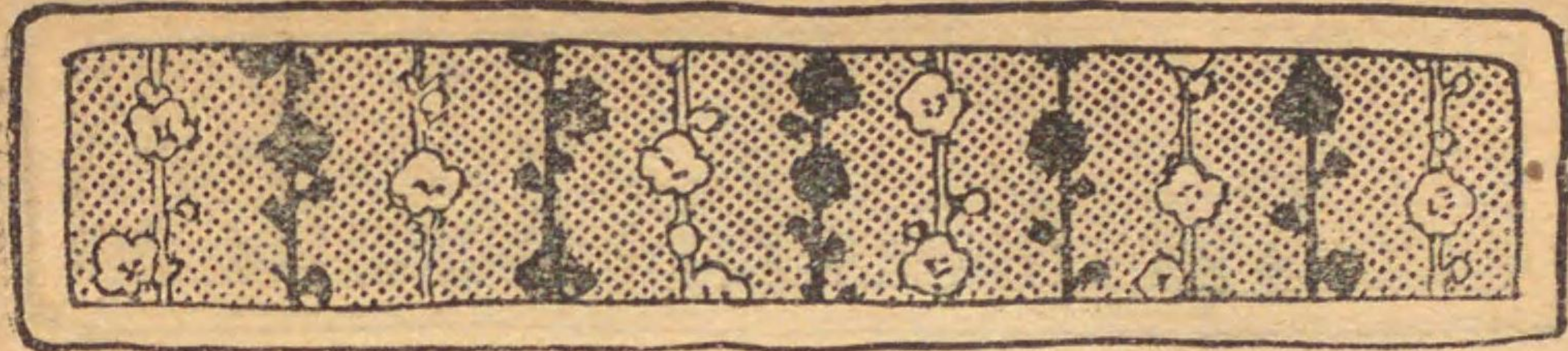


小山の麓に續いて、幾筋かの川が其の中をうね
 つて居ます。王女わ夕方になると、四五人の腰
 元を連れて、此所に入らしつて、色々な花をお集
 めになります。それわ自分のお居間の装飾に
 お使いになるのです。又花の萎んだのわ一々
 鋏で切取つて、持つて入らした籠の中にお入
 れになります。それわ翌朝お日様に美しくな
 いものを見せまいと云ふ御用意なのでありま
 す。夫からそれが濟みますと、今度わ街を御散
 歩になります。そうして下々の者の有様を御



覽になつて、若し飲食にも困る様な者がありま
 すと、歸つて父王に相談して、それぐのものを
 惠んでお遣りになります。す。
 却説王様わ大層狩がお好で、毎週一度わ屹度
 近所の山にお出掛けになりました。或日の事
 猪を追蒐けて、麓の方えひた走りに走つて入ら
 っしやると、途に思いも掛けぬ坑があつて、ど
 うと轉び込んで了われました。坑の中にわ荆棘
 が生い茂つて居ましたから、頭も手も引搔かれ
 て、血塗になりましたが、最も甚いのわ足の痛手





で、もう起き上る事も出来ませぬ。王様わ擔が
れ乍らお城えお歸りになつたのです。

其の後數日の間の御療治で殆ど元通になら

れました。顔や手の搔傷もすつかり癒りまし

た。唯片足に刺の深く刺さつた痕が掀衝して

痛んで／＼ならぬのであります。國中の名醫

と云う名醫わ召されて、それ／＼御療治申上げ

ました。けれども更に其の效能が無くて腫わ

益々増し、痛む愈々烈しくなるのです。王様わ

全く絶望して、一日呻吟き通して入らつしやい

ました。

會々或遠方の國に、一人の不思議な醫者が居

て、如何なる難病でも忽ち癒すと云ふ噂が立ち

ました。王様わ大きに喜んで、直様使を遣つて

之をお招きになりました。けれども其の醫者

わ土地を離れることを好みませんで、『御病氣

なら此方えお出で下さる様に』と御返事を申

上げました。王様わお金わ如何程でも出すか

らと云つて、いろ／＼とお頼みになりました。

それで遂にわ否み切れず、お城に參つて御診察





申上げることを納得致しました。

愈々醫者が着きますと、直様御前に召出され

て、仔細に大御足を診察致しましたが、

『噫、陛下、此のお傷、わ逆も人力で癒せませぬ。

が、此のお痛を止めて御歩行に差支へないま

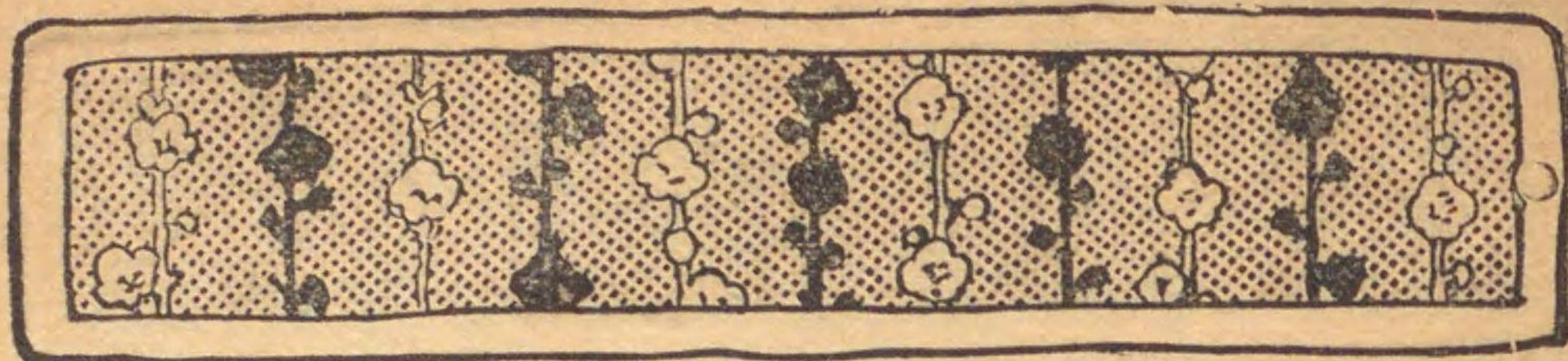
で、にわ致して御覽に入れましょう。』

『いやもう夫が出来れば満足致す。直様療治

に掛つて呉れい。』

『てわ陛下、靴の匠に山羊の皮で緩然した、お穿

心地の善い靴をお作らせなすつて下さい。』



其の間に私わ夫に塗る膏薬を調えまする事
に致しましょう。』

醫者わ斯う云つて御前を退きました。王様

わ嬉しく頼母しく思されて、氣の爲か痛も少し

わ薄らいた様であります。

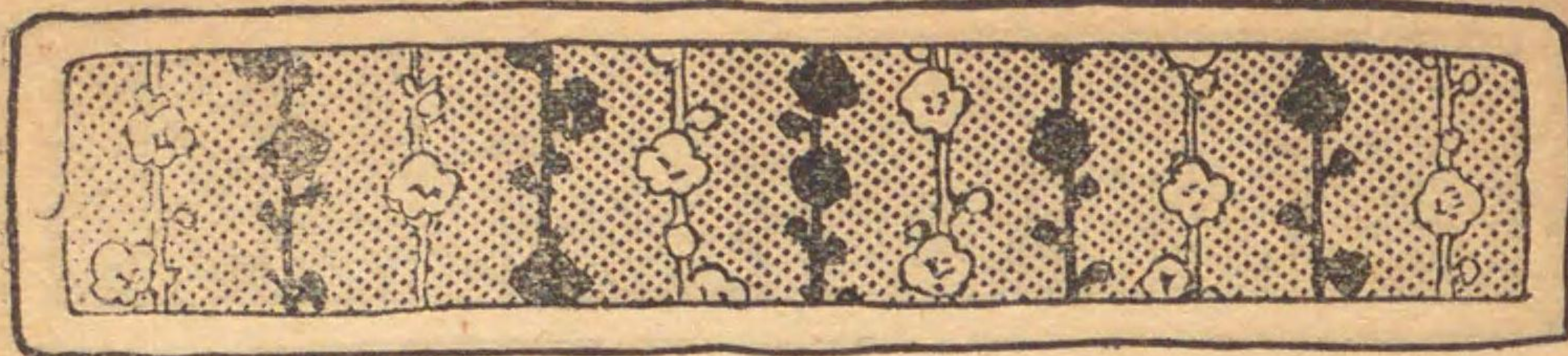
今日か明日かと待つて入らつしやると、丁度

八日目の朝、醫者わ靴のはいつた箱を持つて參

内致しました。そうして夫をお穿かせ申して

見て、注交通に出来て居るのを見ると、調べて來

た膏薬を山羊の皮に塗つて刷毛でこしく磨





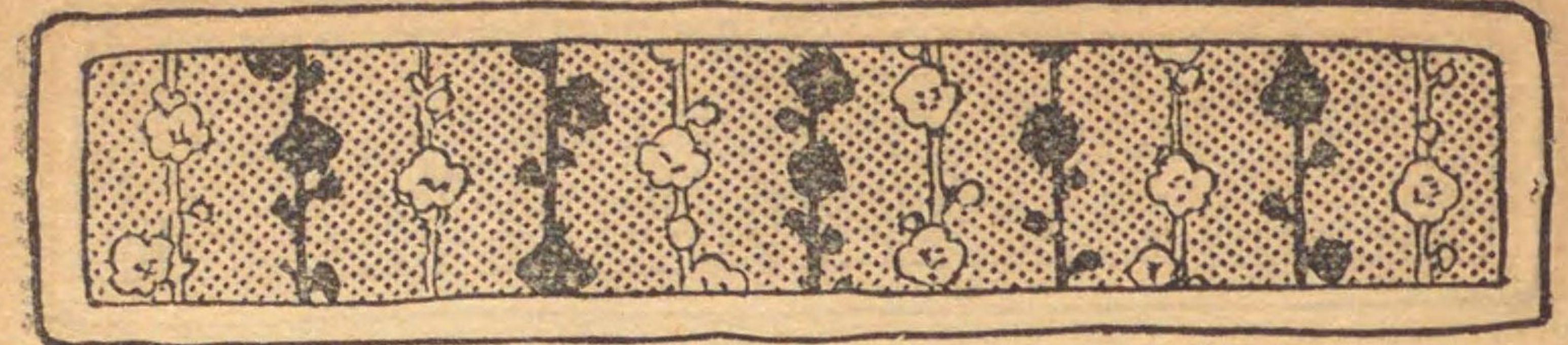
きました。すると皮は忽ち眞白になつて、純銀の様にぴか／＼光を放つのです。

『之をお召しになつて入らつしやる間わ、ちつともお痛みになる様な事わ御座りませぬ。

それに唯今塗りました薬わ塗つた物をも丈夫にする力を持つて居ますから、靴わ千年萬

年の御在世が間、何時も此の通に光つて居まして、破れも崩れも致す事てわ御座りませぬ。』

王様わ先程から早く穿いて見たくてならぬ處です。から、醫者の言葉の終るのも待たず、奪う



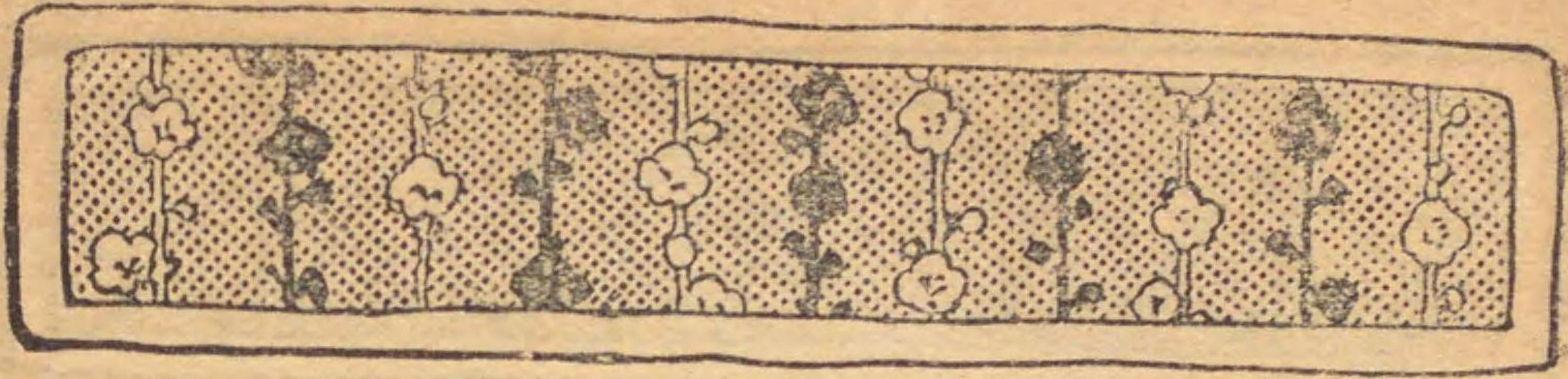
様に靴を取つて、いきなり夫をお穿きになりました。さうして歩けば歩けば走れば走れもされるのを御覽になつたときにわ、嬉しさ餘つて、泣かん許であつたのであります。

王様わ醫者の兩手を取り上げて、

『何を御褒美に遣わしたら善かろう。それより永く城に留つてわ呉れまいか。富や位わ

其方の望に任すであらうか。』

『御思召わ誠に有難う御座りまするが、御約定のお金だけ頂戴致せば、夫で満足仕りまする。』



國にわ病人共が待ちに待つて居ましようか
 ら之から直様立歸り度う御座りまする。
 醫者の心の動し難いを見て王様わ無理に
 お止め立もなさらず大勢の護衛をつけて國ま
 で送り届けてお遣わしになりました。
 夫から二年の間と云うものわ何事も無く經
 つて参りました、日わ定の時より早くも昇らず
 又遅くも入りわしないのでした。處で例年五
 月わ王様の御誕生日に當るのですから王様わ
 何でも王女のお好きな遊をして其の年の其の日

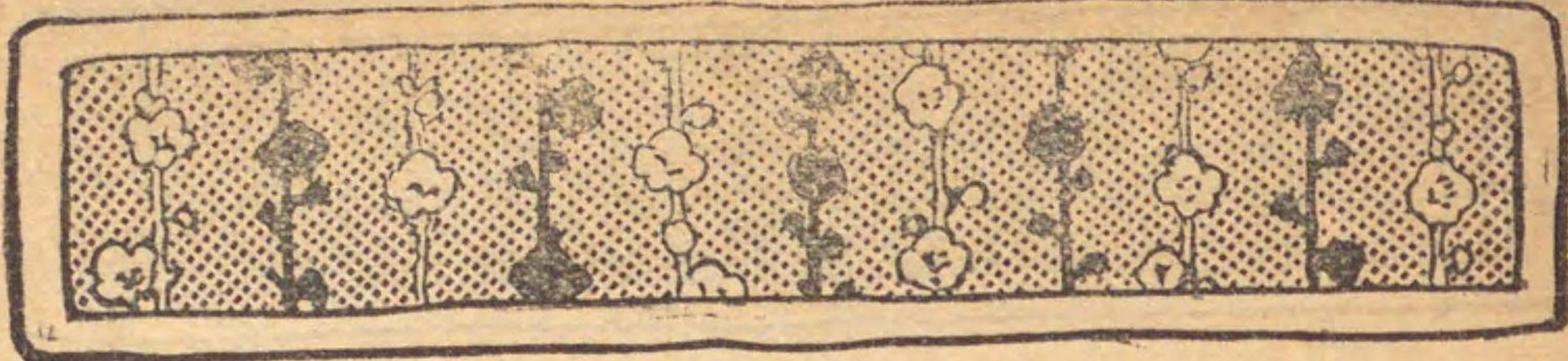


を祝おうと思召して之を王女に御相談なすつ
 たのです。王女わ元來船遊がお好で御座いま
 すから其折に思う様楽しんで見たいと思召され
 ました。で其の日晝の間わ川で過して夕方か
 らわ音楽、舞踊、芝居、花火等、いろんな御催がある
 ことに定りました。又貧乏人にわ麵包をお施
 しになり、其の年の内にお嫁入する娘にわ新し
 い着物をお遣わしになろうと云うのでした。
 愈々其の日が参りました、王女わ夜の明ける
 のを待ち兼ねて、おいでになりましたが氣が張



つて居るので、一寸も落着いてわ居られませぬ。で、腰元を連れて街をお歩になりましたが、煌煌しい其の御装わ誰も手を翳さずにわ望み見る事も出来ませんでした。

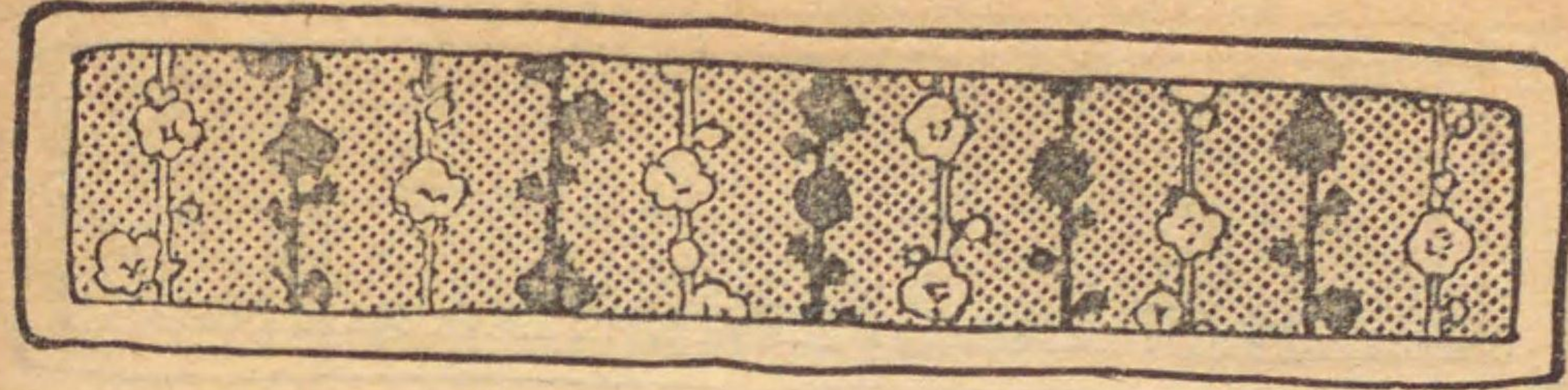
兎角する内に喇叭が響き渡りますと、王女わ急いでお城にお歸りになり、父王様と御一所に川の方え向われました。川にわ飾り立てた舟が用意して御座いますので、お二人わ夫に召して泳ぎくらや漕ぎくらを御覽になり、それが濟むと遙かの上流に溯つて花の野原にお上りに



なり、ましたが、其所でも舞踊や合奏や其の他に、ろんな賑が御座いました。

野原の遊も濟みますと、褒賞授與式が行われました。又王女わ麵麥や着物を貧乏な者や若い娘どもに夫々分けてお遣りになりました。

そうして父王と再び舟にお召しになりました。此の時です、誠に恐しい事が起りました。と云うのわ王様が川岸から舟に飛んでお下りになると、片方の靴が舟板の釘に引懸つて、ぱつたりお倒れになつた、『あ痛』と起き上り様に足を



お振りになると、靴くつを脱ぬげてとんぼり川かの中に
落おちたのです。王様おうさまわ物もの狂くるしくお叫さけびになり
ます。

王女おうじよを始め家來けらい共どもわ王様おうさまの靴くつの落おちたこと
にわ小すこしも氣きが着つかないのですから、

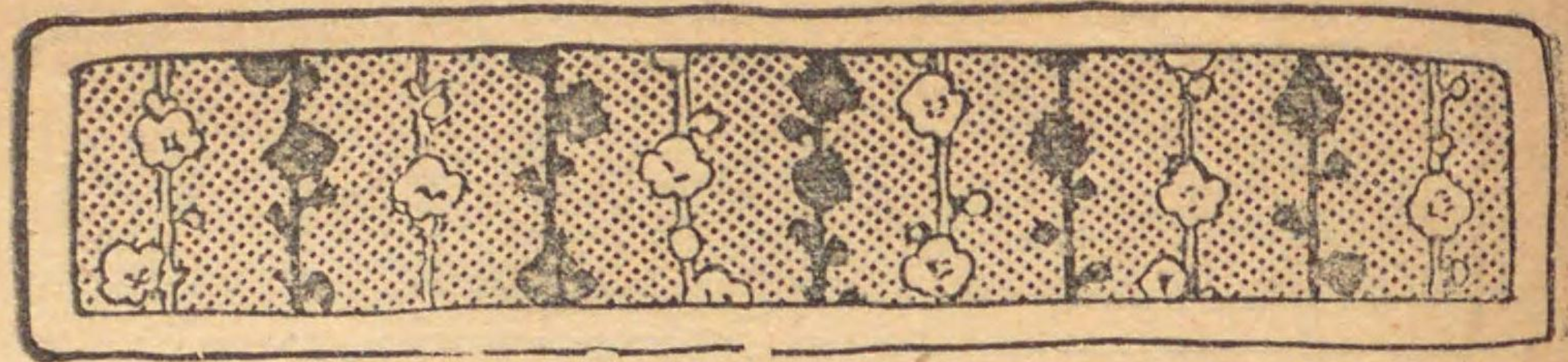
『父王様おとうさま、何なにうなさいました。』

『吾君様わがきみさま如何いか遊あそばしました。』

と寄よつて集たつて尋たずねます。けれども王様おうさまわ

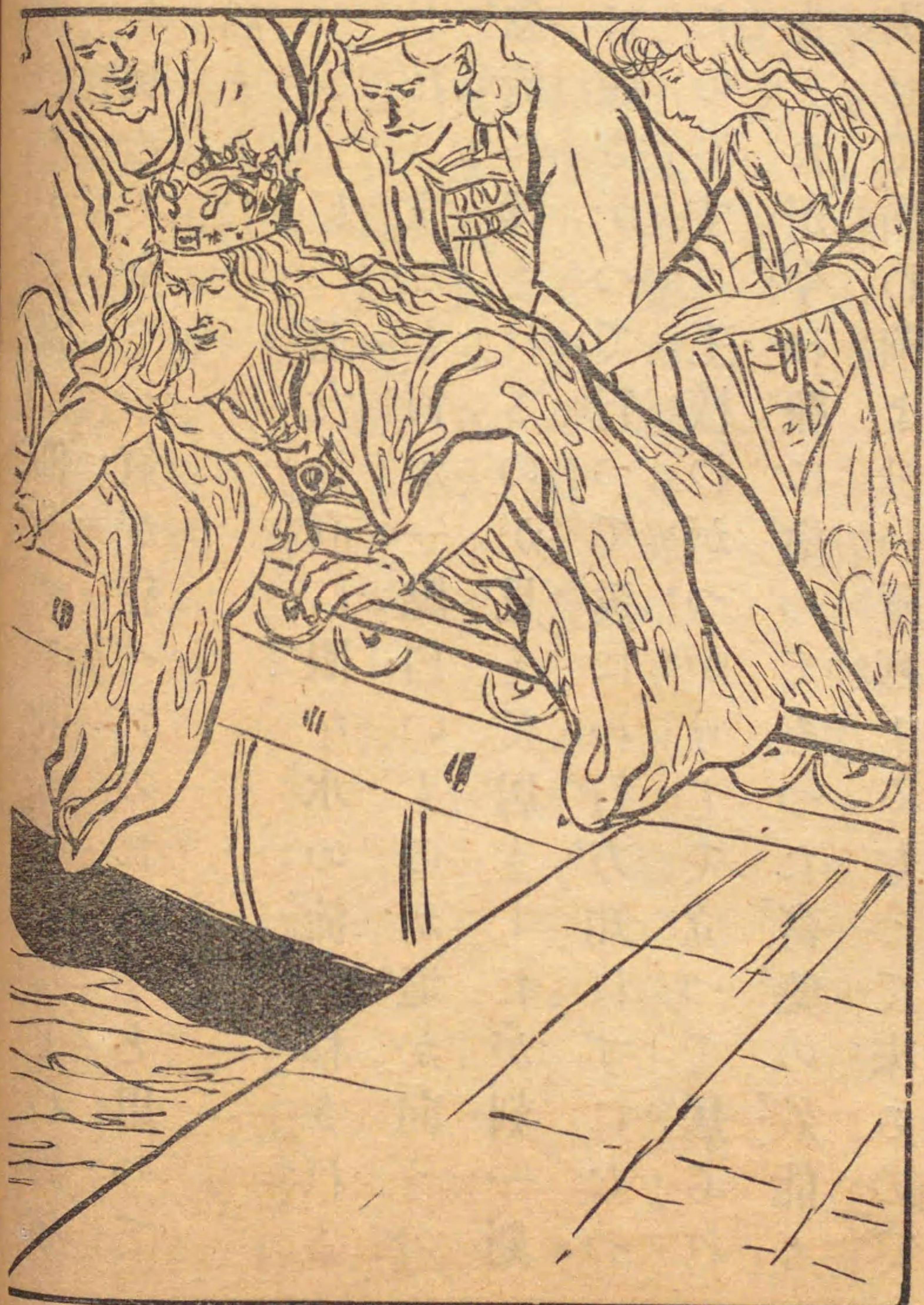
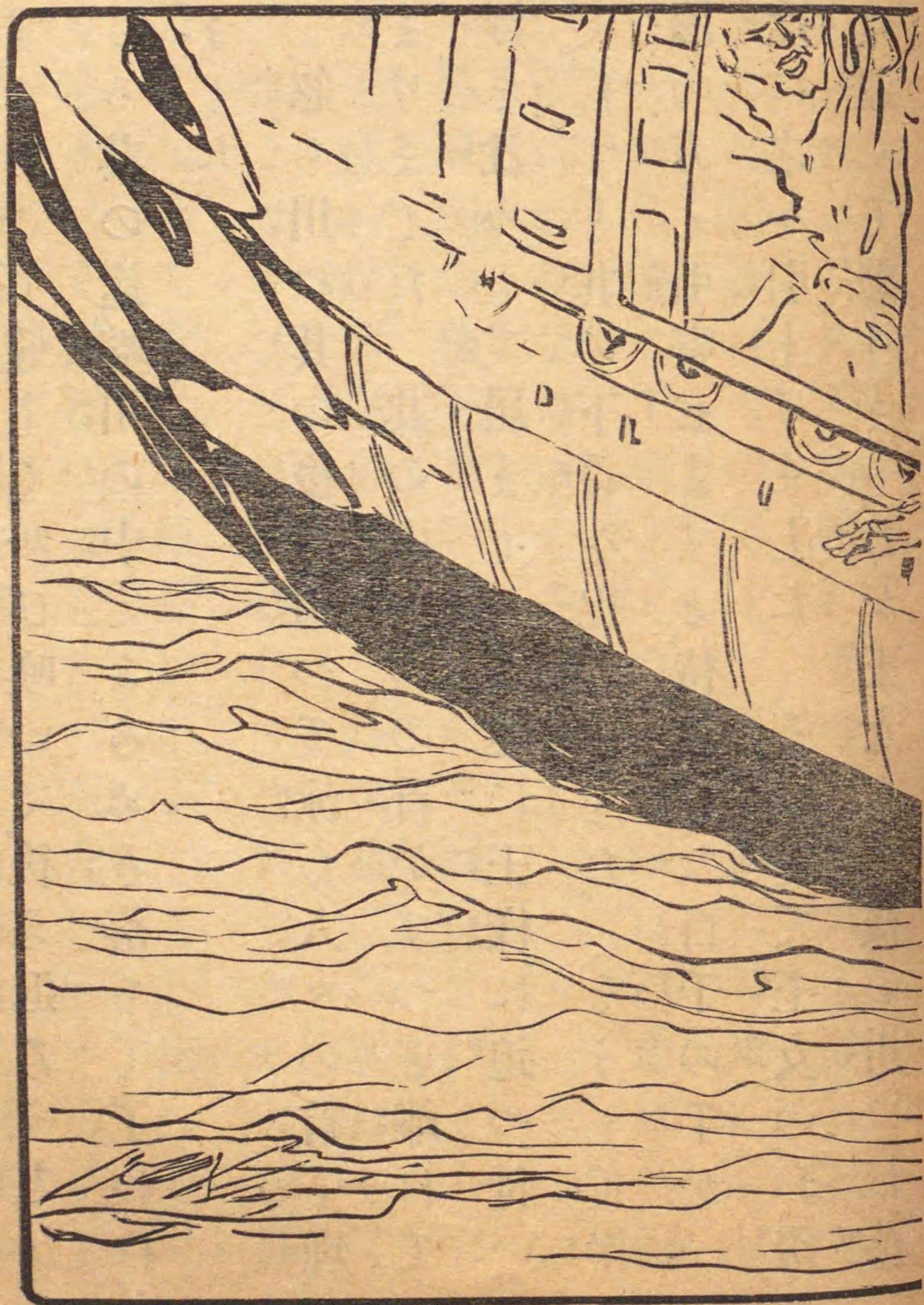
きつと川かの流ながれを見詰みめ乍なら、

『靴くつがく。あれく、靴くつが。』



とおろく聲こゑに仰おつしやる計はかり。舟人ふねびとなどわ御顔おんかほ
を眺ながめて、全まったくお氣きが狂くるつたのだらうと思おもつて
居いました。

さすがに王女おうじよわ直ただちに眼めを水みづの流ながれに移うつされま
した。すると、何なにか一いつ點てん白しろいものが遙はるか向むかうの
急流きゅうりゅうに揉もまれるのが見みえて居いましたが、刻とき一刻こく
に遠とざかつて行いつて、遂ついにわ行方ゆくえ知しれずになつ
たのです。王様おうさまわがつかりして立たつて居いられ
ました。が、今いまわ靴くつに塗ぬつてあつた膏藥こうやくの效き能めも
失うせて、痛いたわ前まえより一層いっそう烈はげしくなつて來くるので





す。そこで遽しく叫び喚いて、後え退ろうとな
 さる其の途端川の中えよるめき落ちて了われ
 ました。

忽ち川わ其の後を追つて泳ぐ人々の首で埋
 まりました。其の中一つの首がずつと離れて
 浮き沈みして居ましたが、遂に王様に追つ付い
 て、むずと其の下着を捉えました。そうして岸
 邊の方え引寄せますと、待設けた百千の手が一
 度に之を引上げました。そうして王女のお傍
 に運んで参りましたが、王女わ王様の川にお落



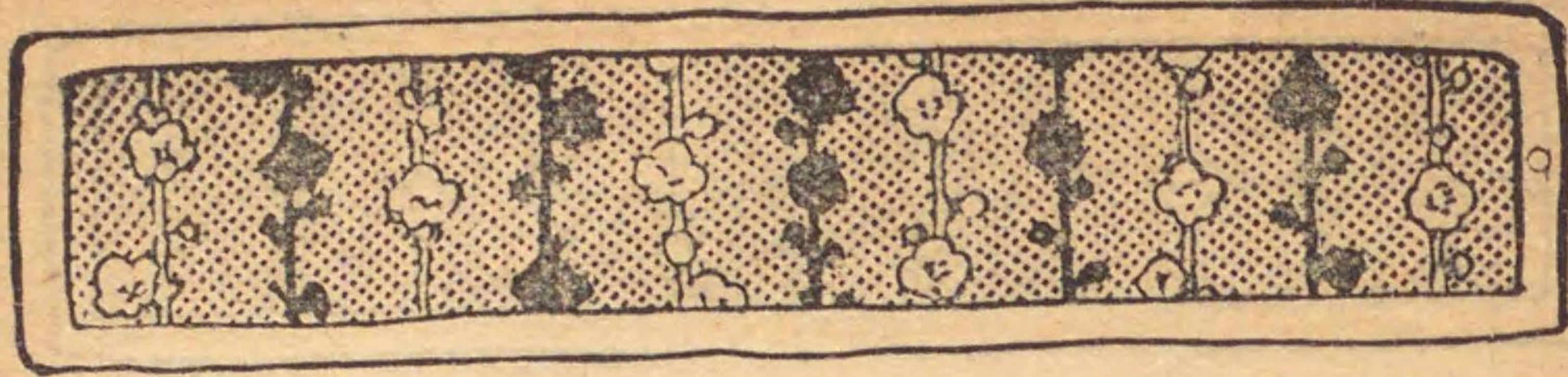
ちになつたのを御覽になつて、慄ろしさに氣を
 失つて居られるのです。で、一所にお車に載せ
 てお城に歸つて來ました。お城にわ市の名醫
 が既にお待受け申して居ました。

數時間の後、王女わすつかり回復されました
 が、王様わ足の痛むと云う外に、水にお濡れなす
 ったことや、ひどく驚駭なすつたことなどが原
 因になつて、常ならぬ熱が、出まして、お床に着い
 て唸されて居られました。王女わ悲しみの爲
 に氣も動亂して、川上川下隈なく探して、王様の



白靴を見付けよと云うお布令をお出しになり
 ました。けれども此の國一と云われる潜水夫
 でさえ、それらしいものも見付ける事が出来ま
 せんでした。

斯う云う譯で靴わ海に流れ込んだに違いな
 いと云うことになりました。王女わ兎や角と
 思案された末、使者を例の遠國の醫者の所へ遣
 つて、前と同じ靴を出來るだけ早く調べて呉れ
 る様に御依頼になりました。處が間の悪い時
 わ何處までも悪いもので、醫者わ既に亡くなつ



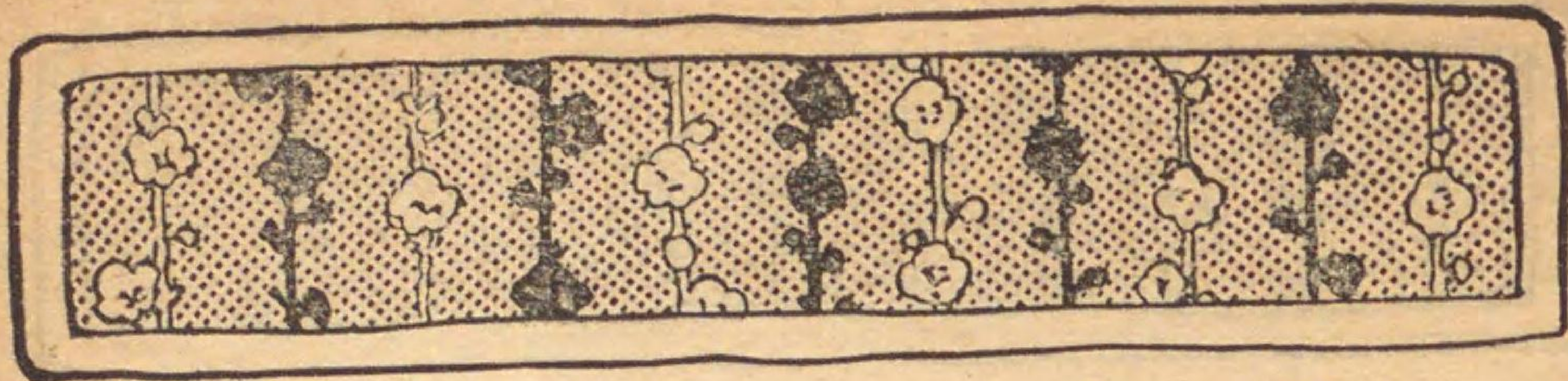
て居ました。使者わ此の悲い報知を齎して、す
 ごすご歸つて參りました。

王様わ今わ全く失望されて、三度の御食事も
 形ばかり終日終夜呻り通して入らつしやいま
 した、一つわ患部の痛さに、一つわ彼の醫者の來
 た時、代りの靴を作らせて置かなかつた悔しさ
 に。併し幾ら泣いても悔んでも返らぬ事です
 から、王様わ更に細かく靴の搜索を行ふ様に仰
 出されました。

夫から川岸わ毎日人の山を築いて、國中の人



民が悉く此所に集つたかの様に見えました。
 けれども此の二回目の搜索もとうく無駄骨
 に終りました。王様わ怵え切れず遂に斯う云
 うお布令をお出しになつたのです。
 『流失せる白靴を發見したらん者わ之を王世
 子とし、吾が王女と結婚せさすべし。』
 申す迄もなく川岸にわ一層人が群りました。
 と云うのわ番に此の國の人ばかりでなく、王女
 のお婿様になろうと云う希望をかけて、遠い國
 からも續々とやつて參つたからで。人々わ幾



度か川底から白い光る石を拾い上げました。
 併し白い光る靴わ何うしても拾い上げる事が
 出来ませんでした。夕方方にわ皆濡れて項垂れて家路
 え向いました。尤もたつた一人の若者わ何時
 も後に残つて着物わ濡れて膚に引着き、齒わが
 たがた震うのに、尙お孜孜と搜索を續けて居る
 のでした。
 或日の事です。王様が痛さに悶え乍ら寢床に
 休んで入らつしやると、應接室で誰か諍い罵る
 様な聲がします。何事だらうとお傍にある金



鈴をお振りになりますと、一人の侍が入つて來
ました。

『今の騒わ何事じや。』

『唯今一人の若者が参りまして、陛下の大御足の
寸法を計りたい。すればお失くし遊ばし
た靴の代りをお作り申して差上げようと申
しますので。』

『ふむ、して其方達わ如何致した。』

『虚偽を申立て、推参致しました不都合を責
めまして、城外え追つ拂いましたので。』

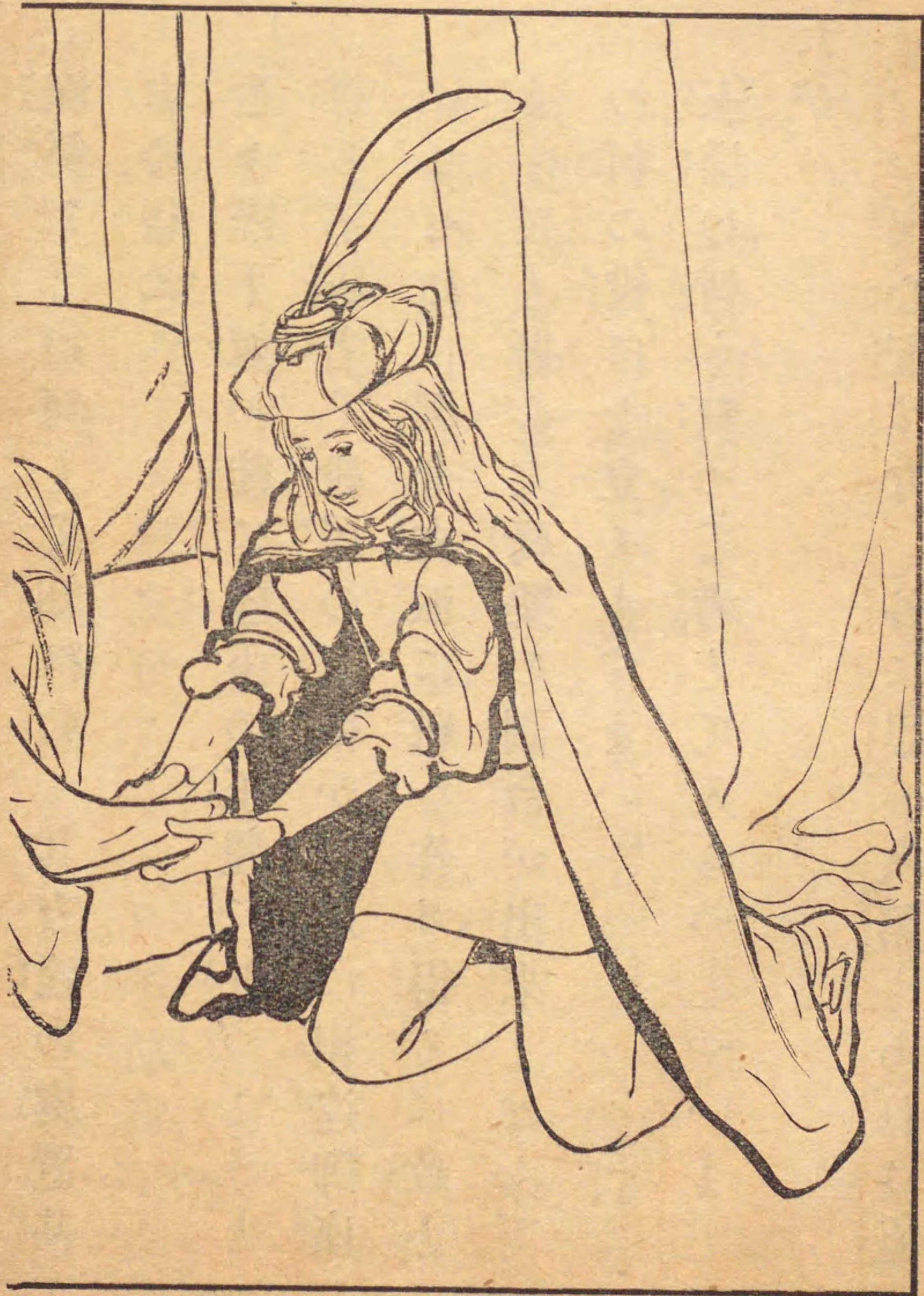
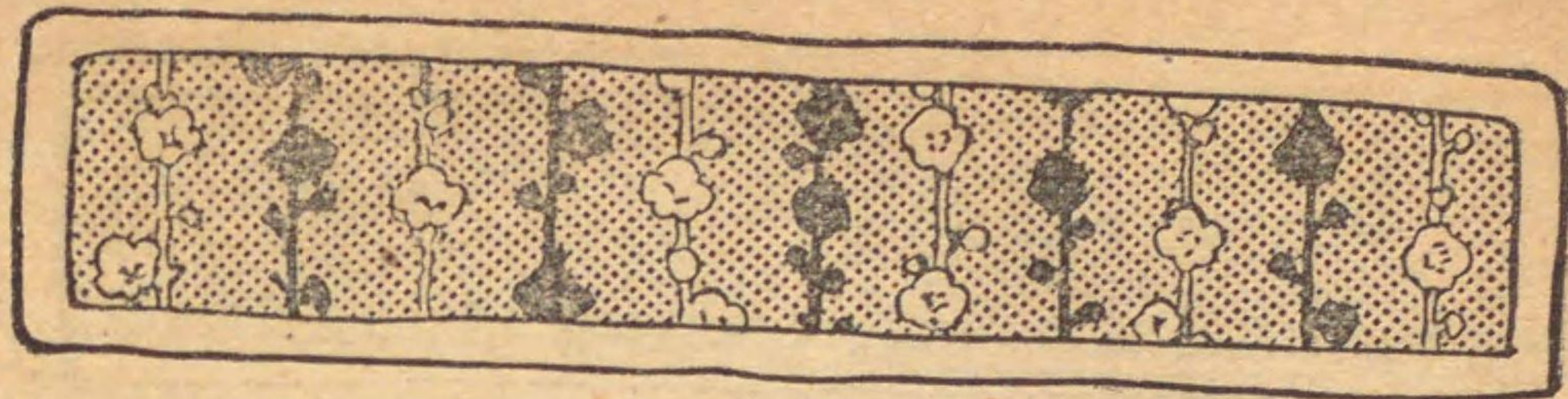
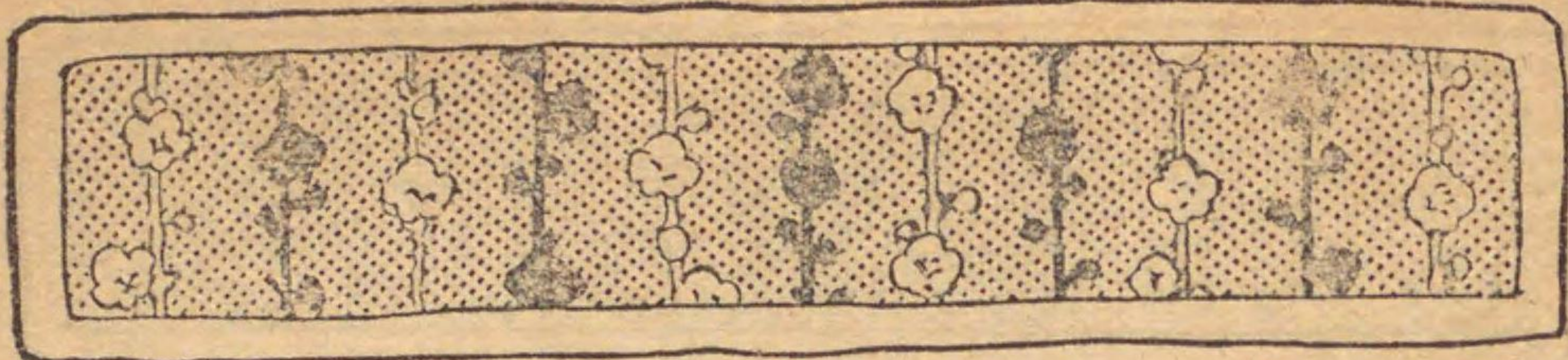


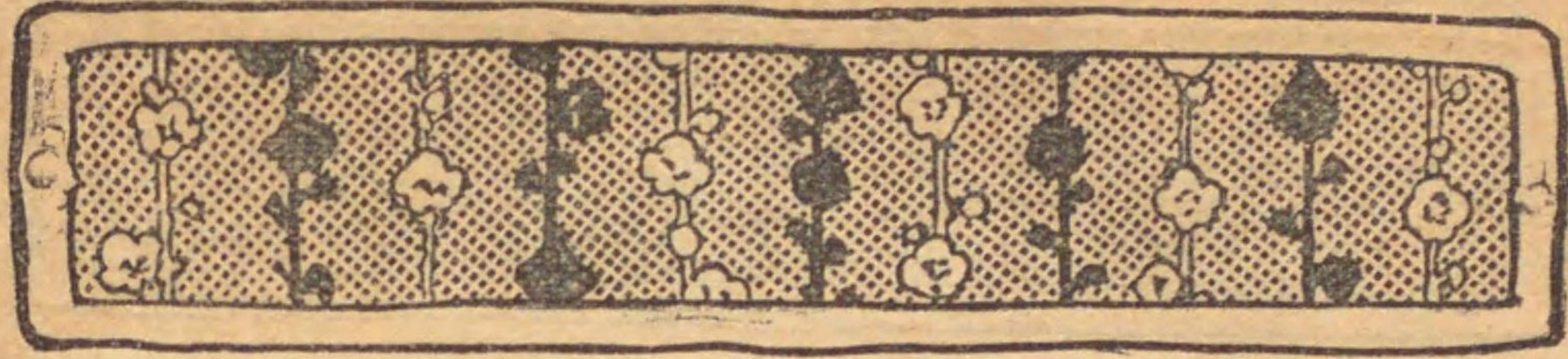
『虚偽だとわ何して知れた。其方達の處置甚
だ心得ぬ。』

『否々陛下、奴わ徒に陛下の玉體に近づこうと
謀る不届者で、靴屋の丁稚か何かに相違御座
いませぬ。例令立派に靴を作り得るに致し
まして、肝心な膏藥の調合が出来ませんで
わ何の役にも立ちますまい。』

王様わ暫く黙つて考えて入らつしやいまし
たが、

『いや、何心配すな。外に思う次第もあれば直

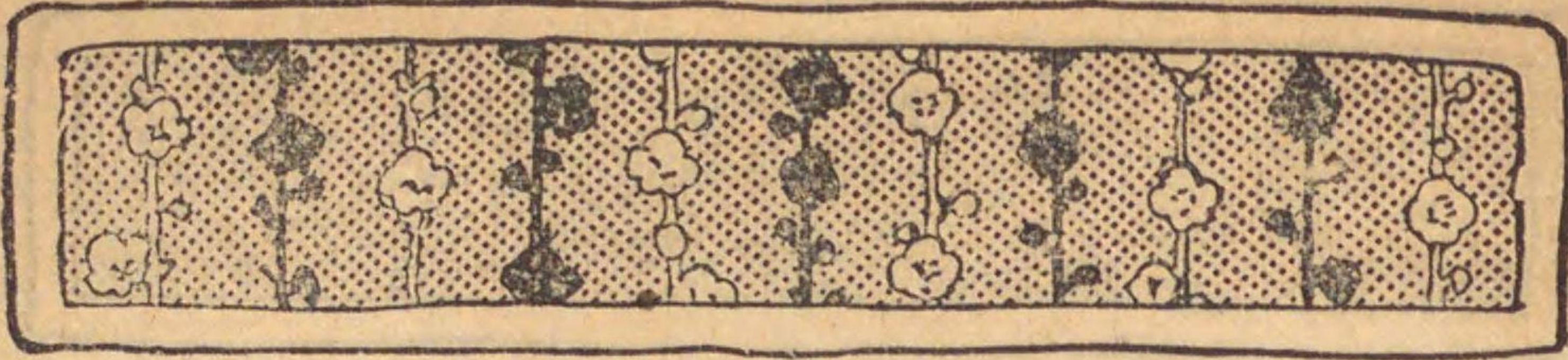




様若者を連れ返せ。

若者わまだ遠くも行つて居ませんでしたから侍わ直に之に追着く事が出来まして、やがて王様の御前に連れて参りました。

若者わ脊の高い立派な男でありまして、動作振舞も至つてつづまやかで、普通の市井の者の様にも御座いませぬ。そしてそれが願と云うのわ、唯王様の大御足の寸法を計りたいと云うばかりでわなくて、又其のお傷に膏薬を貼るお許を得たいと云うのでした。



王様わ熟々と其の様子を御覽になつて、如何にも頼母しそうに思召し、お悪い方の大御足を若者の前えお延しになりました。若者わ仔細に夫を拜診致しまして、靜に膏薬を貼りました。すると流石の痛もだんく無くなつて参ります。王様わ益々御信用なすつて、其の名を訊きになりました。

『私わ親なしの頼ない者で、別に名と云うものも御座いませぬが、私の幼ない時其の日の方便に街を歌つて歩きましたので、人わりネッ



ト(紅雀)だと申して居りまする。』

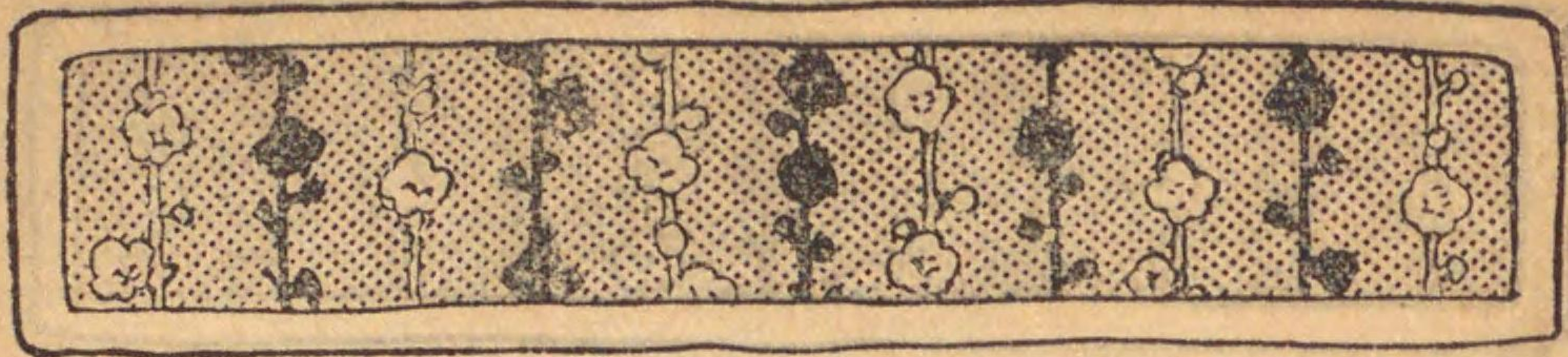
『して、其方々眞實私の傷が癒せると思ふのか。』
仰の通に御座ります。』

『それに幾日計掛るぞ。』

『容易ならぬ仕事でわ御座りまするが二週間も掛りましたならば。』

『一つの靴を作るに二週間とわ決して短くないと思われました。』
が、王様わ別にそうとも仰しやらず、

『何か入用なものわないか。』



『出来まする事なれば良馬を一匹拜借致しと
う御座りまする。』

意外の答に侍共わ顔見合せて微笑みました。
けれども王様わ頗る眞面目で、

『宜しい、曳いて行け。二週間の内にわ屹度歸
つて參れよ。若し約束通成就したならば褒
美わ望の儘に得さす。だが萬一失敗致した
らば、朕わ朕を欺いた罰として、重い仕置に行
うぞよ。』

リネットわ丁寧にお辭儀をして其の場を退



きました。後から侍共ざむらいども頻しきりに嘲弄ちやうろう致しますが、
 リネットリネットトわ振返ふりかえつて見も致いたしませぬ。
 城門じやうもんの外ほかに出でますと、其所そこに如何いかにも遅たしま
 うな馬うまが已すでに曳ひき出だしてありました。リネット
 トわひらりと跨またがり一鞭ひとむち呉くれて、呆氣あつげに取とられた
 侍共ざむらいどもを後あとに、何所どこともなく駈かけ去さりました。
 扱さつ、此所ここで私わたくしわ一通ひとつリネットの素性すじやうをお話はなし
 しなければなりません。リネットトわ六歳むつさいの時とき
 父ちちと母ははとに別わかれて、其その頃ころ化学がくの研究けんきゆうをして居い
 た伯父おぢの厄介やくかいになりました。そうして伯父おぢが



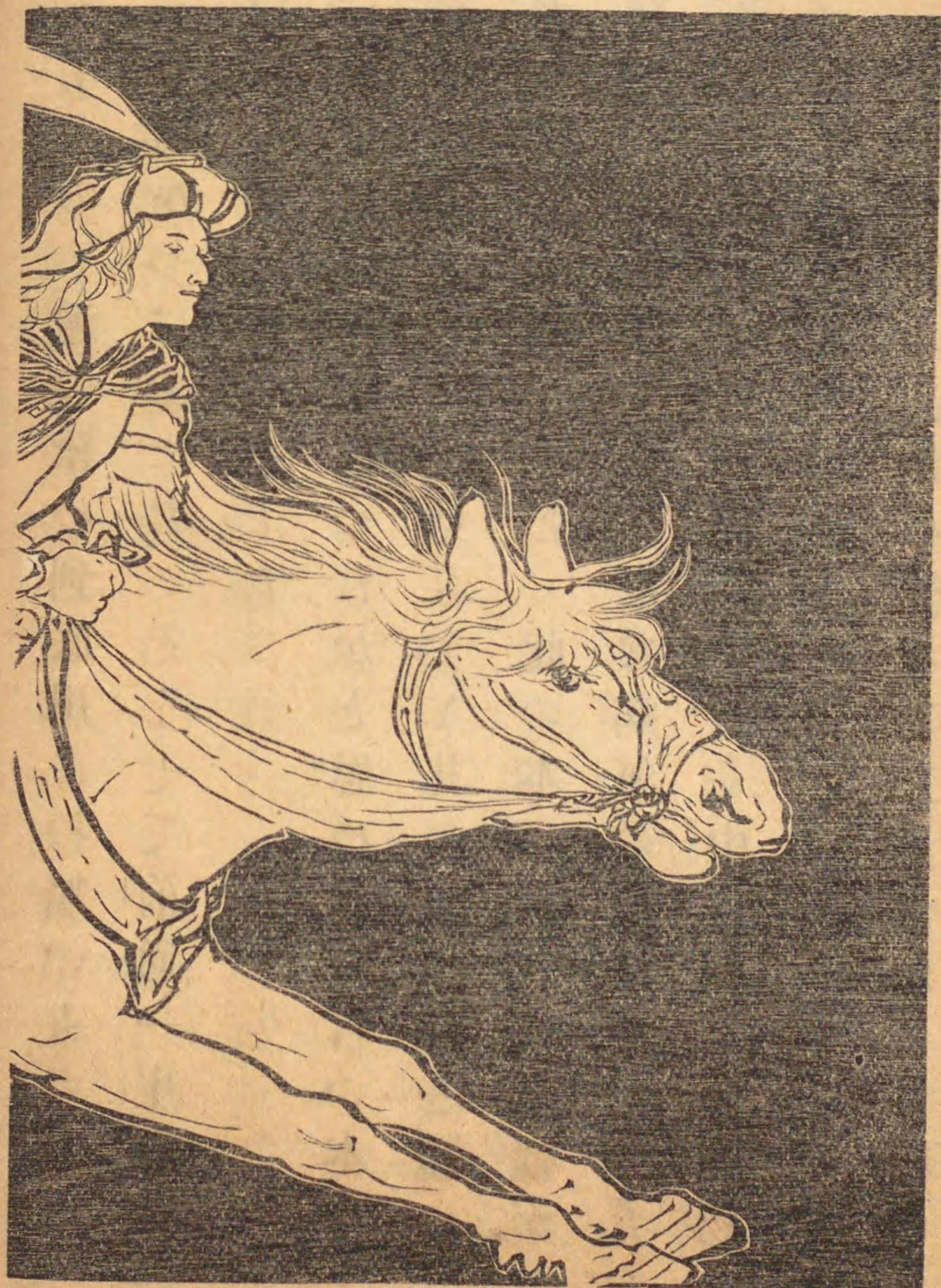
死しんだ後のちわ、或役所あるやくしょに入いり込こんで、今尙いま其その勤つとめ
 を勵はげみ、他ほかの子供こどもの遊あそぶ隙ひまにわ、いつも一室いつしつに閉と
 じ籠こもつて、一生しじゆう懸命けんめいに本ほんを讀よんで居いるのです。
 それで人々ひとびとわこれを變かり者ものだと申もうして居いまし
 たので、今いまし方かた王様やうさまの大御足おほみあしを癒なすお約束やくそくをし
 て、馬うまに乗のつて何所どこえか行いつたと云いう事ことを聞きく
 と共にとも、嘲笑あざわらひの聲こゑわ町まちから町まちえ鳴なり響ひびいたので
 す。併しかし人々ひとびとわまだリネットの底意そこいを知しりま
 せぬ。之これを知しると、もつとく嘲あざわらり笑わらつたかも
 知しれませぬ。

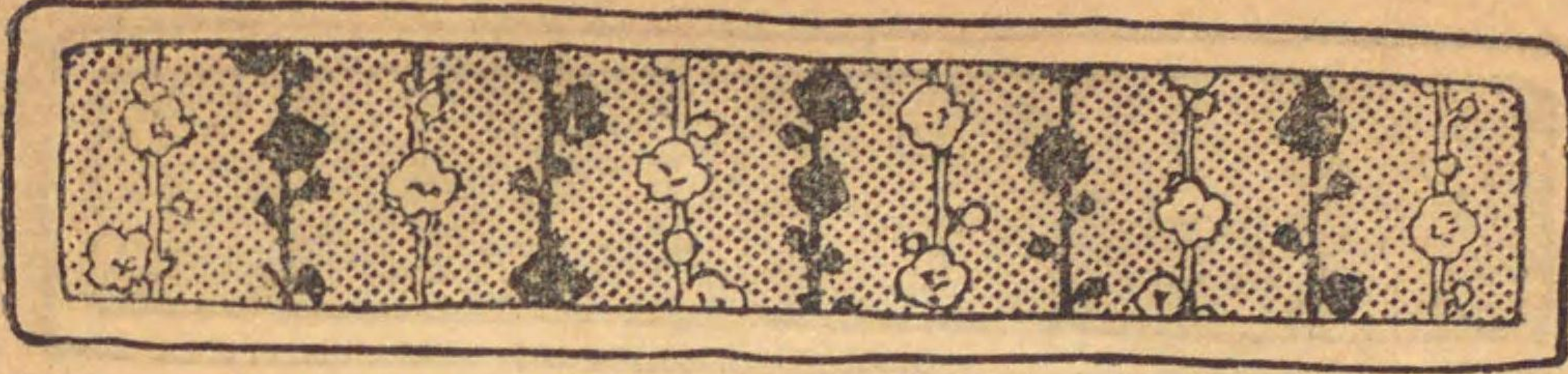


實を申せば斯うです。王様の御誕生日の朝、リ
 ネットわ王女が街をお通りになつて居るのを
 窓から見ても如何にも懐しく思つたのです。併
 し藥劑師風情の甥が王女のお婿様になれる筈
 のものでもありませんから、思い切ろうと力め
 て居ました。處え、例の王様のお布令が出ました
 ので、急に勢を得まして、夫からと云うものわ役
 所が引けると直に川端に出まして、川底の光る
 ものを追つて探し廻つたのです。けれども拾
 い上げる物皆が白い石か硝子の破片かに變つ



て了うので、遂に靴わ到底川にわ無いものだと
 云う諦をつけました。そうして前通一生懸命
 に本を讀み續けました。
 或日幾百年も経つたかと思われる古い本を
 讀んで居ましたが、見る／＼其の目わ輝き、體わ
 力に満ちて來ました。此の本わ大昔或老媪が
 發明したと云ういろんな病氣の療法を書いた
 ものでありますが、讀んで行く中に種々の腫物
 や傷を癒す油劑のことが書いてあつたのです。
 そうして其の油劑わ徒歩で二月もかゝる程の

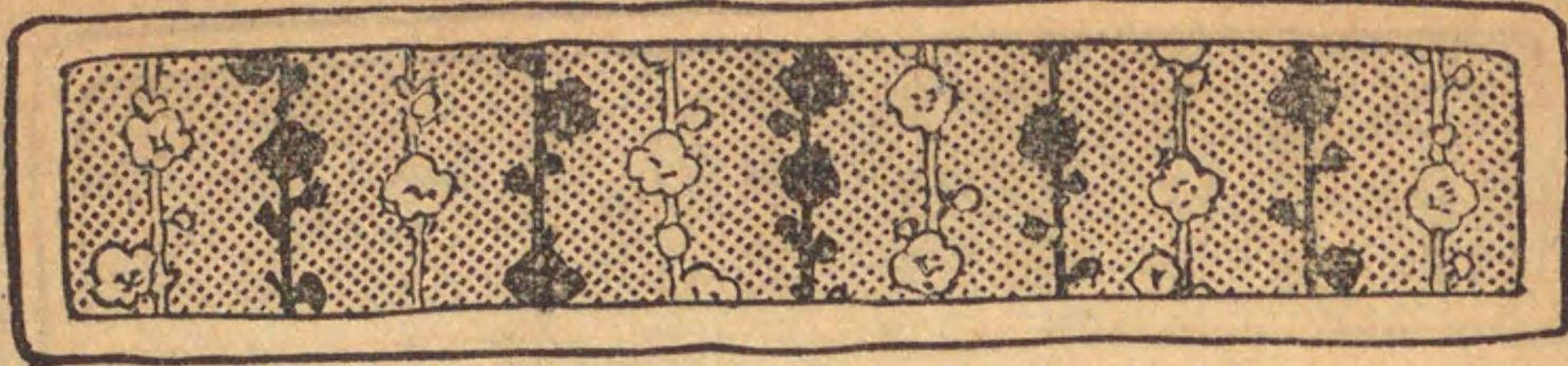




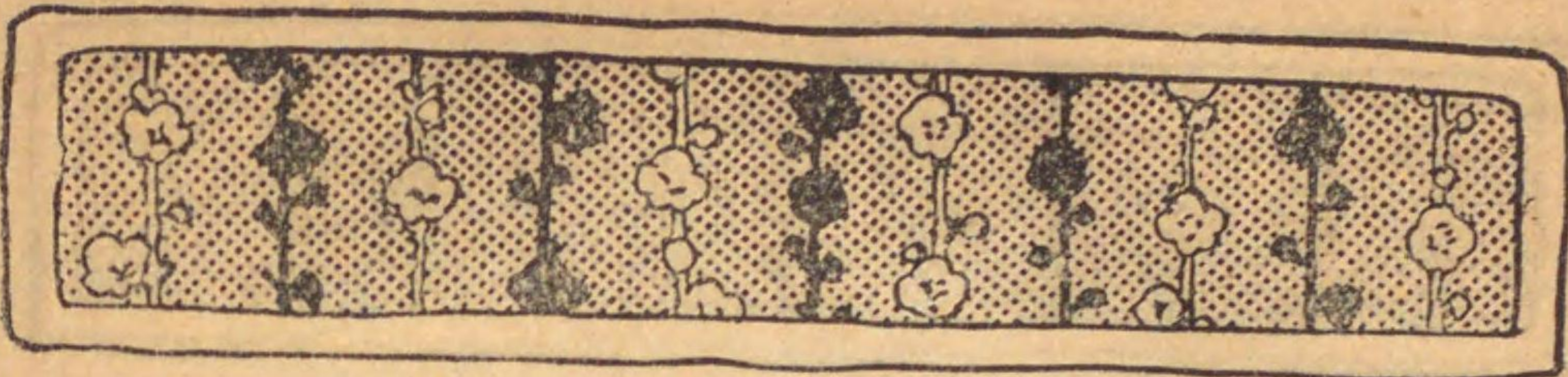
遠い國に生えて居る或草の汁を蒸餾して調えるのだと云うのです。

尤も傷の徴候に依つてわ此の薬の利かないこともあると云う事が書き添えて御座いますから、それで其の仕事に取懸る前に先ず王様の大御足を拜見したいと申し出たのです。けれども拜見したところ更に悪い徴候もありませぬので、もう王女のお婿様になつた心地で躍り上る計に喜んだのであります。

リネットわ頻に馬を急がせましたが、六日経



つて、漸つと目的地に着く事が出来ました。そこわ深い森林でございました。リネットわ馬を繋いで、あちらこちらと薬草を探して歩きましたが、更にそれらしい草わ御座いませぬ。併し尙撓まずに探して居ましたが、日わ將に西山に落ちて了いそうであります。今日中に探さなければ約束の日限に歸ることが出来ませぬのですから、もう氣が氣でわ御座いませぬ。ふと足下を見ますと、自分わ何日しか生い擴つた薬草の中に立つて居ました。リネットわ嬉し



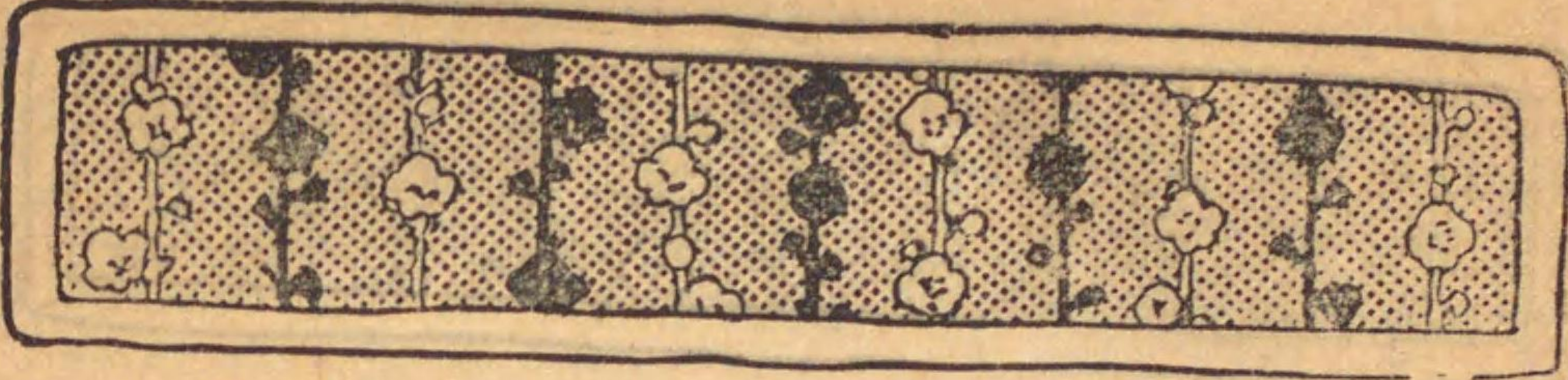
さに震え上つて、手當り次第に摘み取つて、夫を旅行鞆の中に入れました。そうして馬に飛び乗つて都を指して駈けさせました。

リネットが都の城門にはいりましたのわ二度二週間目の夜でした。目わ眠くて明けても居れず體わたるくて、立つても居れぬ程でした。が、強いて我慢をして竈に火を點け藥罐に水が満し、夫に藥草を投げ込みました。そうして横になつてぐうぐう、寝込んで了つたのです。翌くる朝目を覺して見ますと日わもう高く



昇つて居ました。匆ね起きて藥罐を覗いて見ますと、藥草わ既に形もなくなつて居て、底に濃いどろくした液體が出来て居ります。リネットわ之を匙ですくつて、水晶の小さい瓶の中に入れてみました。そうして次にわお湯にはいつて、一番善い着物を着て、瓶をポケットに入れて、お城え參内致しました。

王様わりネットの歸つて來るのを指折り數えて待つて居られましたが、今其が參内したと聞いて、直様御前にお通しになりました。そう



してやから身を起して御覽になりましたが、リ
 ネットが更に靴らしいものも持つて居ませぬ
 ので、

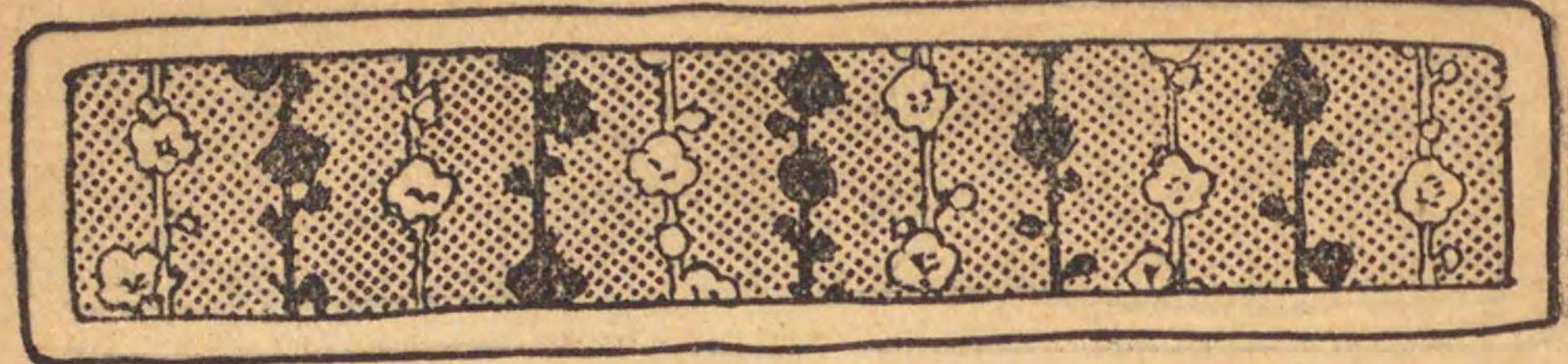
「靴わ出来なかつたのか。」

と、力無さそうに訊かれました。

「靴わ出来ませぬ。けれども御安心遊ばせ、私
 わ傷の根治薬を調べて参りました。」

斯う云つて王様の大御足のお出しを願て、一
 二滴其の傷口に垂らしました。

「かうして三夜遣つて御覽遊ばせ。痛わすつ



かり取れてしまします。」

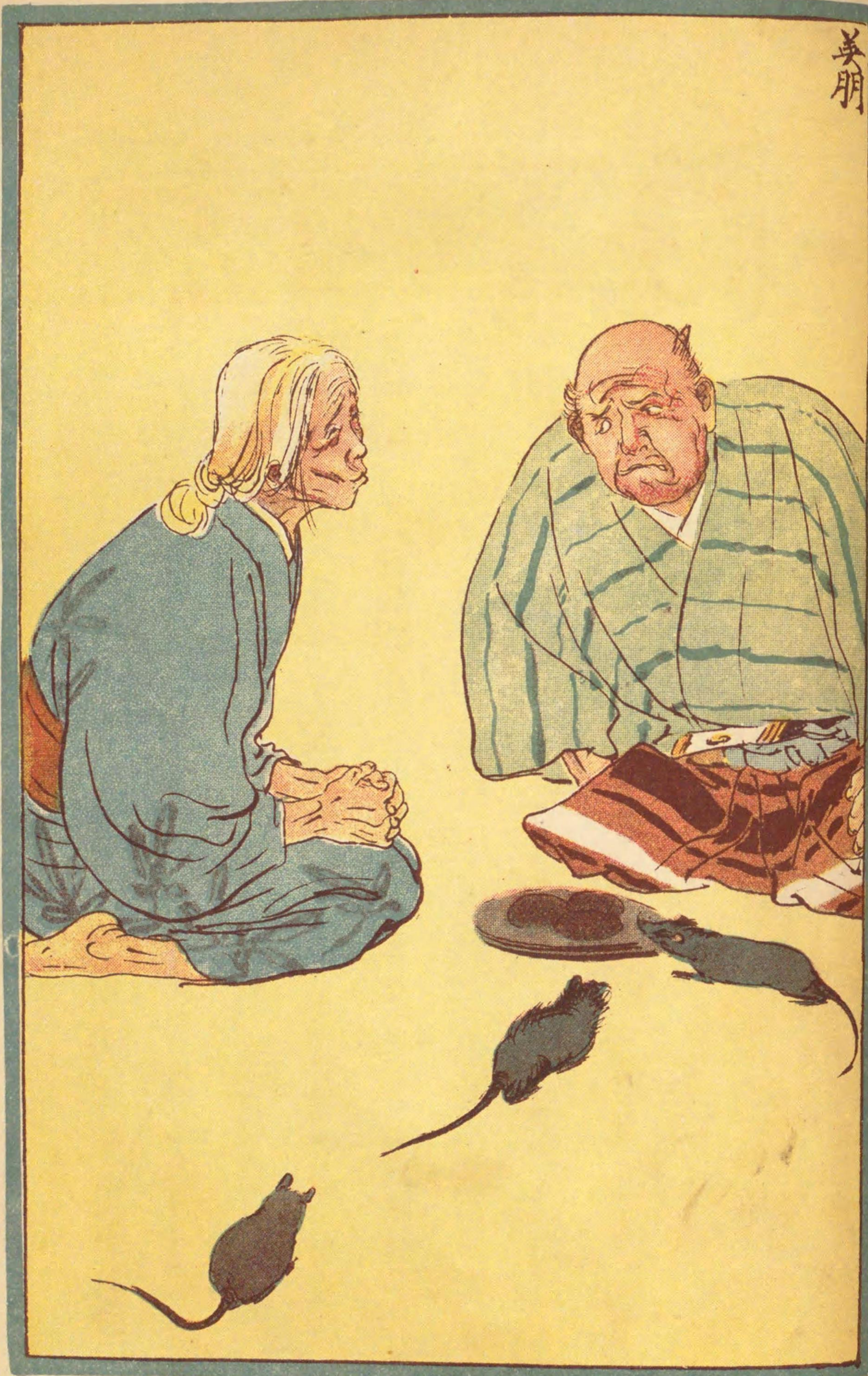
此の新聞わ忽ち市中に擴りました。人々わ

リネットを詐欺漢だと言ひ罵り、三日後にわ牢
 屋に這入つて居るか、斷頭臺に載つて居るたる

うと豫言して居ました。けれどもリネットわ
 何んな悪口にわ耳を借しませんでした。

四日目の朝王様わお目覺めになると、リネッ
 トの言葉わ嘘か誠か見ようと、思召して、足を出

してお検めになりました。成程すつかり癒つ
 て居て、何處が傷口たか其の痕さえ見えぬので



す。そこで床に飛び下りて、部屋中をお駈け廻
 りになる、いろく滑稽な藝當をやつて御覽に
 なる、更に故障がございませぬ。王様のお喜び
 又王女のお喜びの何んなであつたか、申さずと
 も皆さん御推察がつかましよう。
 それから八日、王女とリネットとの結婚の儀
 式が挙げられました。曩にリネットを罵詈
 た口わ茲に王様の萬歳と共に、又王世子及び其
 の妃の萬歳を歡呼して、世界を搔り動かしたの
 であります。めでたしく。



御伽團子

一 早呑込

むかし、自分の生れた村から餘處えわ一
足も踏出したことのない男が、一生の思出し
ようと、いので京參を致しました。別段伴も
なく、一人で行つたのでありましたが、途の分れ
つとで何方へ行つたものかと迷いました。す
ると折よく向うから人が來ましたので、
『もし、京都え上るのですが、何方え參つた

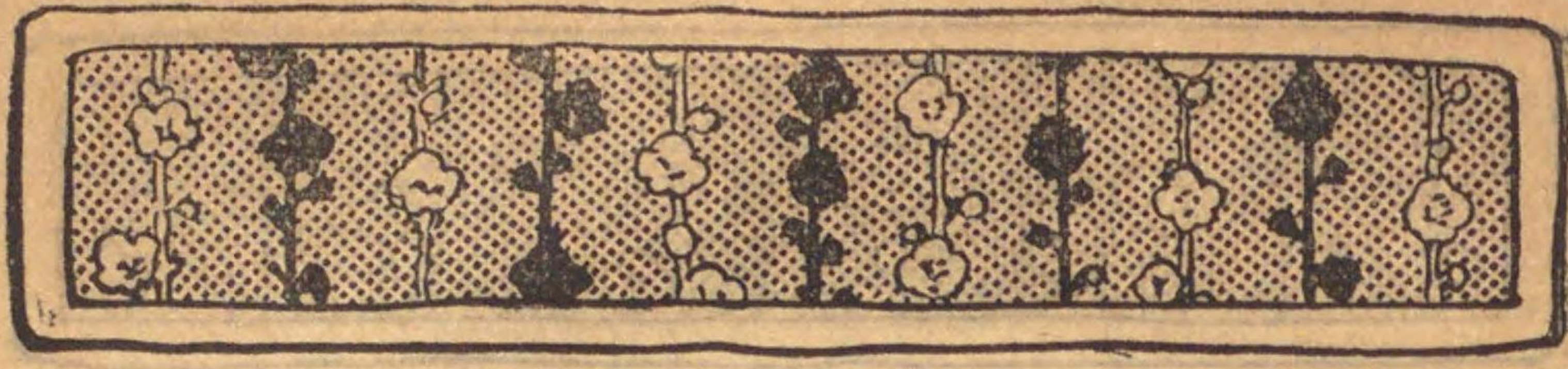


らようございましょう。

『御上洛でございませうか。それなら此方えお
出でなさい。』

『どうも有り難うございませう。』

と禮を述べて其方え参りましたが、『一里でも二
里でも京都え近くなれば、人の言葉もお上品で
面倒になる。上るといふことも上洛といふら
しい。忘れまい。』と思つて、口の中で上洛上洛
といひ乍ら行きました。今度わ向うから五六
人伴で、如何にも面白そうに話して來る人があ



ります。旅わ道伴と諺にもいいませうが、此方の
男わ其の道伴がないので、淋しくてく困つて
居るのでございませうからいきなり

『これわ皆様お揃で何方えお越でございませう。』
と尋ねますと、其のうちの一人が、

『あなたわ何方え。』

『私わ上洛の者でございませう。』

『上洛なさいませうか、今わ暑からず寒からず、ま
ことに結構な時でございませう。』

『皆様わ京からお下りでございませうか。』





『左様下洛の者でございませす。』
 これを聞いて、下ることわ下洛というものと心得て進んで参りました。
 五六里参りますと、道端に家の普請があつて、
 丁度土臺石を礎える所でございませす。七八
 人の者が『ヨイサク』と囃して居ま
 す。それを聞いて、石のことわそういうものと
 心得てしまいました。それから一里程行くと
 今度わ魚屋の店先に鱒の頭がつるしてありま
 した。それを『此の鱒わいくらですか。』と人の尋



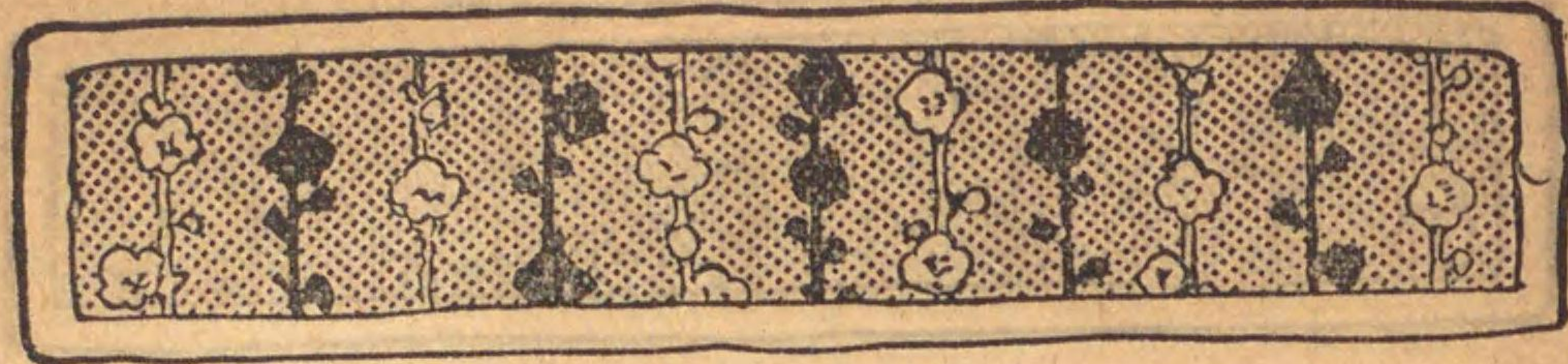
ねるのを聞いて、頭わぶりというものと又早呑
 込をしてしまいました。
 さてめでたく京都え着きました。何から何
 まで皆珍しい物ばかりでございませす。其のう
 ち取り分け目についたのわ、自分の村でわつ
 見たこともない朱塗の膳碗が、或る店に列べて
 あつたことでした。立止つて見て居ると、人が
 其の店え立寄つて、
 『其の朱碗朱膳わ十人前でいくらです。』
 と尋ねました。すると此の男又早速のみこん



五十六
 て赤いことわ朱椀朱膳なるほど京都わ別だ、一
 寸のこともでもむづかしくいう、忘れまい、國
 え歸つてお友達に話してやるうなどと喜んで
 参りました。すると今度わ麻の衣に黄の袈裟
 つけた托鉢の坊様が家毎に
 『二十三夜愛宕山白雲寺御報謝』
 といつて廻つて歩くと、どの家でもおあしやお
 米をくれるので、くれるということわ『二十三夜
 愛宕山白雲寺御報謝』というのか、ちと長たらし
 いが、これも都の風とあれば真似をしようとする



五十七
 つかり覚えこんでしまいました。
 扱て十日許に京見物をすまして、國許え歸り
 ました。が、國許の父親わ可愛いく一人息子が
 今日歸ると聞いて、待遠しくて、待ちきれず、
 庭先の大きな柿の木え上つて向うを見て居た
 のでございしました。村外れえ息子の姿が見え
 ると、やれ嬉しや無事息災で歸つたか、早くあの
 顔が見たいと、急いで柿の木を下りる拍子、踏み
 外して眞逆様にどろと落ち、木の下に石に頭を
 打つて氣を失つてしまいました。血わもろも





ろと流れます。そこえ息子が歸つて来て『大變
 く』と騒ぎ立て、『何わともあれ、お醫者様』と直に
 其の足で醫者の所へ駆けつけました。が、そこで
 述べた口上が面白い。

家のおやじこと、柿の木に上洛いたし、下洛し
 てヨイサくくで鯉を打ち、朱腕朱膳の血がも
 ろもろと出て候。薬一服二十三夜愛宕山白
 雲寺御報謝。

二 困つた小僧



南風が吹いて、何となくむし暑い日のこと、山
 寺の和尚が法事に招かれて、小僧と大きな池の
 端を通りますと、一尺餘の鯉が何匹ともなく浮
 いて居ました。小僧早速之を見て、

小『和尚様、大きな鯉が浮いて居ます、昨夜こつそ
 り食べた魚の倍もございます。』

和『これ小僧、出家わかりそめにもそんな事わい
 うものでないぞ。見ても見ない振をして居
 れよ。』

小『見ても見ない振をするのでございますか。』



和『そうだ、それが出家の道だ』

小『はい、これからわ氣をつけまする。』

日わかんと照りつける、むし暑い風わます
ます吹いて汗が止め度もなく出ますので、和尚
わ頭巾を脱いで汗を拭きく、参りましたが、何
時の間にか、頭巾を落してしまいました。彼是
三四町も行った頃に氣が附いて、

和『さあ大變、頭巾を落した。』

小『落ちたのわ、ずつと後の杉の木の下でござい
ました。』



和『馬鹿め、落ちたら落ちたとなぜいわぬ。』

小『見ても見ない振をして居りました。』

和『馬鹿め、見ない振も時による。これからわ落
ちた物わ拾つて來い。』

小『畏りました。』

和『其の杉の木の下え行つて拾つて來い、別段人
にも逢わないから、まだそこに落ちて居よう。』

小『それでわ行つて参ります。』

和『おう、急げく。』

和尚道端の石に腰打掛け、『馬鹿にわつける薬



六四
 わない。乗降りといふことがまるで分らぬ、困
 つた小僧もあればあるものと。』といひ乍ら、胸
 をひろげて扇ではたく、やつて居ると、やがて
 小僧がやつて来た、見れば金欄の頭巾の中に、馬
 糞やきれ草鞋がうんと詰めてある。

和『これ小僧、これわなんだ。』

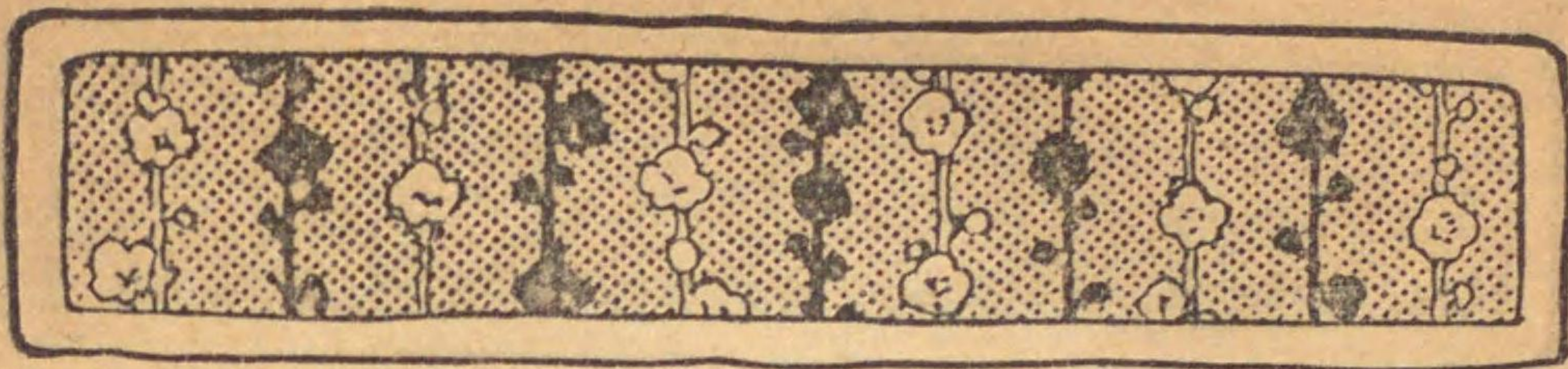
小『落ちてた物を拾つて来たのでございます。』

三 にならみ競

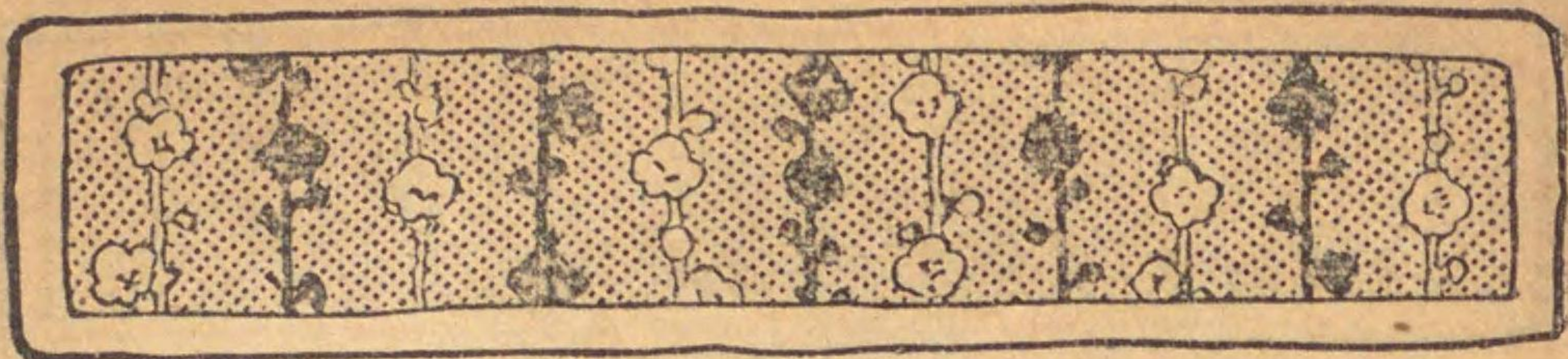
爺婆二人で、夕飯わ少し足りないが、炊くのも



面倒だ、寝ることにしようといつて居る所え、隣
 の家から牡丹餅を三つ貰いました。二人で一
 つづつ食べたので、わ一つ餘るし、二つつつ食べ
 るのにわ一つ足りません。そこでにならみ競を
 して笑つた者わ負、負けた者わ一つ、勝つた者わ
 二つ食へることによしようといふので、にならみ競
 を始めました。爺わ婆に笑わせようと思つて、
 額に八の字を寄せて見せたり、片眼になつたり
 します。が、婆わ一向笑いません。婆も亦あかん
 べをしたたり、泣面をしたたりして見せませんが、爺わ



笑いそうにも致しません。あんまり家が静かなので、天井から鼠が三疋下りて来て、其の餅を引いて行きました。二人ともそれを知らずに居ます。其のうちに爺がくしゃみをすると、大事な入歯がびよいと飛出したので、二人とも一緒にふき出してしまいました。扱て勝負無しだ、一つ半づつ仲よく食べようというので餅を見れば一つもない。二人わ眼を圓くして『おやおや。』



四 御手許く

これも昔のお話、ある金持の家のおかみさんが、煙草の吹売を膝の上に落しました。が、とんと氣づかないで居ました。下女わ釜からお櫃へ御飯を移して居て、これを見つけましたが、『家のおかみさんてば、何時もめかして、びらしやらして居て、召使の者わ犬か猫とでも思つて居るのか、一度でも親切にしたことわない。大きな焼穴になればいい。』と許りて其方許り見て居





て、御手許が留守になつて居ます。

此の時下男わ庭先で草鞋を造つて居りました。下が下女の御飯をお櫃の外え移すのを見て、『あの下女め、不斷おしやべりばかりして、ある事ない事を旦那に告げる奴だ。御飯をみんなこぼして叱られれば面白いが。』と思つて其の方許り見て居ます。

椽側にわお出入の髪結が来て居て、番頭の頭の中剃をして居ましたが、これを見つけて、『あの下男め、力自慢ばかりして、どうかするとよく



人の頭をなぐりつける奴だ。途方もない草鞋を造つて、此の番頭さんに叱られればよいが。』とこれも手許を忘れて居ます。

其のうちにおかみさんの膝に落ちた吹売が焼け抜けて、『おや熱い』と揉み消す頃、女わ御飯を半分餘りも臺所の土間に、下男草鞋にわ乳がなくて二尺程もあり、髪結わ眠つた番頭の頭を圓剃にしてしまいました。とかくお手許が肝心。